ダンジョンで無双するのはおかしいだろうか

倉崎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は、ある事件で自分の主神を手にかけた。

彼が所属していたのは【ヴリトラ・ファミリア】。その【ファミリア】は主神が死んだのと同時に解散となった。

それから数ヶ月が経ち、少年は新たな【ファミリア】に加入する。その【ファミリア】の名前は【ヘスティア・ファミリア】。

主神一人、構成員一人の【ファミリア】を助けるべく、少年は今、手に持った大太刀でモンスターを狩る。

これは彼らのもう一つの【眷属（ファミリア・ミイス）の物語】

アイズが可愛すぎて衝動的に書いてしまったものです。原作との矛盾点もあるかと思います。

暇つぶし程度でお読みください。

アナザーみたいなものです。

すみません、全く投稿出来てないので一時凍結という形をとらせていただきます。誠に勝手ながら、申し訳ありません。

目次

キャラ紹介 …… 1
冒険者
一話 …… 4
二話 …… 11
三話 …… 17
四話 …… 24
五話 …… 30
六話 …… 35
七話 …… 41
八話 …… 49
怪物祭
一話 …… 55
二話 …… 62
三話 …… 67
四話 …… 73
五話 …… 78
六話 …… 83
七話 …… 89
八話 …… 94
魔剣／サポーター
一話 …… 100
二話 …… 106
三話 …… 113

十話 153
九話 147
八話 141
七話 134
六話 128
五話 123
四話 117

キャラ紹介

アルス・レイカー
愛称：アル
年齢：１７歳
身長：１７６センチ
体重：６６キログラム
種族：ヒューマン
容姿：栗色の長めの髪に碧眼をもつ美少年。
黒色のロングコートを着て、紫色の手甲、胸当てを装着している。
最も目を引くのは柄が紫色で鍔が銀色の大太刀。
性格：面倒見がよく、優しい性格。けど、怒ると怖い。あと恐い。少しヘタレ。

【ステイタス】
Ｌｖ．６
力：Ｓ　９３０　耐久：Ａ　８４０　器用：Ｓ　９０３　敏捷：Ｓ　９７２　魔力：Ａ　８０９

《魔法》
【転移魔法】
・生物以外ならなんでも転移できる。
・詠唱式【転移（シフト）】
・脳内で物体を指定すること。

《スキル》
【刀神斬殺（ゴッド・リーパー）】
・早熟する。
・刀を持ち続ける限り効果持続。
・精神を研ぎ澄ませることにより効果向上。
・基本アビリティ、力を補正。
・神を殺すことが可能。
武器：大太刀、小太刀二本

大太刀：倶利伽羅（クリカラ）
不壊属性（デュランダル）付き。
【ゴブニュ・ファミリア】作。一億ヴァリスかかっている。
紫色の柄に銀色の鍔を持った仄かに紫色がかった白銀の刀身。モンスターを狩るのに特化している。破損することはない特殊武装（スペリオルズ）。
小太刀：黒雷（コクライ）
不壊属性付き。
【ゴブニュ・ファミリア】作。二本で一億ヴァリス。
二本とも同じ形。全体黒一色の小太刀。基本二刀流で扱うため重くなく、軽い。倶利伽羅と同様にモンスターを狩るのに特化している。倶利伽羅と同じで破損はない。
剣技（少しだけ）：一ノ型・紫電。光の速さのような強烈な突き技。二刀流時は二撃。
二ノ型・睡蓮花。V字のように斬る技。二刀流時はW字に斬る。
三ノ型・陽炎。カウンター技。一瞬で横一閃する。二刀流時は二閃する。
型は十まである。奥義もあるが、他人に見せたことは一度もない。

アイズがある時、ダンジョン攻略中に単独で大量のモンスターを屠った後、注意を疎かにしたことでモンスターに襲われそうになったところを救う。
それから度々会う内にアイズから好意を持たれる。
アイズの好意は気付いているものの、ヘタレが出てしまい、答えられないでいる。アルスもアイズのことは好き。

【ファミリア】
【ヴリトラ・ファミリア】という【ファミリア】に所属していたが、ある事件で主神が死に、【ファミリア】は解散された。
後に【ヘスティア・ファミリア】に加入。【ステイタス】は何故か分からないがそのまま引き継がれていた。
ベルは弟的な存在。ヘスティアは駄神呼ばわり。それでもちゃん

と養っている。

おまけ

ア「なんか、タイトルの無双ってあるけどそれ程でもないな」
うん、それは私も思ったよ。でもね、《スキル》の効果持続を見てみなよ。刀を持ち続ける限り、だよ？　これはある意味で凄いと思わないかい？
ア「……まぁ、そうだけど。ベルより弱いと思うぞ？」
ベ「えぇ!?　そんなことないと思いますけど？」
ア「ベル、慰めはいい。正直に言ってくれ、弱いと」
なんでそんなに弱いって言ってもらいたいの？　Mなの？
ア「違うわっ！　弟的な存在であるベルより弱かったら守れないだろうが！」
アイズ「大丈夫、それならアルは私が守る」
アルス「待て、なんでお前がここにいる!?ここには駄作者とベルと俺しかいないはずだぞ!?」
ベ「あ、ヴァレンシュタインさん！　ど、どうも！」
お、アイズさん来たね。アルス君、アイズさんを呼んだのは私なのd――
アルス「お前が呼んだのかぁぁ!!」
わー！　太刀で斬らないで!!　死ぬから！
アルス「死ねクソがァぁ!!」

冒険者

一話

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか？

自分より三つ下の少年にそう問われ、俺は即答した。

「間違いだ」

苦笑いを隠さないで、俺は少年に言った。問いかけた少年――ベル・クラネルはがっくりと肩を落とした。

この問いかけは数週間前のことだ。

現在俺は、迷宮都市オラリオにあるダンジョンの17階層にいた。

小太刀二本を腰に帯刀して歩いていると、モンスターの咆哮が聞こえた。それに続き剣戟も。

「誰がいるのかなぁ。まぁ、関係ないけど」

早くここら辺片付けてベルと合流しないとな。あいつ怪我しなかったらいいけど。

そう思っていると、咆哮と剣戟がだんだん近くなってくる。

『ヴヴォォォォォ!!』

「おらぁぁ！」

獣人の青年がミスリル製のメタルブーツで牛頭のモンスター、ミノタウロスを蹴り飛ばした。

その直後、その青年の目が俺の目と合った。

「おい、アルスじゃねぇか」

「……な、ナンノコトカナ」

彼の名前はベート・ローガ。狼人（ウェアウルフ）の冒険者だ。

ベートは仲間に後を任せて、ズカズカと俺に近づいてきた。

「おいおい、何とぼけてんだ？　お前の姿は目立つからな。ある意味で」

ニヤニヤと笑うベート。俺は少しうんざりした気分で言った。

「ある意味で、は余計だ。黒の何が悪い」

俺の姿は黒のロングコートに紫色の手甲と胸当てを付けている。

それに柄が黒い小太刀二本を帯刀しているだけだ。
「いやぁ？　いいんじゃないか、どーでも」
「……何が言いたいんだベート」
イライラ、とうっすら青筋が出そうなほど俺は苛ついていた。
こいつがいるってことは【ロキ・ファミリア】だ。こんな深い階層にいるなら遠征だろう。ということは、あいつが――
「アル？　どうしてここに？」
「っ!?　……あ、アイズ……」
ゴクリと固唾を飲んで、俺はベートの後ろを見た。そこには女神のような美少女がいた。
蒼と白の軽装で、自己主張をする胸を胸当てで押さえている。髪は真っ直ぐ伸びた金髪で、瞳は金色だ。
「アル、冒険者にまたなったの？　どこの【ファミリア】に入ったの？」
【神の眷属（ファミリア）】とは、簡単に言うと、神様による派閥のことだ。例えば、この目の前の美少女、【剣姫（けんき）】アイズ・ヴァレンシュタインはロキという神様の【ファミリア】に入っていて、その【ファミリア】の名前は【ロキ・ファミリア】という。
冒険者は神様の『恩恵』がなければダンジョンに潜ることは出来ないのだ。『恩恵』がないその他の人々は色々な商売をすることになる。
俺はある事件で、所属していた【ファミリア】が解散されて、一度単なる人に戻った。しかし最近――というより約半月前だが――俺は、神様一人に構成員一人の【ファミリア】に入った。
「……別に、いいだろうそんなこと」
目を逸らして、俺は呟いた。だが、アイズは俺に詰め寄った。
「……気になる。教えて」
「……【ヘスティア・ファミリア】っていう小さな【ファミリア】だ」
間近にアイズの顔があり、俺はドギマギしながら口を割った。本当に俺ってお人好しだよな……
「……そう。でもよかった。アルがまた冒険者になってくれて」
少し、ほんの少しアイズは微笑んだ。僅か過ぎて表情の変化が分か

らないだろうが、間近にいるせいか分かった。

　直後、アイズとベートの仲間がミノタウロスを狩り損ねた。

『ヴヴォォ！　ヴゥムゥゥ！』

　ミノタウロスはもうスピードで俺達の方へ走ってきて、俺達を通り過ぎていって上の階層に上がっていってしまった。

　……上？

「ファっ!?　や、やばい。上にベルが！」

　確か、ベルは5階層に行くと言っていた。少しぐらいなら大丈夫だろうと思っていたが、ミノタウロスがそっち行ったらヤバ過ぎる。俺がヘスティアに殺される。

「じゃあな、アイズ！　ベート！」

　俺は叫んで、上の階層へ走り出した。

　敏捷はＳ９７２もあるため、後ろから追いかけてくるアイズ達より速い。

　数秒後、ミノタウロスに追いついて、俺は小太刀二本を抜刀してミノタウロスの大きい背中を切りつけた。

　だが、

「ちっ！　浅いか……」

　浅かったらしくミノタウロスは上の階層へ逃げていった。俺の思考は、ある一つのことで埋め尽くされた。

　やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばい。

　Ｌｖ．１のベルにミノタウロスはキツ過ぎる。というより無理だ。

「クソ牛が！　逃げんなこらぁ……!!」

　俺の呟きが聞こえたかどうか分からないが、ミノタウロスは恐怖の声を上げた。

　そして、ミノタウロスはあっさり5階層についてしまった。もちろん、背中を切りつけているが、決定打になっていない。

　俺は走りながら周りを見てみる。すると、

「うわあぁぁぁぁぁぁぁ!!」

　前方に、ミノタウロスを見て全力疾走している白髪の少年を見つけ

た。あれはベルだ。
「ベル！　そのまま走ってろよっ！」
「え!?　アルさん!?　助けてくださいぃぃ!!」
「馬鹿！　振り向かないで走ってろ！」
　声をかけなきゃ良かった。そう後悔するが、後悔しても遅い。その前に、あのミノタウロスを倒さなければ。
　俺はふいに後ろを振り返った。後ろにはアイズが俺ほどではないにしろ、速く走っている。
「うわあぁぁぁ！　アルさんんん！　助けてえぇぇ！」
　ベルが、泣きながら逃げている。後もう少しで追いつきそうなのだが、如何せん確実に殺す間合いに入っていない。《魔法》は使えるが、あれは生物以外なので今は使えない。
　しばらく追いかけっこが続いていたのだが、ベルが行き止まりの方へ逃げてしまった。ミノタウロスはそんなベルを攻撃しようとしていた。
「間合いに入ったな……！　【転移（シフト）】」
　確実に殺すなら、スピードじゃなくパワーだ。
　俺は小太刀二本を転移させて大太刀を代わりに出した。紫色の柄に銀色の鍔。鞘は艶のある黒。そして、鞘走る刀身は仄かに紫色がかった綺麗な白銀。
「はあぁ!!」
　抜刀して、ミノタウロスを横一閃した。速く、綺麗に斬られて出血するのに誤差が生じるほどだった。
　ミノタウロスが倒れるちょうどに、アイズが到着した。綺麗に斬られているミノタウロスを見てアイズは目を瞬きさせている。それが、なんとも可愛……何考えてんだ俺。
「あ、アルさぁぁん！」
　涙を流して、俺にしがみつくベル。十四歳なのだから、こうやって泣くのも当然だろう。
「よしよし、怪我ないかベル？　」
「はいぃぃ」

鼻水を俺のコートに擦り付けるかのようにしているベルを見て、俺は苦笑した。
若干ミノタウロスの血がついてるけど、大丈夫みたいだな。……なんか後ろから視線が凄いな……
「アル。その子、大丈夫？」
「あぁ、大丈夫みたいだ。……というより、なんでお前は俺の太刀を見ているんだ」
「アルがこれ使ってるの見たことないから」
俺は太刀をアイズの視界から遠ざけようとすると、回り込んで見てくる。やめてくれ、近いから。
俺とアイズのやりとりを見ていたベルは、爆弾発言をしてきた。
「アルさんって、アイズ・ヴァレンシュタインさんとそういう関係だったんだ……！」
目をキラキラさせて、ベルは言ってくる。
ベルはダンジョンに出会いを求めている。まぁ、このくらいの歳にそんなことを思うのは仕方ないが、それでもベルは美少年なのに頭が残念みたいだ。冒険者の素質はあると思うのにな。
「違うからな。俺とアイズはそういう関係じゃない」
「……即答しなくてもいいのに」
アイズが少し不満そうに俺を見る。
俺だって美少女で強いアイズと、恋人同士になりたくないかと言われれば、なりたい。だが、残念ながら俺には釣り合わないだろう。
「違うんですか？　僕はてっきりそう思ってたんですけど」
「違う違う、こいつとは前にダンジョンで会って知り合っただけだ」
「……そこまで、否定する？」
冷ややかな視線を受けるが、俺は耐える。
だが、忘れていた。ダンジョンに出会いを求める人物が近くにいることに。
「ダンジョンで!?　アルさん、僕の質問に間違いだ、って言ったのに」
「……俺はお前と違ってダンジョンに出会いを求めてるわけじゃないからな。アイズはたまたまだ。それよりアイズ、俺達は帰るよ。

ベートに絡んでくるなって言っといてくれ、じゃあな」
「あっ……」
俺はミノタウロスから出てきた少し大きい【魔石の欠片】を拾って、ベルを連れて歩く。
アイズが何か言いかけたが、俺は黙って歩いて行く。
「……アルの馬鹿……」
……悪いな。気付いてるよ、お前の気持ちは。けどな、俺にはその度胸がないからな。
俺はそう思いながら、ベルと一緒に帰って行った。

♠???♣?♦?

「はぁ……本当に最低だな、俺は」
溜息をついて、俺は自分を卑下した。何をと言われれば、自分の度胸の無さだ。
俺はアイズとの会話のことを街を歩いている最中でもズルズルと引き摺っていた。
「アルさんってヴァレンシュタインさんのことを……」
ベルが怪訝そうに俺に訊く。俺は微笑んで、乱暴にベルの頭をワシャワシャ撫で回した。
「まぁ、な。でも俺は度胸もないし、それほど強くもないしな」
「そんなことないですよ！　アルさんは強いですから。特に、太刀を持ったアルさんは無敵ですよ！」
年下に慰められるのは、なんだか不甲斐ないな。てか、
「度胸がないのは否定してくれないのな」
「あ……」
「まぁいいけどさ……」
そんな話をしながら、俺達はダンジョンを運営管理する『ギルド』に入っていく。
すると、ベルのアドバイザーであるエイナ・チュールというエメラルドの瞳を持った、茶髪でセミロングのハーフエルフの女性が小冊子

を読んでいた。
ベルは小冊子を読んでいるエイナさんに声をかけた。大声で。
「エイナさぁあああああんっ！」
「うわ、うるせぇ……」
思わず耳を押さえる。ベルはそれほどの大声を出していた。
「ん？」
大声で分かったのだろう。エイナさんは小冊子から顔を上げた。
エイナさんは俺達というより、ベルの体を眺めみて怪我がないか確認して微笑んだ。
「エイナさぁあああああああああああんっ！」
だが、ベルの白髪と顔、腕に飛び散るドス黒い血を見てエイナさんの微笑みは崩れた。
「うわあああああああああああああ!?」
あまりの驚きにエイナさんは小冊子を放り捨てた。その小冊子が他の人にぶつかりそうだったので俺は《魔法》で転移させて机の上に置いた。
「聞いてくださいよぉおおっ！　アルさんとアイズ・ヴァレンシュタインさんって――」
「ベルぅううううう!?　お前は何言ってんだァああ!?」
ベルが口走りそうだったので俺は、転移で取り出した小石をベルの背中に向けて投げた。
「へぶっ!?」
見事にクリーンヒットして、前のめりに倒れた。
まったく、こいつは……!!　余計なことを言うんだから……！
前のめりに倒れたベルを見て、エイナさんは目をパチパチと瞬かせていた。

二話

「ベル君、キミねぇ、返り血を浴びたならシャワーくらい浴びてきなさいよ……」
「すみません……アルさんも、すみませんでした……」
「どーすっかな……」
「うう……」
俺とエイナさんの言葉に、ベルは項垂れた。
俺達三人はギルド本部のロビーに設けられた小さな一室にいる。俺とベルが隣に座り、エイナさんはテーブルを挟んで向かい合って座っている。
ベルは前のめりに倒れた後に、速攻で体を洗うように言われて、今はさっぱりしている。
「それで、アル君とアイズ・ヴァレンシュタイン氏がなんだって？」
エイナさんはニヤニヤした表情で訊いてくる。
そういえば、この人は以前に俺とアイズが一緒にいたところを見られていたか。決してやましいことはないのだが、このニヤニヤ笑いを見ていると言いたくない。
「えっと……あの……」
ベルは言いにくそうに俺を見てくる。俺は溜息をついてベルに言う。
「さっきのは周りに人がいたから石を投げたに過ぎないよ。それにエイナさんは知ってるから」
「そうそう、あの時はびっくりしたわ。ギルドの受付してたら、アル君とヴァレンシュタイン氏が二人だけで話してたんだから」
二人だけ、というところを妙に強調させて、エイナさんは話す。
俺はその時のことを思い出す。
確かあの時は、アイズがモンスターの大群を一人で屠ってたところに俺は居合わせたんだ。まさに一騎当千。綺麗な金髪をなびかせて、剣を振るう姿は凄く綺麗だった。

モンスターがいなくなった後に、気が緩んだのだろう。アイズは溜息をついて、剣をしまった後に一体のモンスターに襲われた。モンスターの腕がアイズに当たる瞬間に、俺が小太刀でその腕を撥ねて、斬殺したのだ。

そして、助けられたアイズは俺にお礼をしたいと言い出して、【ロキ・ファミリア】の行きつけの酒場に連れられたのだ。何がなんだか分からなかったが、仲間を助けた俺に【ロキ・ファミリア】の面々は快く接してくれた。ま、まぁロキは拗ねた表情してたけど。あとベートはガルル、って威嚇してたような。

翌日にギルド本部に行ったら、ちょうどアイズがいた、というわけだ。それでアイズと話していたところをエイナさんに見られていたのだ。

「なぁんか、仲良さげだったよね、アル君？」

ニヤニヤと笑って話しかけてくる。そんなに仲良さげに接していただろうか？　いやしてないよな。だって知り合って一日しか経ってなかったし。

「その時はそこまで仲良くないですよ」

「そこまで？　じゃあ、今は？」

失言だった、と俺は思った。ベルも気になるのか俺の方へ顔を向けている。

溜息をついて正直に言う。

「現在、アイズとはなんも……今日久しぶりに会ったぐらいだし」

「とか言いながら、どうせ逢い引きしてるくせに」

「エイナさん、そろそろ俺キレていいですか？」

俺は頬を引き攣らせてエイナさんに問いかける。ベルは俺が怒った時のことを知っているからか、若干距離をとっている。

「そういえば、アル君がキレたところ見たことないかも知れないなぁ」

じゃあ、そのキレたところを見せてあげましょうか？　エイナさん？

内心そう思っているが、俺はエイナさんに頭が上がらない。初心者の時にアレコレ指導してもらってたからだ。

「はぁ……もういいデス」
やっぱり頭が上がらない、と俺は諦めて項垂れた。そんな俺にエイナさんは、ヴァレンシュタイン氏のどこに惚れたとかなんか言ってくる。
「ほら、吐きなさい」
この人どんだけSなんだよ。凄い笑顔だし。そこら辺の男なら普通に堕ちるんじゃないの？
「……引かないって言うなら言いますけど」
「うんうん。引かないから、言って言って」
あ、これ引くパターンだよな。引かないからって言いつつ、聞いた瞬間に引くんだ。大抵の奴らはそういうことをする。まぁ、ベルは引かないと思うけどな。大抵の中に入ってないから。
俺は恥ずかしい気持ちを押し込めて、無感情にアイズに惚れたところを述べる。
「まず容姿からで、あの綺麗な金髪が凄くいいと思うんですよね。一度あいつのこと撫でたんですけどその時の触り心地は最高でした。顔は文句なしの美少女。無表情ですけど、ほんの少しの変化が凄く可愛いと思います。あとは首を傾げる時とか」
「ヴァレンシュタインさんを撫でたことあるんですか、アルさん!?」
凄い、とベルが感嘆の声を上げる。エイナさんは俺の平坦な声を聞いて、え？　と目をパチパチと瞬かせている。
「次は性格ですかね。あいつって天然で口下手なんですよ。それでも仲間思いで、危険があったらすぐ助けに行くような感じがいいと思います。あとは、暇さえあればダンジョンに潜ろうとするところとジャガ丸くんの小豆クリームが好きだというところが共感できますね」
以上、と俺は締めくくった。長く喋るのはあまりしないから疲れた。
俺はエイナさんの方に目を向けると、エイナさんは数秒固まった後に、おぉと声を上げた。
「恥ずかしがって言ってくれると満点だったけど、素直に言ってくれたからまぁいいわね。そんなに惚れてるなら告白したらいいのに」

うんうん、とベルも頷く。確かに、今みたいに平坦に喋ればなんとかなりそうなものたが、平坦だと気持ちは伝わらないと思う。それに、

「俺に度胸があれば、もう既に告ってますよ」

苦笑いを浮かべて遠くを見る。エイナさんも理解したのか、あはは と笑ってしまっている。

というより、エイナさん引かなかったな。俺が女の人だったら絶対ドン引きしてる。

「はぁ……疲れたんで、換金して帰ります。それに、職務と関係ないでしょう」

「あ、そうだった」

「そう言われれば、そうだったね」

俺がそう言うと、ベルも思い出したように呟いた。エイナさん、貴女はちゃんと仕事してください。

換金するのはミノタウロスなどから落ちる【魔石の欠片】だ。大きさによって換金される金額が変動する。アイズ達に会うまでに色々狩ってたから大きいやつもあれば小さいやつもある。それに、ミノタウロスから落ちた『魔石』は結構大きかったから、いい金額になるだろう。

一人だったら5階層以上行けるんだが、ベルもいるからあんまり行けないんだよな。

それから俺達はギルド本部内にある換金所に向かって、今日の収穫を受け取った。

「うーん……」

ベルが小さく唸った。ダンジョンに潜っていた時間が短かったから、それほど金が多くなかったのだろう。

ベルの手の中を見てみると、金色の丸いものが一枚と暗い金色の小さい丸いものが二枚だった。ってことは、一二〇〇ヴァリスくらいか。

俺の方を見てみれば、結構な数のモンスターを狩っていたことをプラスしてミノタウロスを狩ったので、一万一〇〇〇ヴァリスだ。

俺はベルの方へ体を向けて、金の半分を無理矢理持たせた。
「え？　アルさん？」
「山分けだ。流石に武器の整備と食事、アイテムの補充はしておかないともたないからな」
「アルさん……！　ありがとうございます！」
「はいはい、感謝し尽くしてくれ」
俺は笑ってポンポンとベルの頭を叩く。
こいつが立派になるまで支えたいね。こう、冒険者の先輩として助けたくなる。
「アル君」
「ん？　なんですかエイナさん？」
帰り際に出口まで見送りに来たエイナさんに引き止められた。
エイナさんはニヤニヤした笑いを浮かべて俺に何かを渡してきた。
「はい、これ。ヴァレンシュタイン氏からよ」
「ハ？」
素っ頓狂な声を出してしまった。頭の中が混乱している。
そんな俺を他所に、エイナさんは話を進める。
「本当は一昨日預かってたんだけど。ほら、一昨日と昨日ってアル君来なかったでしょ？　それで渡せなかったの」
渡されたものは四角い箱に入っていた。非常に嫌な予感がする。間違いなくここで開けちゃダメだ。
「ほら、開けないの？」
「僕も気になります」
エイナさんとベルがニヤニヤと笑ってくる。というか、なんでベルもそっち側なんだよ。
どうとでもなれ、と俺は思って箱を開けてみた。
「指輪？」
ベルが首を傾げた。まぁ、ただの指輪に見えなくもないが、これは装備用の指輪だ。装飾品の指輪じゃない。
ダイヤの形をした蒼い宝石がついた指輪を俺は眺めて呟いた。
「あいつ……俺はいらないって言ったよな……」

俺がまだ単なる人になる前に、俺はアイズに敏捷が上がる指輪を上げた。その時に、俺にも何かを上げると申し出てきた。もちろん俺は断ったのだが……まさか、今日貰うことになるとは……

それに手紙まであるし。

『力が上がる指輪。ほとんどアルがくれたのと同じ質だから』

手紙まで簡潔だなオイ。だが、まぁ、力が上がるのは正直嬉しいところかな。有り難く付けさせてもらおう。

「あ、ちなみにヴァレンシュタイン氏は左手の薬指に付けてたよ？」

なに爆弾発言してんですかぁぁぁ!? 冗談だよね？ 冗談って言ってくださいお願いします！

「冗談だけどね」

「わ、笑えない……」

もう疲れた。この人どんだけ俺を弄るの好きなんだ。ベルもベルで、そんな羨ましがった目で見ないでくれ。

俺は折角貰ったので、指輪を右手の中指に付けることにした。

そういえば、あいつ、太刀も見てたけど手も見てなかったか？

……悪いことした、かな。

「ベル君も、ヴァレンシュタイン氏みたいな強い人に憧れるのなら、もっと強くならないとね。そうしたら、振り向いてもらえるかもよ？」

エイナさんはベルにそう言う。ベルは言われたことを理解したと思ったら、エイナさんに笑顔でこう言った。

「ありがとうございます！ エイナさん大好きー！」

「えうっ!?」

そう言った後に、ベルは走っていった。後ろを振り向いて見れば、エイナさんは顔を真っ赤にしていた。

……ベルって年上キラーかもな。

俺はそんな他愛ないことを考えながら、先に行くベルの後を追った。

三話

俺達の住むこの都市の名前は、迷宮都市オラリオ。
『ダンジョン』と通称される地下迷宮の上に築き上げられた巨大都市だ。
大雑把に説明すれば、『ギルド』を中核にしてこの都市は、ヒューマンを含めて様々な種族の亜人（デミ・ヒューマン）が生活している。
ダンジョンに潜り、モンスターを狩って得た収入で生計を立てる人達を冒険者という。冒険者以外にも、ちゃんと仕事をしている人達もいる。まぁ、駄神様もちゃんとアルバイトしてるしな。
かく言う俺も、単なる人になった時は【ロキ・ファミリア】行きつけの酒場でアルバイトをしたものだ。
俺とベルは、人気のない路地裏深くに行く。そこに建っているのは廃墟みたいな教会。
その中に入っていって、一番奥にある棚の裏にある地下へと伸びる階段を下って行き、目の前にあるドアを開ける。
「二日ぶりのただいま～」
「神様、帰ってきましたー！　ただいまー！」
俺は疲れたように言い、ベルは声を張り上げて足を踏み入れた。広がるのは地下室とは思えない生活感溢れる小部屋だ。まぁまぁの広さだと俺は思う。
ベルが呼びかけた人は、部屋に入ってすぐある紫色のソファーの上で寝転がっていた。仰向けの姿勢だった彼女は、ばっと起き上がった。
「やぁやぁお帰りー。今日はいつもより早かったね？　アル君は二日ぶりだね」
「二日ぶりだな、駄神様。ちょっとベルが死にかけてな」
「駄神様言わないでくれよ。ベル君大丈夫かい？　君に死なれたらボクはかなりショックだよ。柄にもなく悲しむよ」
駄神様もとい、ヘスティアは小さな手をペタペタとベルの体に触れ

て、怪我がないか確かめている。
その気遣いに照れたのか、ベルは頬を染めている。
「大丈夫です。神様を路頭に迷わせることはしませんから。それに、アルさんもいますから」
「分からないよ？　アル君はこう見えて薄情者だからね。ロキのところに行きかね――」
「行かないっての。とくにロキのところにはな」
俺がそう言うと、ベルはあーと納得した顔になった。
俺達二人の目の前にいるこの少女は、神様だ。俺達に『恩恵』を授けてくれた人である。俺より上の冒険者達、まぁ英雄みたいな人達よりスゴーい御方なんだ。
「それじゃあ、今日の君達の稼ぎはあまり見込めないのかな？」
「いつもよりは少ないですね」
「まぁ、な。一応二人で一万ヴァリスはあるが……。ヘスティアは？」
「ふっふーんっ、これを見るんだ！　デデン！」
「そ、それは!?」
ベルが目を見開いて声を上げる。
「ジャガ丸くんだな。小豆クリーム味ある？　ヘスティア？」
「露店の売り上げに貢献したということで、大量のジャガ丸くんを頂戴したんだ！　もちろん、小豆クリーム味もあるよ！　夕飯はパーティーだ！」
「神様すごい！」
「神様すごいなー」
ベルは嬉しそうに言う。俺は棒読みで褒める。まぁ、本当にすごいことだ。こんな大量に貰ってきたんだから。
その後、俺達はジャガ丸くんでパーティーをすることになった。

♠???♣?♦?

「さて、夕飯も食べたことだし、君達の【ステイタス】を更新しようか！」

「はい！」
「二日でどれくらい上がってるんだか」
　一昨日と昨日は俺はずっとダンジョンに籠っていた。Ｌｖ．６になり、【ステイタス】もほとんどがＳなので、俺の【ステイタス】は微々たる上昇しかない。だから俺はダンジョンにひたすら潜って、ソロで深い階層のモンスターを狩っている。あ、一昨日と昨日の『魔石』換金してない。明日するか。
　更新はベルが先に行うことになった。ベルは上半身の服を脱いでベッドにうつ伏せに寝た。
「そういえば死にかけたって言ってたけど、何があったんだい？」
「ちょっと長くなるんですけど……」
　ベルが口を動かしている間、ヘスティアはベルの背中を撫でた。その背中にあるのが【ステイタス】だ。それを書いてある文字を【神聖文字（ヒエログリフ）】という。【神聖文字】はヘスティア達、神様達しか読めない。いや、極一部の者達も読める。まぁ、その極一部に俺も入っているんだがな。
　たまたま、アイズの【ステイタス】が見えて器用と魔力の次に敏捷が長けていたから、敏捷が上がる指輪をあげたんだし。決してストーカーとかじゃない。偶然だ。
　とかなんとか考えていると、ベルの更新が終盤を迎えている。ヘスティアは自分の指に針を刺して、滲み出る血をそっとベルの背中に落とした。
　血は比喩なしで波紋を広げて、背中に染み込んでいった。
「出会いを求めて下の階層って……アル君、なんで君は止めなかったんだい？」
「俺は結構深い階層に行ってたから」
「保険代わりの君がいるというのに……まぁいいよ。この通り、ベル君は無事なんだから」
【神聖文字】を弄って、ヘスティアは言う。
「それで、アイズ・ヴァレンシュタイン、だっけ？　アル君の近くにいた人。その人だってお気に入りの男の一人や二人いるに――」

「駄神様？　無駄口叩いてないでさっさと更新しような？」
ヘスティア、お前は地雷を踏んだぞ？
俺は笑顔でヘスティアに言う。　ヘスティアは【ステイタス】の更新をしているためこちらに顔を向けられないが、雰囲気で分かったのだろう。少し震えている。首をひねってこちらに顔を向けているベルの表情は引き攣っている。
「……はーい……。でも、ベル君。出会いを求めてダンジョンに行こうなんて、危険だよ」
返事をして、ヘスティアはベルに警告した。どことなく機嫌が悪いように聞こえるのは気の所為じゃないだろう。なにせ、この駄神様はベルにゾッコンだからな。
「神様何か怒ってません？」
「怒ってない！」
いや、怒ってるだろ。誰が聞いても怒ってるわ。
「ま、他の【ファミリア】にいる時点で、ヴァレン某や他の女とは婚約できっこないけどね」
「……」
「……だよな……」
俺とベルは止めを刺された。
あぁ、分かってたさ。この駄神様は他の神様達と仲悪いからな。とくにロキ。その次にフレイヤ。一番仲がいい神様なんて、ヘファイストスぐらいなんじゃないか？　こんなことなら、ロキに誘われた時に加入すれば……いや、それもないな。有り得ない。
「はいっ、終わり！　まぁそんなこと忘れて、すぐ近くに転がってる出会いってやつを探してみなよ」
「……酷いよ神様」
……確かに、すぐ近くにいるよな。このツインテールでロリ巨乳の神様が。まぁ、神様に手を出そうとは誰も考えないだろ。
ヘスティアはベルに用紙に書かれた【ステイタス】を手渡した。
俺もベルの【ステイタス】を見る。
ベル・クラネル

Ｌｖ．１
力：Ｉ　７７→Ｉ　８２　耐久：Ｉ　１３　器用：Ｉ　９３→Ｉ　９６　敏捷：Ｈ　１４８→Ｈ　１７２　魔力Ｉ　０
《魔法》
【】
《スキル》
【】
うん。敏捷の上がりが凄いな。２４も上がってるぞ。あと、相変わらず魔力は０なのな。
基本アビリティ――『力』『耐久』『器用』『敏捷』『魔力』の諸項目――は五つ。更にＳからＡ、Ｂと続きＩまでの十段階で能力の高低が示される。この段階が高ければ高いほど俺達冒険者の能力は強化される。
英文字の隣の数字は熟練度だ。０～９９がＩ、１００～１９９がＨ、というような感じで基本アビリティの能力段階と連動している。ちなみに９９９が上限。Ｓに近付くにつれて伸びは悪くなる。俺もよくもまぁ、Ｓに行くまで頑張ってたものだな。
あとはＬｖ．だな。これは一番重要。一つ上がるだけで基本アビリティ補正以上の強化がされる。簡単に言えば、Ｌｖ．１のベルがＬｖ．２のミノタロスに対して大負けすることだ。もしくは死ぬ。
「……神様。僕、いつになったら魔法を使えるようになると思いますか？」
「それはボクにも分からないなぁ。主に知識に関わる【経験値（エクセリア）】が反映されるみたいだけど……ベル君、本とか読まないでしょ？」
「はい……」
【経験値】とは、その名の通り経験したことだ。例えば、俺が太刀でモンスターを斬るとする。それが経験となり、【ステイタス】に反映される、となる。まぁ、俺もそこら辺は曖昧だがな。
「アルさんは魔法を使えますよね。どうやって使えるようになったんですか？」
「ん、俺はあまり荷物を多く持ちたくなかったんだ。だから転移系の

魔法が載った本を読み漁ったな。本を読むのは好きだし」
「やっぱり本か……」
「まぁでも、別に本だけじゃないから。安心しろよ」
はい、とベルは項垂れて用紙を再度見た。
そこで俺は用紙に違和感を覚えた。ベルもそれに気付いたみたいだ。
「神様、このスキルのスロットはどうしたんですか？　何か消した跡があるような……」
「ん、あぁ、手元が狂ったんだ。いつも通り空欄だから」
ベルはカクン、と頭を下げてデスヨネーと言った。
「はぁ、すぐ強くなる方法ってないのかなぁ……」
そう呟いてベルはベッドから降りて、歯を磨きに行った。
さて次は俺の番だ。
「さてさて、お次はアル君だね。上脱いでね」
「はいはい」
俺は上半身の服を脱いでベッドにうつ伏せに寝た。ベルに対してやったように、ヘスティアは俺の【神聖文字】を書き替える。
しばらく経ち、更新は終了した。凄くくすぐったいから出来れば早めにやって欲しかった。地味にこういうところがSだよなヘスティアって。
「どれどれ？　……全然上がんねぇのな」
「まぁ、君はほとんどSだしねぇ」
アルス・レイカー
Ｌｖ．６
力：Ｓ　９５０→Ｓ　９５１　耐久：Ａ　８４０→Ａ　８４１
器用：Ｓ　９０３→Ｓ　９０４　敏捷：Ｓ　９７２→Ｓ　９７４
魔力：Ａ　８０９→Ａ　８１１
《魔法》
【転移魔法】
《スキル》
【刀神斬殺】

ほとんど1か2しか上がってないだろ。まぁ、仕方ないかもだけど。それに、魔力に関してはアイズより少ないしな。
指輪をつけた状態で力が９５１ということは、実質俺の力は９３１くらいだろう。
「いつ見ても、君のスキルは怖いね。【刀神斬殺】。神様でさえ殺せるんだから」
「安心しろ。神様なんて殺さないよ。そんな罰当たりなこと」
そう、しないさ。二度と。俺はもう二度と自分の主神を殺さない。あいつを殺す時に誓ったんだ。
ヴリトラ。お前と最後に交わした約束、裏切らないよ。
『絶対に……お前の次の主神に同じ道を歩ませないでくれ……！　これが俺とお前の最後の約束だ』
血を流した状態で、俺と約束を交わすヴリトラの光景が俺の脳裏にフラッシュバックする。
俺もベルと同じように歯を磨きに行き、磨き終えて掛け布団を持って床で雑魚寝をした。

四話

【ヘスティア・ファミリア】の本拠、教会の隠し部屋。
俺は七時に起きた。いつもは四時くらいに起きてダンジョンにまっしぐらなのだが、二日間合計一時間くらいの仮眠しかとってないので今日はよく寝た。
ソファーの上を見ると、ヘスティアがまだ寝ていた。ベルはというと、いつも五時に出て行ってしまっている。
「ふわぁ……。二日分の『魔石』とドロップアイテム売り払わないと……」
俺はフラフラした歩みで洗面所に行き、歯を磨いた。
今日は大量の『魔石』を換金して、これまた大量のドロップアイテムを売りに行かねばならない。
俺は黒のロングコートではなく白のパーカーを着て、静かに隠し部屋のドアを閉めた。

クゥー、と俺のお腹が子犬ように鳴った。騒がしいメインストリートにいるので気付かれなかったようだ。とはいえ、気付かれていないとしても恥ずかしい。
どうしたものかと悩んでいると、ある酒場の店頭で足が止まった。
『豊饒の女主人』……ミア母さんに迷惑かけるけど、俺の生命活動のためだ……！」
「迷惑かけると思ってるなら、毎回のように強請らないでおくれ」
俺が呟いていると、酒場から声がした。声の主は大柄なドワーフの女性だった。そう、この人がこの『豊饒の女主人』の女将さんのミア母さんだ。
「あはは……で、でも困った時はお互い様というか……」
「じゃあ、今度うちの店を手伝っておくれよ。バイト代無しで」
この人なら本当にやりかねない。それに絶対にこき使うだろう。
俺は引き攣った笑みを浮かべて言った。

「か、勘弁してください。でも、その代わりに今日ここでご飯食べに来ますからっ！」
「本当だろうね？　嘘だったら金輪際、まかないをやる気はないからね」
「本当ですよ！　俺が嘘ついたことありました!?」
「確かになかったね。ならいいよ。ちょっと待っててておくれ」
　俺の必死の頼み込みでミア母さんは頷いてくれた。それからミア母さんは酒場に戻って、すぐに弁当箱を持って俺のところまで来た。
「ほれ、その格好からして今日は換金尽くしで暇ないんだろう？　昼の分も入れておいたから、大丈夫だろ」
「ミア母さん……！　ありがとうございます！　行ってきます!!」
　深く頭を下げて、俺はミア母さんに手を振ってギルドへ走って行った。

♠???
♣？♦？

　ギルドで換金を済ませたところで、俺はエイナさんに会ってしまった。
　私服姿だったため、これからアイズと逢い引きするのかとか冷やかされた。もちろん、アイズと会うとかそんな予定はない。
　もしあいつと会った時は、そのままダンジョン直行になってしまう。俺の魔法でアイテムとかなんとかなると思ってるみたいだけど、俺は便利屋じゃねぇからなっ!?
　まぁそんなことはさておき、次に向かうのはドロップアイテムを高く買ってくれる場所を探す。あまり有名所を行くと【ロキ・ファミリア】の連中に発見されるから嫌だ。
「……死にたくなってくるな……」
「あはは！　いいじゃん別に！　アイズもほら、アルスに会えたよ！」
「……うん」
　店を探していた俺は、【ロキ・ファミリア】のティオネ・ヒリュテとティオナ・ヒリュテ、レフィーヤ・ウィリディス、最後にアイズ・ヴァ

レンシュタインに捕まっていた。
運悪く【ディアンケヒト・ファミリア】という【ファミリア】の建物から出てきたアイズ達とばったり鉢合わせしてしまったのだ。本当に自分の不運を恨む。
「ねぇ、アルス。貴方、この時間に何しているの？」
アマゾネスの双子の姉、ティオネが訊いてくる。言外に、脳筋の貴方がなんでダンジョンにいないの？　とでも言いたげだ。
「ドロップアイテムを売りに来たんだ。有名所はお前達がいるからあまり近付かないようにしてたんだが……」
会っちゃったよ、と俺は小さく呟いた。
これが【ロキ・ファミリア】団長、フィン・ディムナという小人族（パルゥム）や古参冒険者のガレス・ランドロックというドワーフなら良かった。あの人達とはたまに戦闘での意見交換をするから。
ただ、このティオネとティオナの双子とは会いたくなかった。こうやって絡んでくるから。レフィーヤはなんか責めるような視線向けてくるし、アイズに至ってはダンジョンに直行。
俺のドロップアイテムが知りたいのか、ティオナが訊いてきた。
「へぇ？　何拾ったの？」
「ん？　あー、『カドモスの皮膜』だったかな」
「「え？」」
俺が言うと、アマゾネス姉妹とエルフのレフィーヤが口を開けた。アイズは首を傾げて本当かどうか訊いてきた。
「本当？」
「なんだよ、そんなに信用ないの？　まぁ見せてやるけど。……【転移（シフト）】」
ジト目で見ながら、俺は詠唱式を唱えて『カドモスの皮膜』を手に持った。
「ほ、本当でしたね……」
「驚いた……。よくもまぁドロップさせたわね」
「ねぇ、アルス。やっぱあんた化物？」
「お前ら、俺のことなんだと思ってるんだ」

化物呼ばわりされて、俺はベートの時ほどではないにしろ苛つきを覚えた。
確かにソロで51階層は有り得ないけど、ダンジョンに潜って初日だったから調子良かったから狩れた。まぁ、二日目でも狩れることは狩れるが。
ん？　なんだかさっきからアイズ暗いな。どうしたんだろ？
「アイズ、何かあったか？　暗いぞ？」
アイズの顔を覗き込むと、少し頬を染めて首を振った。
「……なんでも、ない」
「はぁ……どう考えても、なんでもないような顔じゃないぞ。まぁ、大体は分かるがな」
こいつのことだ。【ステイタス】絡みで、頭打ちになって落ち込んでるんだろう。
「おー、見せつけてくれるね」
「なんの話だ。とりあえず俺は行く。じゃあな」
こいつらに会った以上、次に会いたくないのはベートだ。いつも絡んでくる。あいつ狼じゃなくて犬だろ。
歩き出した俺に、アイズが俺のパーカーを掴んだ。
「なんだよ……」
首だけアイズの方へ向ける。
「『カドモスの皮膜』ならここで、買ってくれる」
「幾ら？」
「一二〇〇」
「万？」
うん、と頷くアイズ。そして、俺のとった行動は迅速だった。
くるりと回って【ディアンケヒト・ファミリア】の大きな建物に入ろうとした。
「あ、でもあたしらいないと」
ティオナが爆弾をぶち込んだ。その言葉に俺は頭の中で葛藤する。
どうする？　このまま入って安く買われるか、それともアイズ達と一緒に入って高く買われるか。というより、こいつらぶんどったよ

な。
　アレコレ考えていたが、今優先するのは【ファミリア】の資金を貯めること。それを考えたらこのままアイズ達と入った方が得策……
「分かった……じゃあ、頼めるか？」
「えぇー、どうしようかなぁ？」
「どうしようかしら？」
「どうしましょうね」
　ニヤニヤ笑ってこいつら何が言いたいんだ！　段々腹が立ってきたぞ。というかアイズ、いつまで俺のパーカーを掴んでるの。
「……アル、交渉手伝うから、付き合って」
「……どっちの意味でだ」
　俺がそう言うと、首を傾げた。
　こいつこういう時だけ抜けてるよな。とくにティオネはこういう時に迫ると思う。フィンさん、早くもらってやれよ。あんなにアタックしてるのに。
「？　武器の、整備に」
「分かった」
　武器の整備くらいなら大丈夫だろう。買い物でも大丈夫だった。二人だけなら死ぬが。
「じゃあ、アルスとアイズは交渉行ってね。あたし達は先に行くから～」
　え？　ティオナさん何言ってんの？　それって二人だけってことだよね!?
「それじゃあ、また会いましょうアイズ。アルスもね」
「アイズさんに何もしないでくださいねレイカーさん」
　レフィーヤにキツく言われるが今の俺はそれどころじゃない。勘弁して欲しい。
　アイズと二人で、なんて俺の心臓が耐えられるわけない。ちょっ、パーカー引っ張るなよ。
「アル、早く」
「分かったから、引っ張るなっ」

この時のアイズの表情は、さっきの暗い表情とは打って変わって、いつも通りの表情だった。いや、少し微笑んでたか。

それと、アイズのお陰で『カドモスの皮膜』は一二〇〇万ヴァリスはいかなかったが、一〇〇〇万ヴァリスはいただいた。これで【ファミリア】が少し楽になる。……今度買い物に付き合うようにアイズに言われたが……まぁいいだろう。

五話

アミッドという【ディアンケヒト・ファミリア】の団員には悪いことしたかな。なんだか泣きそうな感じだったな。アイズ達なんて言って一二〇〇万もぶんどったんだよ。

そして今、【ゴブニュ・ファミリア】へ歩きながらアイズと話していたのだった。ちなみに心臓はもうおかしくなって一周して平常になっている。

「確かアイズの武器ってサーベルの形したやつだろ。名前は《デスペレート》って言ったっけ？」

「……うん。アルの太刀は？」

「俺のは《倶利伽羅（クリカラ）》って言うんだ。一応不壊属性（デュランダル）付きだけど、切れ味の低下がな……」

不壊属性って言っても、言った通り切れ味と威力の低下が発生する。どうにかならないかな。

「そういえば、何斬ったんだ？　相当厄介なやつを斬ったんだろうけど」

そうでなければ、武器を整備に出すのはもっと先でもいいはずだ。そりゃ遠征から帰ってくれば出すだろうが、多少は自分でも出来るだろう。

「なんでも溶かす液と、その液を吐くモンスターを、何度も」

「……それって、芋虫型？」

「うん。アルも、戦ったの？」

「いいや。見かけただけだ。安全で確実な狩りをするにはまず情報が必要だからな。だからやってない」

そう。強竜（カドモス）との一戦を終えた俺は上層に行こうかと思った時、芋虫みたいなモンスターと出くわした。

未知なるモンスターとの戦闘は燃えるが、その芋虫モンスターは厄介そうだった。だから俺は撤退して上層に行った。けど、上層にも何体かいた。

『ここにもかよっ！　俺はストーカーは受け付けてないんだけどなぁ』
あの時は冗談混じりに言ってたが、割と本気だった。だってキモイし。アイズが言った通り、なんでも溶かす液吐いてたから。
まぁ、小太刀で細切れにしたがな。……あれ、今思ったら俺も整備しないといけない？
「……ごめんアイズ。今思ったらやってたわ」
「……だと思った。アルは、そういう人だから」
俺の行動パターンが読まれているなんてな。まぁ、俺もアイズも暇があったら即ダンジョンへＧＯだから分かりやすいんだけども。
俺達はあれこれ話していると、いつの間にか【ゴブニュ・ファミリア】の店に到着していた。ジメジメしててなんか嫌なところだ。アイズはいつも通りの表情なんだが、俺は顔を顰めている。
ドアを開けて店の中に入って俺達は挨拶した。
「失礼しまーす」
「します……」
工房という言葉がしっくりくる建物に入った途端に叫び声が聞こえた。
「ノオオオオーー!?」
親方ー、親方ーっ、と悲鳴が散っていた。その近くに先程別れたアマゾネスの双子の妹がいた。
「ティオナ、何やったんだ」
「お、仲良く来たねぇ」
「……」
オイ、俺の質問はスルーですか。そうですか。というか頬赤らめるなアイズ。可愛いから。
中にいたのは、ティオナと親方と呼ばれた人と他諸々。ティオネとレフィーヤがいないのは荷物などを【ファミリア】に置きに戻ったんだろう。
俺とアイズはまだ騒いでいる奴らを無視して、とことこと歩き去って奥の部屋に入った。部屋にいるのは老人の外見した一柱の男神

だった。
皺の刻まれた整った顔でベルと違った白髪を生やして、口元を隠す程度に白髪も蓄えている。しかも筋肉も引き締まっている。
この男神が【ゴブニュ・ファミリア】の主神だ。
「何の用だ、アイズ。それも男連れで」
「整備を、頼みに来ました」
「俺も頼むわ、ゴブニュ」
俺が言うと、ゴブニュは俺をジロジロ眺め回した。十分眺め回した後、ゴブニュは顔を引き攣らせた。
「って、お前アルスか！　いつもの黒一色じゃねぇから分からなかったぞ」
「悪かったないつも黒一色で」
そんなに俺のイメージカラーが黒なのか。どこぞ黒の剣士じゃないぞ俺は。
俺は小太刀――《黒雷（コクライ）》二本を、アイズはサーベルの形をした《デスペレート》を渡した。
順に見ていくゴブニュは顔を引き攣らせた。
「派手にやったな、お前ら」
「いやぁ、そんなに褒められるとは」
「……とは」
「褒めてない！　アイズも乗っかるな」
怒られちゃったな。でもアイズも乗るとは俺も思わなかったわ。
俺達の得物の摩耗は厳しいのか、ゴブニュは目を細めている。
「お前ら何斬った？」
「なんでも溶かす液と、その液を吐くモンスター」
「カドモスとフォモールを何十体、アイズと同じモンスターを何体か」
「……やっぱりアルスは頭のネジが何本か飛んでるな」
ひでぇ。このヒゲ爺ぃ人をなんだと思ってやがる。オイ、アイズ。コクコク頷くな。否定してくれ。
それから得物を観察し終えたゴブニュは溜息をついて口を開いた。
「はぁ……アルス、お前の刀なんだが当分使えそうにないぞ。大太刀

だけで足りるか？」
「んー足りる、と思うけど……手数がなぁ」
「こう言っちゃアレだが、ヘファイストスのところでやってもらったらどうだ？」
「いいよ。俺はあんた達を信用してるんだ。ここでよく元ヴリトラのメンバーに会えるしな」
「そうか……」
　ヘファイストスというのは我ら【ヘスティア・ファミリア】の主神、ヘスティアと仲のいい神様だ。天界にいた時は凄い鍛冶師だったようだ。ゴブニュよりな。まぁ、ここに来てしまっては神様の力、『神の力（アルカナム）』は使えないんだけどな。
　それに、さっき言った通り元ヴリトラのメンバーにも会える。だから俺はここを贔屓してるんだ。
「アイズ。元の切れ味を取り戻すには、アルスほどではないにしろ、時間がかかる。代剣を用意してやる。しばらくそれ使ってろ」
「あ……」
　おもむろに切り出されたゴブニュの提案に、アイズは断ろうとした。だが、彼は強引に代剣を押し付けられることになった。
「半端な武器ではどうせ使い潰す。素直に甘えておけ」
「そうだぞ、アイズ。受け取っておけよ」
「分かった……」
　ゴブニュは腰を上げて別室から細身のレイピアを持ってきた。レイピアの中でも長めの刀身だろう。
「団員達には整備を急がせる。アイズは五日経ったら来い。アルスは二週間後だ」
「分かり、ました……ありがとうございます」
「ありがとうなゴブニュ。また来る」
　アイズはペコリと頭を下げて礼を言い、俺は手を挙げて礼を言った。ゴブニュはふんっと鼻を鳴らして、仕事を再開させた。
　俺達は部屋から退室した後、ふと俺は思い出した。
「あっ、まだドロップアイテムあったの忘れてた……」

「そう、なの？　手伝う？」
　アイズの思わぬ申請に、俺は驚いた。ここで解散だと思っていた俺にとっては、驚愕だ。
「えっ、いいのか？　合流しないといけないんじゃ……」
「大丈夫。少し、くらいなら」
「そうか。ならお願いできる？　現金な話だが、アイズがいれば高く買ってくれるから」
　苦笑いをしながら俺はアイズの申し出を受けた。心臓は死にそうだが、必死に抑え込む。
　それからまだ騒いでいたティオナに、俺の付き合いで遅くなることを伝えた。
　まぁ、案の定からかわれたが。
「そのまま夜の宴会までデートしてていいよ？」
「……」
「売り払ったら即送るから結構だ」
　ティオナのからかいに、アイズは顔を赤くして俯き、俺は呆れたように言い返した。
　俺は工房を出ようとしたが、アイズが一向に動かなかった。どうしたんだと思ったが、ティオナのからかいでオーバーヒートしてるみたいだった。
「ほら、アイズ。行くぞ」
「……」
　アイズの手を掴んで俺達は工房を出た。その際に後ろから何か声が聞こえたが、転移でティオナの頭にタライを落としておいた。
　今日分かったことは、アイズは初だったということだな。まぁ、可愛……もういい、素直に言えば可愛かった。

六話

ドロップアイテムを全て売り払い、アイズを【ロキ・ファミリア】に送った後、俺は密かに悶えていた。理由は手を繋いで頬を赤く染めたアイズが非常に可愛かったからだ。しかもオロオロしてたし。

「……心臓がもたない……」

もう末期だと自分でも思う。いっそ告ろうかと思ったが、首を振ってその思いを振り払う。

「まだ伝える時じゃ、ないよな……」

するならば、ベルが強くなった時だ。まぁ、俺が先延ばしにしてるだけなのだけれど。

うわー、と俺は頭を掻き毟った。気付けばもう廃墟みたいな教会に着いていた。

「ただいま」

隠し部屋のドアを開けて、俺は部屋の中に入っていく。中ではベルの【ステイタス】を更新している最中だった。

「おお、アル君。おかえり。どれくらいのお金になったのかな？」

「アルさんおかえりなさい。どうでした？」

「あぁ、聞いて驚け。なんと一〇〇〇万ヴァリス以上の金になったぞ」

「一〇〇〇万ヴァリス以上っ!?」

【ステイタス】の更新をしているというのに、二人は叫んだ。

正確には、三一〇〇万ヴァリスなんだがな。これ言ったらヘスティアが顎外れるくらいに口開けると思うし、ベルは失神すると思う。

これで、【ファミリア】の助けになればと俺は思っている。それにベルの武器を新調することもできるしな。ギルドから提供された短刀じゃ心許ないから。

「……よしっ、終わったよベル君」

「ありがとうございます。神様」

更新が終わり、【ステイタス】が書かれた用紙を覗き込むベル。俺は用紙を見るのではなく背中の【神聖文字】を読むことにした。なに、た

だの気まぐれだ。
そして俺は、何度も見返した。何故なら、そこには、
《スキル》
【憧憬一途】
・早熟する。
・懸想(おもい)が続く限り効果持続。
・懸想の丈により効果向上。
ついに、ついにベルにスキルが発動した。しかもレアスキルだ。間違いなく俺よりも強いスキル。懸想が続く限り効果持続……強い。強過ぎる。
俺はベルが見ている用紙をチラッと見た。だが、そこにあるスキルの欄には何も書かれていない。ヘスティアが気を利かせて書いていないみたいだ。
「ヘスティア、これ」
俺は小さくヘスティアに声をかけた。
「うん。君にも分かるだろう？　このスキルの異常さが」
ヘスティアも小さく言う。俺は頷いて、【ステイタス】が異様に伸びていて喜んでいるベルを見た。だが、ヘスティアにとってすれば、他人でベルが変わってしまったことに腹が立ってるみたいだ。
「まったく。なんとも腹立たしいよボクは」
笑うことしかできない。原因はミノタウロスを倒した俺とその後に駆け付けたアイズだろうから。
まず俺が日常でベルのサポートをしていること。そして有名な『剣姫』アイズ・ヴァレンシュタインの登場。ベルの近くには、自分で言うが、ある程度有名な俺がいて、女性剣士の中で最強のアイズがいる。なら、それに憧れるのは当然だろう。いや分からないが。
だが、俺の思っていることが正しければ筋は通ると思う。
「神様、なんで僕、こんな成長したんですかね？」
「……知るもんかっ」
頬を膨らませてぷいっ、とそっぽを向くヘスティア。
（ヤダ可愛い）

何考えてんだベルのやつ。大体分かるぞお前の考えてること。まぁ、分からんでもない。だって、ヘスティアのはじめての反抗期みたいなものだからな。

ヘスティアは背を向けて、無言で部屋の奥にあるクローゼットへ向かった。頑張って背伸びしてコートを取り出して、羽織ってドスドスとドアまで歩いていく。

「ボクはバイト先の打ち上げがあるから、それに行ってくる。君達は二人で豪華な食事でも楽しんで来ればいいさっ」

バタンっ！　と音を立ててドアを閉めた。

にしても、なんの打ち上げなのかが不思議だな。嘘つくならもうちょっと上手くなろうな、ヘスティア。

ヘスティアを怒らせたことに若干落ち込むベルを慰めて、俺は『豊饒の女主人』へ行こうと出ていこうとすると、

「アルさんどこ行くんですか？」

「ん、『豊饒の女主人』っていう酒場に行くんだ」

「そうなんですか。僕もシルさんという人のお店に行くんですよ」

「シル？　ってことは俺と同じ場所だな。一緒に行こうぜ」

ベルが言っていたシルという人は、ミア母さんの酒場で働いているヒューマンの少女だ。

シル・フローヴァ。アイズやヘスティアに比べたらそこまで可愛くはない。が、話す度に彼女の魅力が知れてくる。凄く優しい。あとは、少しあざといか。

「はい。じゃあ、行きましょう！」

こうして、俺とベルは『豊饒の女主人』に一緒に行くことになった。

酒場に着き、店の前でベルが立ち尽くしているとシルが顔を出して、少し話して、カウンター席へ案内してくれた。

そして現在俺達はミア母さんに勝手に今日オススメ料理を出されてしまった。

「それだけじゃ足りないだろう？　今日オススメだよ！」

ミア母さんがカウンターから身を乗り出して、でかい焼き魚をゴ

トッと置いた。
「いや、頼んでないですって！」
「金あってよかった……」
俺は今日換金してきてよかったと心の奥底から思った。ベルに至ってはブツブツ言って、壁に貼り付けられた今日オススメの料理の料金を見てめを丸くした。
「八五〇ヴァリスっ!?」
うん。高いよな。分かるぞその気持ち。どうせミア母さんは俺にくれたまかない分もふんだくろうとしてるだろう。
そう思っていると、隣から誰かが近づいてきた。
「どうですか？　楽しんでいますか？」
「……圧倒されてます」
初めてこの酒場に来たベルにとってはそれもそうだろう。俺だって圧倒された。主にロキとガレスの飲み比べとか。
「うふふ、ごめんなさい。これで私のお給金も期待できそうです」
「よかったですね……」
シルは笑って謝ったかと思いきや、現金なことを言ってきた。これにはベルはげんなりしている。俺も苦笑しながら焼き魚を食べる。皮がパリッとしてて身はプリプリしてて美味しい。流石ミア母さん。
「このお店、色んな人が来て面白いでしょう？　たくさんの人が来るとたくさんの発見があって、私、つい目を輝かせちゃって。知らない人と触れ合うのが趣味というか、心が疼くというか」
あれ、シルってこんな子だったけ？　結構凄いこと言っちゃってるよね。
「結構凄いこと言うんですね」
ベルも俺と同じことを思ったのか、パスタをズルズル啜りながら言っている。
シルの変な発言のすぐ後、店の中に猫耳のウェイトレス、通称アホの子のアーニャが声を張り上げた。
「にゃー！　御予約のお客様御来店にゃー！」
御予約、ねぇ？　どうせあいつらだろ。今日会ったからもうお腹

いっぱいなんだけど。これ以上俺の心臓を苦しめたいのか。
店に入ってきたのは【ロキ・ファミリア】。
『おお、えれえ上玉だなっ』
『馬鹿、ちげぇよ。エンブレムを見ろ』
『……ってことはあれが噂の『剣姫』か』
最初のやつ、俺の前にひれ伏して欲しいな。その下卑た目をアイズに向けんなコラ。……とと、顔に出てた。ベルとシルが怖がってるし。
店の中に来た【ロキ・ファミリア】の面々は【ロキ・ファミリア】の中核を成すメンバーだ。
主神のロキ。
団長の小人族（パルゥム）、フィン・ディムナ。
副団長のハイエルフ、リヴェリア・リヨス・アールヴ。
最古参のドワーフ、ガレス・ランドロック。
好戦的な狼人（ウェアウルフ）、馬鹿ベート・ローガ。
アマゾネス姉妹の姉、ティオネ・ヒリュテ。
同じくアマゾネス姉妹の妹、ティオナ・ヒリュテ。
エルフ族の魔道士、レフィーヤ・ウィリディス。
そして、オラリオ内最強の女性剣士、『剣姫』アイズ・ヴァレンシュタイン。
第一級冒険者オールスター。まぁ、レフィーヤはあともうちょいだけど。
そう思うと同時に俺は必死に気配を殺していた。気付かれたくないからだ。とくにベート。あいつは必ず絡んでくる。次にロキ。酒を飲め飲めうるさいんだ。俺は酒とタバコは絶対にやらん。
「アルさん！　ヴァレンシュタインさんですよ！」
ほらほら、とベルが小突く。やめてくれ。必死に気配を殺してるんだから!!
そ、そうだ。他人のふりをしよう。そうしよう。
「アルさーん！」
無視だ。無視だ。

その後も、ベルはしつこく俺を呼んだ。シルもそれを見て面白かったのか、ベルの援護に回ってきた。……ミア母さんまで援護しないでください。死ぬから。

七話

【ロキ・ファミリア】が来て、俺は気配を殺していたのだが、ベルがあまりにもしつこいのでパスタを大量に食わせて大人しくさせた。
俺はチラッとアイズ達を見やる。乾杯を済ませて、ワイワイと宴会気分だ。ダンジョンの遠征が終わると、あいつらはここで宴会をすることになっている。
「……何やってんだロキは……」
ジト目でロキを見る。アイズの肌を撫で回そうとしたロキにアイズが無慈悲にフォークの柄で殴った。
「痛いでぇ、アイズたん……」
「……」
「自業自得だ」
微かに聞こえる【ロキ・ファミリア】の会話。最後の声はリヴェリアだろう。ロキ、ザマァｗｗ
「っ!?」
なんだ、一瞬殺気が……
振り向いて見ると、ロキがニヤッと悪い笑みを浮かべた。俺は背中に冷や汗をかく。
「やめてくれよロキ様……!!」
俺は神に祈った。文字通り、ロキにだ。主神が違うと思うだろうが、ここでこいつに祈らないと死ぬ。
俺が祈っていると、助け舟は意外なやつに出された。
「そうだ、アイズ！　お前のあの話を聞かせてやれよ！」
「あの話……？」
ベートだ。こいつに助けられたことには癪だが、感謝するか。ありがとうございました、バカ犬。
「あれだって、帰る途中で何匹か逃がしたミノタウロス！　最後の一匹、お前とアルスが五階層で始末しただろ!?　そんで、ほれ、あん時いた泣き虫野郎の！」

……感謝は取り消しのようだな。
俺は木製のフォークが軋むくらいの強さで握った。これはベルのことを言っている。
「それでよ、いたんだよ！　いかにも駆け出しっていうようなひょろくせぇガキが！」
……てめぇもガキだろうが……!!
ベルの方へ俺は目を向けた。ベルも、顔を俯かせて固く手を握っている。
【ロキ・ファミリア】のフィンさん、リヴェリアさん、ガレスさん、アイズ以外の連中は笑う。ただし、盛大に笑っているのはベートただ一人。ロキ、アマゾネス姉妹、レフィーヤはまたか、みたいな感じで苦笑している。
「しかしまぁ、久々にあんな情けねぇやつを目にしちまって、胸糞悪くなったな。野郎のくせに泣くわ泣くわ。それに、アルスの仲間みたいだったしよ！ぷっ、アルスの仲間のくせにあんな腰抜けで……！くっくっ」
ただ一人だけ盛大に笑う。
あー、そろそろ俺もキレそうだわ。もう無理だ。殺してしまいたい。
「ああいうやつがいるから俺達の品位が下がるっていうかよ、勘弁して欲しいぜ」
「いい加減そのうるさい口を閉じろ、ベート。ミノタウロスを逃がしたのは我々の不手際だ」
リヴェリアさんがベートに言う。おそらくアイズの雰囲気を見て口を出したんだろう。あとは、俺の僅かな殺気も察知したからか。
「おーおー、流石エルフ様、誇り高いこって。けどよ、ゴミをゴミと言って何が悪い」
「これ、やめぇ。ベートもリヴェリアも。酒が不味くなるわ」
ロキが二人をたしなめる。ロキ、たしなめるなら早くやって欲しかった。いくらお前の眷属（こども）でも、俺はそいつを許すわけにはいかなくなる。

俺はベルのことを見る。俯いていたが、今は少し震えている。そろそろベルの精神的に危ないか。
「アイズはどう思うよ？　自分の目の前で震え上がるだけの情けねぇ野郎をよ」
「あの状況なら、しょうがなかったと思います」
そうだ。Ｌｖ．１のベルにミノタウロスと渡り合おうなんて無理だ。Ｌｖ．１は上層で経験を積まなければならない。けど死なない程度で。
「なんだよ、いい子ちゃんぶっちまって。……じゃあ、質問を変えるぜ？　あのガキと俺、ツガイにするならどっちがいい？」
やっぱり殺すか。アイズの仲間だから、一応知り合いだから殺さないでおこうと思ったが。
「ベート、君、酔ってるね？」
フィンさんが苦笑いを浮かべながら押さえようとする。だが、酔ってるベートは構わず言う。
「うるせぇ。ほら、アイズ、選べよ。雌のお前はどっちの雄に尻尾振って、どっちの雄に滅茶苦茶にされてぇんだ？」
ブチッ、と頭の中で何かが切れた。無意識で《倶利伽羅》を転移させていた。
「……そんなことを言うベートさんとだけは、絶対にゴメンです」
「無様だな」
アイズは明確な拒否を表した。そこには嫌悪感も入っている。続けてリヴェリアさんが吐き捨てた。
「黙れババァっ！　……あー、そうだったもんな。お前はアルスのこと好きだもんな」
「……っ！」
アイズがピクリと肩を震わせた。
「ハッ、けどよぉ、あいつも弱くなったぜ？　ミノタウロスを一撃で殺れなかったしなぁ！　俺より弱くなったんじゃね？　そんなやつにお前の隣に立つ資格なんてねぇよ。まぁ、つまり……」

「あんな雑魚共とお前じゃ釣り合わねぇ」
俺は《倶利伽羅》の柄に手をかけた。何も知らないで、何を言ってやがる。絶対に殺して――
「ベルさん!?」
ベルが椅子を蹴飛ばして立ち上がって、外に飛び出した。
俺は我に返って、すぐさま外へ飛び出すベルを追う。
「ベルっ!! おい! ベル!」
すぐに追いついて止めたが、何故か分からないが、押し退けられた。
ベルは夜の街を駆け抜けていってしまった。

♠???♣?♦?

俺は呆然と小さくなるベルの背中を見つめていた。すぐ近くに、人の気配がする。アイズか。
「……どうして、押し退けられたんだ……」
普通なら、Ｌｖ．１のベルがＬｖ．６の俺を押し退けるなんて難しいことだ。なんで。
「……アル。いた、の……？」
アイズが少し声を震わせて言う。ベートに酒場にいた連中に暴露されたことが恥ずかしいのか。
「まぁ、な。……なぁアイズ」
「は、はい」
「ははっ、なんで敬語なんだよ。……ベートに説教していいか？」
こいつに敬語使われるなんて最初の時以来だな。なんだか懐かしいな。けど、今は懐かしんでる場合じゃない。殺しはしない。だが、死んだ方がマシな説教だ。Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩなんか可愛いほどに。
「……うん。トラウマになるほど」
「アイズも相当キテるみたいだな。いいよ」
苦笑しながら、俺はベルを追いかけるのを一旦やめる。振り向いて

酒場の中へ俺は歩みを進める。
「……ベート。話があるんだが」
「あぁ？　なんだよ、雑魚のアルスか」
　なんだろ、俺のことなんかどうでも良くなった。昔は雑魚呼ばわりされて一々キレてたっけ。
「お前さ、言っていいことと、悪いことって分かる？」
「ハッ、そんなもん分かってるよ。で、なんだよ。そんなののために話しに来たのか？」
「いいや、ただ、お前には死んだ方がマシに思えてくる地獄を見せてやるよ」
　俺はそう言って、ベートの頭を鷲掴みにして床に叩きつけた。喚くベートを押さえつけて、《倶利伽羅》を抜き、首にあてがう。
「な、てめぇ！　何しやがる!?」
「静かにしろ犬。喚くとうっかり首落としちゃうだろ？」
　自分でも言ってて思うが、完璧に悪役のセリフだ。周りのやつらが騒ぎ出してるが、まぁ、殺気出してやれば黙るだろ。ミア母さんには悪いが、許してくれるだろう。
「な、何をしてるんですかレイカーさん!?」
　レフィーヤが止めに入ってくる。しかし、リヴェリアがそれを手で制した。
「これはベートの自業自得だ。【ファミリア】のメンバーをバカにしたこいつの罰だ。ロキ、いいな」
「あぁ、ええで。ベートは勝つ気満々みたいやけど……『黒閃（こくせん）』相手じゃあ、瞬殺やで」
　ロキは呆れて首を振った。他のやつらも諦めたようだ。
「だ、そうだ。ベート、お前には説教が必要だからな。弱いやつを見下す悪い癖を俺が叩き直してやる」
　大太刀を鞘に納めて、頭から手を離す。
　離した瞬間にベートが、その長く強靭な脚で襲いかかってきた。
　身をかがめて避けて、背負い投げで店の外に出した。
「っつ！　クソっ！　ふざけんなよ、アルス!!」

「誰もふざけてねぇよ。ただ俺は、ベルのことを馬鹿にされて、アイズに失礼なこと言ったお前にキレてる」
目を細めて、俺は冷たく言う。この、戦場を支配している感覚。懐かしい。
自分でも分かるほどアドレナリンが多く分泌されてるのが分かる。
「この、雑魚野郎が！」
「……雑魚はお前だよ、犬」
ベートの蹴りを俺は大太刀の腹で防ぐ。そのまま押し込んで、飛び退いた直後にベートの胸を一閃した。
「かはっ……!?」
一見浅く斬られたかと周りのやつらが思うだろう。だが、俺がやったのはただの斬撃じゃない。
俺は《倶利伽羅》の刀身を見つめた。仄かに紫色がかった白銀の刀身には、真っ黒なナニカが纏っていた。
「ロキ、あれが『黒閃』本来の姿かい？」
微かに届く声。フィンさんがロキに問いかけている。
「そうや。あいつのスキル、【刀神斬殺（ゴッド・リーパー）】の副産物。一回、ヴリトラに頼んであいつの【ステイタス】見たんやけど……」
ロキがフィンさんに説明している。そしてフィンさんは驚愕の色で表情を染めた。
「神を殺すことで、その神の『神の力（アルカナム）』の一部を行使出来る……!?」
あーあ、バレちゃったか。これは【ステイタス】にも、【神聖文字（ヒエログリフ）】にも書かれないから都合が良かったんだけど……まぁいいか。バレたのがフィンさんとアイズだけみたいだし。
「ぐっ……なんだよお前のソレ……」
「ん？　これ？　あぁ、気にするな。チートだから」
『神の力』なんぞ、チート以外の何者でもない。だから神様方皆、この力を使えなくして天界から来たんだから。
「この……！　うおらぁぁ!!」
上段蹴りをするも俺が一歩引いて躱す。そのまま流れに逆らわずに踵落としを繰り出してきたが、ひらりと左に避ける。

「俺を雑魚雑魚言うなら、もっと強くなってから言えよ、ベート・ローガ!!」
せめての慈悲として、逆刃にして大上段から振り下ろした。
ズガァァッ！　と《倶利伽羅》を叩きつけた。
「ぐっ……ぐお……！」
頭に叩きつけたが、こいつならなんともないだろう。俺は近付いてベートの様子を見る。
「て、めぇ……」
「さて、謝ってもらおうか。まずはアイズに謝れ。次はベルに謝ってもらいたいが、あいつは多分ダンジョンに行っただろう。……今度ベルに会ったときに謝れ」
俺はベートに言う。いくらなんでもアイズに言ったことは失礼過ぎる。
ベートはヨロヨロと立ち上がって、アイズの方に歩いていき、深く頭を下げた。
「……悪かった……」
「……もう二度と、ああいうことは言わないでください」
アイズは凄く機嫌が悪いように言う。相当腹が立っているようだ。
「じゃあ、ベルには会ったときに謝ってくれよ」
「ちっ、なんであんなのを……！」
こいつ、反省してないんだな。
「お前な……誰だって最初はモンスターは怖いだろうが！　あの状況でミノタウロスを向かい打とうなんて馬鹿のすることだ！　それがＬｖ．１なら当然だ！　弱者を顧みるなんて出来ないのは俺だって知ってるよ！　けどな、少しは人の気持ちを考えろよ馬鹿が！」
はぁ、はぁ、と肩で息をする。
こいつも、アイズと同じで力を求めている。俺だって同じだ。力は欲しい。けど、俺が欲しいのはその弱者を守る力だ。
「……じゃあな」
あまりの剣幕に息を呑むベートを無視して、俺は店の中に入った。

カウンターにいるミア母さんに謝って、食事代を払った。
そして、俺はベルを追いに行こうとした時、
「……アル。その……ごめん、なさい」
「なんでお前が謝るんだよ。これはベートのせいだから、アイズのせいじゃない」
「でも……」
なおも言おうとするアイズに、俺は頭を撫でた。アイズはびっくりしたようにしたが、すぐに気持ちよさそうに目を細めた。
「さて、俺はベルを追うから。じゃあな」
俺は最後にポンポンと叩いて、店から出た。
ベートはどうやら後から来た【ロキ・ファミリア】のメンバーに送られたみたいだ。
ロキが何か言いたそうにしていたが、踏み止まったのか、顎でしゃくった。
早く行け、か。悪いなロキ。
俺は心の中でロキにそう謝って、ダンジョンへ敏捷全開にして走って向かった。

八話

畜生、畜生、畜生っ!!

僕は目に涙を溜めながら、モンスターを切っていた。

僕のせいでアルさんに迷惑をかけた。僕が弱いから、アルさんも弱いと言われた。

獣人の青年の言葉に苛立ったアルさんは魔法の詠唱式無しで、武器を転移させるほどだった。

『グオォォ!』

容赦なく襲いかかってくるモンスターの胸に、僕の短刀が貫いた。モンスターはそのまま倒れ込んだ。

まだまだだ……もっと強くならないと。強くならないと、アルさんまで馬鹿にされてしまう! 嫌だ。仲間を馬鹿にされるのは。

悔しい、悔しいっ! 何もしていないくせに無償で何かを期待していた愚かな自分が……!

どれくらい経ったか、気付けば、僕の装備はボロボロだった。短刀も刃こぼれしている。

けど、僕は強くならなければ。

♠???
♣?♦?

全速力でダンジョンの中に潜った俺は、ベルがいそうなところを探索していた。

元々俺は、探索系の冒険者じゃなく、モンスター討伐専門だった。【ヴリトラ・ファミリア】の連中は大抵の皆がそれだった。中でも頭一つ二つ抜けていたのが、俺ともう一人。もう一人の方は探索系も得意だったから、人探しとかは役に立っていた。いや、役に立ち過ぎて鬱陶しかった。

だが、今のこの状況はあいつの力が欲しかった。

「ベル! どこだっ!!」

声を上げて、走る。声を上げたらモンスターが湧いて出るが、そん

なものは太刀を一振りしただけで霧散する。
２階層もいなかった。次は３階層。……いない。４階層……いない。ついには５階層まで来てしまった。
「あいつ……！　無事でいてくれよ……！」
必死に探すも５階層にはいなかった。次は、６階層。６階層についた俺の耳に、微かな剣戟が届いた。それが聞こえた時にはもう俺は、その方向へ走っていた。
一人の冒険者がモンスターに立ち向かっている。その冒険者の髪の色は、白。
対してモンスターは、何体もいる『ウォーシャドウ』。
「ベルっ！」
「……アル、さん」
ベルがチラリと俺の方へ見てすぐにモンスターに向き直ってしまった。それもそうだろう。敵が目の前にいるのに目を離すわけがない。
「ベル、俺がこいつらを相手するから休んでろ」
俺はそう言って太刀を抜いて、中段に構える。しかしベルは首を振った。
「いいえ……僕が、やります」
「お前、今の状態分かってるのか？　今のお前は満身創痍。そんな状態でやらせるわけにはいかない」
「でも、僕は……！　強く、ならなきゃっ」
刃こぼれした短刀を構えてベルが言う。何がベルをそうさせるのかは、容易に考えられる。馬鹿にされたことが悔しいからだ。
なら、俺に出来ることはベルが死なないようにフォローすること。そして、ベルを強くするために、俺の技をこいつに教える。
「分かった。俺はフォローに回る。で、お前には俺の技を伝授しようじゃないか」
「アルさん……ありがとうございます……」
「礼は後な。……【転移（シフト）】」
手に持った太刀を転移させて、代わりに手に持つのは刀身が紅い短

刀。
一体のウォーシャドウを睨みつけて、俺は地面を蹴った。
「短刀式五ノ型・花火」
敏捷全開にして、一瞬で近づいた俺に驚いたウォーシャドウは腕を振り上げる。しかし、俺は逆手に握った短刀で逆袈裟斬りをして、すぐに左ストレートを放つ。素早く左拳を引き絞り、次に短刀で横に斬る。流れに乗って左脚で蹴り飛ばす。離れたウォーシャドウを追って、的確に、尚且つ力一杯の突きを放った。
短刀式五ノ型・花火。五連撃の技。俺が会得している短刀の型で一番手数が多い。その分、技を出す時の速さが重視される。
「見てたか、ベル？」
「す、凄い……速くて全然見えなかったです」
呆然とした表情でベルが言う。俺は苦笑して応えた。
「だろうな。俺の型って敏捷に長けてないと出来ないし。とりあえずは一ノ型を覚えてもらうか。今」
話しながら、俺はウォーシャドウの首を撥ねた。ベルは〝今〟という単語を聞いて、顔を引き攣らせた。
「い、今ですか!?　む、無理ですよ！」
「大丈夫、お前なら出来るさ。俺が保証する」
ザシュッと音を立てて最後のウォーシャドウの両腕と首を撥ねる。
それに、ベルの【ステイタス】は敏捷に長けている。ならこの技を使える。
「とりあえず、一ノ型をお手本で見せるから、覚えるように」
「は、はい！」
いい返事だ。そう思って、また湧いて出てきたモンスターに向き直る。
歩くような足取りで俺はモンスターに向かっていく。そして、瞬間。
『ぐ、グオォ……』
断末魔を上げて、モンスターの胸から一文字の血飛沫を飛ばした。そのままモンスターは地に伏した。

「短刀式一ノ型・閃光……これ、今みたいなスピードは無理でも、習得しろよベル」
短刀を転移させて太刀に持ち替えながらベルに言う。ベルは目を見開いて棒立ちになっていたが、すぐに我に返って頷いた。
それから俺はベルがコツを掴むまで何度もモンスターを倒しながら教えた。教え甲斐のあるベルは何度か失敗してモンスターから被弾しそうになったが、そこは俺が素早い突きで屠った。
そして現在。ベルは一体のモンスターと対峙している。
『グルルゥ……』
「はぁ……はぁ……っ！」
俺は歩くような足取りで出来るが、ベルの敏捷は俺からしたらまだまだ下。だから走って助走をつけて、そこから踏み込む。
ザッと靴と地面が擦れる音がダンジョン内に響いた。そして、次に聞こえたのは血が勢い良く吹き出す音。
「や、やった……」
ベルは息を上げて地面に座り込んだ。俺はベルに駆け寄り、頭をワシャワシャと撫でた。
「よくやったぞ、ベル！　次は二ノ型だけど、それはまた今度だ！　たった二時間程度で覚えるなんて凄いぞベル！」
笑顔で撫で回す俺に、ベルははにかんだ。本当に凄いことだ。二時間程度で覚えるなんて。スピードはまぁまぁだったが、これが敏捷ＣかＢにでもなればいい形になる。
座り込んだベルは、立ち上がろうとした。だが、グラリとベルの体が傾いた。
「な、おい！」
急いでベルを支える。支えてみて分かったのだが、軽い。
そうか……こいつは気絶するまで頑張ってたんだな。この頑張りは、きっと身を結ぶ。何故なら、こいつのスキルは【憧憬一途（リアリス・フレーゼ）】。懸想（おもい）の丈で効果向上するからだ。こいつには、俺以上に強くなって欲しい。
そして願わくば、俺が暴走した時に止めて欲しい。これはアイズに

対してもそう願っている。

♠???
♣?♦?

気絶したベルを背負って、俺は日が登って明るくなった道を歩いていく。
すると、気絶していたベルが起きた。
「……う、ううん……あれ、ここ……」
「お、ようやく起きたか。どうだ、気分は」
「少し、傷が痛いですね。あとは、眠いです」
気絶していたのにまだ寝るか。まぁ仕方ないか。頑張ってたし。
しばらく歩いていると、廃墟のような教会に到着した。そして驚いたことにその入り口でヘスティアが待っていたのだ。
「ヘスティア、ただいま」
「っ！　アル君！　ベル君！」
ヘスティアは走って俺達のところまで来た。だが、ベルの体を見てヘスティアは狼狽えた。
「ベル君!?　大丈夫なのかい？　アル君、これは一体――」
「神、様……」
ヘスティアが俺に問い質そうとしたところで、ベルがヘスティアを呼ぶ。
ベルはその深紅（ルベルライト）の瞳に闘志を宿して言った。
「僕……強くなりたいです……」
ヘスティアは一瞬目を見開いた。そして、優しく微笑み、彼女は頷いた。
「……うん」

ベルの体についた返り血を拭き取り、戦いによって出来て傷をポーションで治した。
ベルをベッドに運ぼうとしたのだが、ヘスティアにボクがやる！と言われた。そしてヘスティアに任せたのだが、

「ベル君、流石に今日はベッドで寝るんだよ」
「ありがとう、ございます。神様……」
「ふふん、その代わり、ボクも一緒に寝るからね」
「いいですよ。じゃあ、一緒に寝ましょう……」
「ふぇっ!?」
ぼふん、とベルがベッドに倒れ込んだ。肩を貸していたためヘスティアはベルと一緒に倒れた。
その後、駄神様が顔を赤くして何かブツブツ言っていた。今日も平常運転のようだ。
「流石駄神様。ベル君大好きだもんな」
「う、うるさいよアル君!」
顔を真っ赤にして言われても、ねぇ？　説得力ゼロだ。
ヘスティアはこれからベルの【ステイタス】を更新するようだ。俺も更新しようかと思ったが、倒したモンスターは1から6階層のモンスター。更新したとしても1くらいしか上がってないと思う。なら、更新はまた今度だな。
そう思って俺は仮眠をとることにした。確か今日から怪物祭（モンスターフィリア）だったはずだから、今のうちに寝ておこう。
そして俺は少しの仮眠をとることにしたのだった。

怪物祭
一話

朝の日差しが、高い市壁に囲まれるオラリオに届き始めていた頃。【ロキ・ファミリア】のホームの中庭でアイズが一人長椅子にぼー、として座っていた。いつもなら愛剣を振っている時間だが、今回は愛剣ではなく代剣のレイピアだからか、それもあるだろうが今日は気分が乗らなかった。

（私達のせいで、あの子に迷惑が……。それに、アルにまで……）

昨日の夜、ベートのある一言で嫌悪し、怒りもした。

『あんな雑魚共とお前じゃ釣り合わねぇ』

違う。ベルはまだ冒険者成り立て、だから弱いのは当たり前だ。けど、アルスは違うとアイズは思った。それに、ベートよりもアルスが強いのはアイズ自身がよく知っていた。

彼は、【ファミリア】が解散された後も『恩恵』なしで、手に持った小太刀だけでダンジョンに籠っていた。その時会ったアイズは目を見開いて、必死でやめさせた。死んで欲しくなかったからだ。だが、アルスはその時こう言った。

『俺にはダンジョンでモンスターを狩ることしか出来ないからさ……だから、ここで生活費を少しでもな』

あっけらかんとした態度でアルスは言ったのだ。これには普段口数が少ないアイズでさえ絶句した。確かに大昔の人々は『恩恵』なしでモンスターを狩ったと聞く。だが、まさか現実でその場面を見るとは思っていなかった。

その後もアルスはアイズの目の前でモンスターを狩っていた。1階層のモンスターでも常人に対しては力は雲泥の差。それでも『恩恵』がない人にとってはアルスは異常だった。それほど常人だったアルスは元から強かったのだ。だから、アイズは彼に強く憧れた。惹かれた。

あれこれぼー、と考えていると、アイズへ近付く者がいた。
「アイズ」
「リヴェリア……」
「相変わらず早いな。剣は振っていないようだが」
視線をリヴェリアと合わせていたが、アイズはそっとその金色の瞳を芝に落とした。
ほんの少し、間が空く。
リヴェリアは少し迷ったような表情をしたが、すぐにいつもの毅然とした表情になった。
「何があった」
アイズは顔を上げて、小さく視線をさまよわせた。言うか、言わないか。少し葛藤したが、話すことにした。
「酒場であった、ミノタウロスの話……」
「あぁ」
「私は、アルと一緒に、男の子……アルの仲間を助けたんだけど……」
その時あったことをリヴェリアに話し、リヴェリアは納得したように頷いた。頷いた後にリヴェリアはこめかみの部分を押さえた。
(アルスの殺気は確かに分かっていた。……やはり、あの時に話を止めるべきだった)
後悔するも、もう後の祭りだ。
リヴェリアは話終えたアイズの顔を窺った。いつも通りの乏しい表情に見える。だが、暗いなとリヴェリアは思った。
直接ではないにしろ、ベルを傷付けたことでアイズは悩んでいるようだと思った。それもあるが一番はアルスに迷惑をかけたと思っているだろうと、リヴェリアは悟った。
「お前はどうしたい？」
しばしばの沈黙の後、アイズが口を開いた。
「……分からない、けど」
アイズは必死に考えた。そして、小さな声で答えた。
「アルには謝らなくていい、って言われたけど……ちゃんと、謝りた

い、と思う」
「そうか……」
会話が途切れて、見計らったように館全体へ伝わる鐘の音が鳴り響いた。
朝食を知らせる合図だ。
「言ってくれれば、いつでも相談に乗ってやる」
「うん……」
「朝食だ。行こう」
そう言ってリヴェリアは踵を返した。
二人揃って、ホームの中へ入っていく。その最中、アイズがリヴェリアに声をかけた。
「リヴェリア……」
「ん？」
「……ありがとう」
変わらない彼女の表情に仄かな温もりを見つけたリヴェリアは、あぁ、と言って少し頬を緩めた。
（まだ、暗いな……。あの三人娘と……アルスに頼むか……）
激励の類が不得意なリヴェリアは、その手のことが得意な三人娘に任せた。そして、アイズがいつも通りになるにはアルスだ、とリヴェリアは思った。

♠???♣?♦?

あー、クソ。今日、怪物祭（モンスターフィリア）じゃなくて『神の宴』だった。
俺は今、絶賛不機嫌だった。何故なら、今日は怪物祭だー！　と思ってたのだが、昨日の夜のこともあり、記憶がすっぽり抜けていた。
ダンジョンに行ってもいいが、今日はそんな気分じゃなかった。昨日の夜のアイズの顔を思い出したからだ。
「はぁ……あんな泣きそうな顔すんなよなぁ……」
アイズが謝ってきた時、彼女は泣きそうな表情をしていた。いつもなら大体はアイズの気持ちは分かるが、あの時は分からなかった。何

故泣きそうになっていたのか。
「あー！　クソっ！　むしゃくしゃする!!」
街を歩きながら、俺は髪を掻き毟った。周りの人達がぎょっと目を剥くが気にしない。
現在の俺の服装は昨日の白色のパーカーではなく空色のパーカーだ。昨日のパーカーはモンスターの返り血が少しついたから洗濯中だから。
俺はお世話になっている【ミアハ・ファミリア】に行ってポーション類を大量購入してきた帰りだった。『神の宴』に行こうかと考えたが、やめた。面倒臭そうだったから。
口をへの字に曲げて歩き、道の角を曲がった時、
「おわっ……すみません」
「……いえ……」
俺が曲がった途端に通行人とぶつかりそうになった。反射的に謝り、すぐに去ろうとするといきなりガシッ、と腕を掴まれた。
「な、なんですか。謝りましたよ……ね……？」
俺は腕を掴む手を伝い、相手の顔を見た。顔を見た俺は一瞬で固まった。相手は、
「アルスはっけ～ん♪」
「あら、ちょうどよかったわ」
「そうですね。ちょうどよかったです」
「……」
アマゾネス姉妹とエルフ一人、女神一人……じゃない。アイズ一人。……え、アイズ？
「お、お前ら……！　なんでここに」
俺はゲッと気まずい表情になった。なにせ昨日の一件があるため、こいつら【ロキ・ファミリア】には会いたくなかった。
「なんで、って言われてもねぇ？」
「街にいて何か悪いですか？　レイカーさん？」
ティオネとレフィーヤが、何か文句でも？　と言いたげな視線をぶつけてくる。何も文句なんかねぇよ。全部俺の都合だし。

ていうか、さっきのはどういう意味だ。ちょうどいいって。
「で、なんだよ。ちょうどいいって」
「あぁ、そうそう！　アルスには！　あたし達と一緒にアイズの服を選んでもらいます！」
　褐色の肌が多く露出した両腕を広げてティオナがそう宣言した。このセリフで分かる通り、決定事項のようだ。何を言っても聞きはしないだろう。
「はぁ……アイズはいいのか？」
「う、うん……」
　なんかまた暗いし。しかも【ステイタス】関連じゃないだろう。もしかしたら昨日の夜のことをまだ引き摺ってるのか。
「安心しろよアイズ。ベルは無事見つけたし。怪我は膝を少しやらかしたけど、あいつは大丈夫だから」
「……そう。よかった……」
　お、少しはマシになったか。ベルのこともネックになってたんだな。
「じゃあ、アルスが来たことだし行こう！」
　ティオナに腕を掴まれた状態で俺はズルズルと引き摺られるようについていった。アイズも手をしっかり握られている。
　行き先はどうやら路地裏のようだ。確かあそこにはいろいろな服屋があったはずだ。そして、ついた店を見て、俺とレフィーヤが狼狽えた。
「こ、ここは……」
「ま、待て……俺は男だぞ。アマゾネスの服なんて下着同然だろうが」
　そう、俺達の目の前にある店はアマゾネスの服屋だった。
　エルフはあまり露出が多い服は好まない。なのでレフィーヤは抵抗があるのだろう。そして男の俺に関しては言わずもがな。
「久しぶりねー、私もちょっと羽目を外しちゃおうかしら」
「ほらほら、アイズ行くよ！　アルスは逃がさないから」
　昨日の夜も思ったんだが、俺の力ってＳ　９５１だよね？　なんで俺よりも力が弱いベルに押し退けられたり、こうしてティオナに腕を

掴まれて動けないでいるのだろうか。
ティオナとティオネによって連行される俺とアイズは店内に入るのだった。後ろからレフィーヤが慌てて追ってくる。
正直に言う。俺、アイズ、レフィーヤからしたら店内は目に毒だった。
カウンターの奥で見本として飾られている品々は、人並みの恥じらいを持つ者なら目を逸らしたくなるような服ばかり。
アマゾネスの店員はというと、下着も同然のような格好をしている。
「俺、外出てていいか……？」
顔を俯かせて俺はアイズに訊いた。チラリとアイズを見る。流石にアマゾネスの服は恥ずかしいのか、うっすらと頬を染めている。
「う、うん。で、できれば……」
「ダメよ、アルスもちゃんとここにいること」
ティオネによって退路が断たれた。や、やばい。アマゾネスの服を着たアイズを見たら俺の心臓が潰れる。
「アイズ、これなんてどう？　あたしとお揃い～」
「え、えっと……」
ティオナが勧めるのは、紅色のパレオと胸巻きの組み合わせだ。今ティオナが着ているものと似た衣装に、アイズは真っ赤になって、俺を見てきた。
オイ、なんで今俺を見る。凄く胸がバクバクいってるぞ。
もうダメだ、と内心思っていると、
「だっ、ダメですっっ!!」
わなわなと肩を震わせていたレフィーヤが爆発した。
「こんな、こんなみだらな服をアイズさんに着させるなんて、私が許しません!!　アイズさんはもっと、もっと清く美しく慎み深い格好をしなくては！　そうっ、エルフの私達のような!!」
自分の胸を手で叩き、真っ赤にしてまくし立てるレフィーヤ。
確かにアイズには露出が多い服は似合わないかな。まぁ、見てみたいけど俺が死ぬし。でもだからと言ってレフィーヤみたいに低露出

もちょっと、という俺の見解。
「でも、こんな服を着たアイズも見てみたくない？　ねえ、アルス？」
ピタリと止まるレフィーヤ。俺は直立不動になり、思考が停止してしまった。
「あ、ありません!!」
「ちょっと考えたでしょ？　アルスなんて真っ赤になって固まってるしね」
ニヤニヤと笑いながらティオナが言う。そして俺はようやくフリーズから脱した。
「うるさい。アイズにはそれは似合わないと俺は思うぞ」
どうにか平静を装うことに成功した俺は言う。まぁ、心臓はバクバクいってて死にそうだが。決してアマゾネスの服を着たアイズを想像したわけじゃない。絶対に。
「アイズさん、エルフの店に行きましょう！　不肖ながらこの私が精一杯見繕います！」
「れ、レフィーヤ……。あ、アル、助けて……」
戸惑い驚くアイズが店の外に引っ張り出される時に彼女は俺を見た。その目が捨てられる子犬みたいで俺を大いに揺さぶった。
だが、
「ごめん、アイズ」
片手で合掌して俺は苦笑いを浮かべた。その時に、馬鹿、と聞こえたが気の所為ではないだろう。
俺は後ろにいるアマゾネス姉妹を一瞥した。にやりと笑う二人はすぐにアイズとレフィーヤを追った。その際にティオナは俺が逃げないように服を掴んだ。
「やっぱり逃げられないのか……」
そう呻いて、ついていくのだった。
その後もずっと、彼女達は俺とアイズを振り回し続けた。度々俺の心臓が止まりかけたがな。

二話

「「おおー」」
「もう……死んでもいいかな……」
三つの歓声と俺の謎の一言。
俺達が声を揃える中、気恥ずかしさで頬を染めるアイズは人形のように佇んで軽く俯いている。
白の短衣にミニスカート、白のニーソックス。短衣にはさり気なく花を象った刺繍が施されている。単純な組み合わせだが、着こなしているのがアイズだ。綺麗な金色の長髪に相まってこれ以上ないほど、美しかった。
「に、似合ってます、アイズさん！」
「うんうん、凄くいい！　ロキがいたら飛び付いてきそう！」
「肌は綺麗だし、引っ込んでるところは引っ込んでるし……羨ましいわね、本当」
黄色い声が服を試着したアイズを取り囲んだ。
いつも防具や腰に剣を装着しているから、こんな可愛い服を着ているアイズを見たのは初めてかもしれない。
「ほら、あたし達も一言言ったんだからアルスもちゃんと言う！」
ティオナがニヤニヤ笑いではなく、純粋な笑顔で言う。
「そ、そうだな……似合ってて、そ、その……可愛いと思うぞ？」
頭を掻きながら俺は言った。本当はもっといい言葉があると思うが、今の俺にはハードルが高い。
アイズをチラリと見る。彼女はボフン、と音を立てそうなほど赤くしていた。それを見たティオナは笑みを漏らした。
「アイズ！　これにしよう！」
「うん……」
ぎゅうぅ、と俺の心臓が掴まれた感覚に陥った。頬を染めて小さく頷くアイズがたまらなく可愛いからだ。何度も思うが、俺ってもう末期だと思う。自分でもそう思う。

「結局、ヒューマンのお店で買っちゃいましたね」
「まぁ、無難だしね。こだわりがなかったら、普通にここでしょ」
俺達が回った店は既に数え切れない。エルフの店だったり、他種族の店だったり。まぁ結局はレフィーヤが言った通りヒューマンの店で買うことになったが。
「ティオナ、お金は……」
「いーよ！　あたしから――」
「俺が払う。いいもの見れたしな」
ティオナの言葉を遮って俺が言う。実際、本当にいいものを見れた。これが福眼というものだろう。
「でも……」
「いいからいいから。ただのお節介だよ」
「ありがとう……」
目を合わせてお礼を言ったアイズだったが、言った後すぐに目を逸らして俯いてしまった。凄く可愛い。
「ちょっとアルス～？　アイズの服あたしが買おうって思ってたのに～！」
案の定、遮られて自分がしたかったことを横取りされたティオナは俺に文句を垂れる。
「なら、アイズに似合うアクセサリーでも買ってあげたらどうだ？　それか服をティオナが買って、俺がアクセサリーを買うか」
「アクセサリー買ったって、アイズはあんたがあげた指輪しか付けないから無駄よ！　……あ、アルスが買えば違うかな……」
ティオナの言葉を聞いて、アイズはますます顔を赤らめた。
まさか、俺があげた指輪しか付けないというのは驚きだった。もうちょっとオシャレしろとツッコミたい。
「まぁいいや。服は俺が買うからな」
「うー……あ！　なら、ご飯もあんたが払ってよ！」
唸ったティオナだったが、言った言葉は、奢れ、というものだった。ティオナに便乗してティオネとレフィーヤも言い出した。
「そうね、奢ってくれる？　アルス」

「お願いしますねレイカーさん」
何故俺が奢んなきゃならないんだ。俺の頭の中疑問でいっぱいだぞ。あと、アクセサリーの件は無しになったのか。
「アル、ごめんなさい……」
「別にいいよ、金は結構あるから。じゃあ、会計しに行くぞ」
謝るアイズに微笑んで、俺はカウンターに行く。その際に店員からニヤニヤとした笑みをもらったが、俺のスルースキル――【ステイタス】とは無関係――が効果を発揮した。
時間は正午に近く、青い空に太陽が煌々と輝いている。
アイズが元から着ていた服は布に包まれており、購入したばかりの服を無理矢理着せられていた。普段着ない可愛らしい服に、アイズはもじもじしながら歩く。それを見た俺達の笑みを誘う。
「そろそろお昼にしない？　あたし、お腹空いちゃった。いっぱい食べたいなぁ？」
「少し早いような気もするけど、そうしましょうか。私も少し多めに食べようかしら？」
「……お前ら太るぞ」
「何か言った？」
「いえ、なんでも」
小さく言ったつもりだったのに聞こえてしまったようだ。恐ろしいな。
人の金だから多く食べる気満々の二人を見てなんとしてでも阻止しようかと考える。
「確か、この先にカフェがありましたね。そこに行きましょう」
「はぁ……一人一〇〇〇ヴァリスまでな……」
なんだか、俺が保護者になった感じがしてきた。
会話しながら歩いていると、視線を感じた。
「どうした、アイズ？」
「あの、アル……」
何か言おうとしていたアイズだったが、どんっ、という衝撃に俺は少々驚いた。

「おっと、ごめんよ、少年君！　すまない、急いでるんだ！」
俺にぶつかった少女は謝罪してすぐに先へ行ってしまった。その後ろ姿を見て、俺は目を瞬かせた。
「ヘスティア？　何してんだ」
「え、レイカーさん知ってるんですか？」
「アル、詳しく……」
思わず出た俺の呟きにレフィーヤとアイズが反応した。レフィーヤは純粋な疑問。アイズに関しては責めるような目で俺を見ている。
「俺の【ファミリア】のところの主神だよ。……アイズ、そんなに詰め寄らないでくれ」
答えるもアイズは俺に詰め寄ってくる。苦笑いを浮かべながら、俺はアイズをなだめる。
「……本当？」
「本当本当。というか、やっぱり俺って信用ない？」
コクコク頷いて言う。最後は半ば独り言だ。
アイズは渋々と言った様子で納得してくれた。……してくれたかな。不安だ。まぁ、何かあったら”あいつはベル君大好きっ子だ”と言えばいいだろう。
「あの女神様、胸デカくなかった？」
「「「……」」」
ティオナの言葉で俺達四人は固まった。
確かにヘスティアは胸がデカイ。他の神様達からもロリ巨乳などと言われるほどに。
何故ヘスティアが急いでいるかと言うと、今日は『神の宴』かあるからだ。『神の宴』というのはその名の通り、神様の宴会だ。
「あいつ、タダ飯に行くつもりか……？」
俺はボソッと呟く。呟きを聞いたアイズは首を傾げて訊いてきた。
「タダ飯？」
「ん？　あぁ……俺の【ファミリア】って俺入れて構成員二人でさ。だから、金がカツカツなんだよ。さっきの神様もアルバイトしてくれてるけど、現状はキツイな」

でも、と俺は続ける。
「それでも楽しいよ。なんか、暖かいから」
俺は笑顔を見せて言う。アイズはそれを見て目を逸らしてしまった。俺はさっきまでの笑顔を消して、次はニヤニヤ笑いを浮かべた。
「んー？　アイズどうかしたかなぁ？」
「っ！　……なんでも、ない」
回り込んでアイズの顔を見ようとする。だが、アイズは赤くしてそっぽを向いてしまう。それを何度か繰り返していると、後ろから蹴りが飛んできた。
「ぐあっ!?　……いつつ……何するんだよティオナ！」
「「イチャイチャしないっ!!」」
アマゾネス姉妹とレフィーヤに怒られてしまった。イチャイチャしていたつもりはなかったのだが、何故だろう。
三人の剣幕に、俺とアイズはしょんぼりしたように謝った。
「すみませんでした……」
「でした……」
……俺は反省してるけど、アイズは絶対に反省してないよな？
その謝り方は。どうするんだよ、また怒るぞ。
「アルス！　カフェ行ったら絶対に奢ること！」
「そうね。奢ってもらわないと気が済まないわ」
「何食べましょうか。あ、ジャンボパフェでも」
何故矛先が俺に向かってくるんだよ。ティオネに関しては絶対に、フィンさんにアタックしても応えてくれないから、その怒りもあるんだろう。あと、レフィーヤ。お前はそのパフェを食べられるのか。
「アイズ、ちゃんと謝れよ……」
「ごめんなさい」
「今謝られても……な……」
密かに俺は涙を流した。これのせいで、昼食の代金が一万ヴァリス飛んだのは想像に難くない。お金って大切だよな……はぁ……

三話

「ねぇ、この後は南のメインストリートに行こうよ！」
　昼食を食べ終えたところで、ティオナがそう言ってきた。まだ一時過ぎ頃だと思うので時間的に余裕はある。ある、のだが、疲れてきた。とくに周りからの視線が辛い。
　面子は俺、アイズ、レフィーヤ、ティオネ、ティオナ。これで分かる通り男は俺だけ。見る人によってはハーレムだ。全くもってこれは遺憾だ。俺はアイズ一筋だというのに。……何を俺は考えてるんだ。
「繁華街ね……私はいいけど」
「私も大丈夫です」
「じゃあ、俺は疲れたから帰ｒ」
「アルスぅ？　逃げない逃げない。どうせ暇なんだし。アイズも行こう！　夜にならなくてもあっちは凄い賑やかだから楽しいよ！」
　俺を挟んでティオナはアイズに笑いかけると、彼女は何も言わずに視線を落とした。
「アイズ、今は楽しもうぜ？　そんな暗いと可愛い顔が台無しだぞ？」
　どこか気が咎めたような素振りを見せるアイズに俺は冗談めかして言う。だが、アイズは視線を上げようとしない。
　そんな姿を見て、俺は痛々しく見えてしまって、俺はそんなアイズの頭に手を置いた。
「……？」
　目を丸くしてアイズは俺を見る。
「あんまりさ、思い詰めるなよ。何がお前をそうさせる？　【ステイタス】のことか？　ベルのことか？」
　優しく声をかける。俺の質問にアイズは首を振る。じゃあなんだ？　と訊くと、思ってもみなかったことを言った。
「……【ステイタス】もある、あの子のこともある……けど、一番は……アルに迷惑かけたこと……」

「俺に？　アイズに迷惑かけられたっけ？」
ないと思うけど。何かあったっけ？
うーん、うーん、と考えているとアイズから答えた。
「昨日の……ことで、迷惑かけちゃったから……」
なるほど。昨日のベートの発言のことで落ち込んでたのか。でも、それは昨日アイズのせいじゃないって言ったのに。全くこの娘は。
俺は溜息をついて、アイズの柔らかい頬を抓った。
「っ!?　……いはい、あふ」
「俺は謝って欲しくて服買ったんじゃないんだぞ？　純粋にいいもの見れたと思ったからだ。それに、俺があの犬っころに対して根に持つと思うか？」
頬から手を離してアイズの金色の瞳を見て言う。アイズは小さく首を振った。
「なら、お前が気にすることじゃないよ。あと、なんか悩んでたらリヴェリアさんやここにいる三人に相談すればいい」
「……うん。アルにも相談する……」
「俺らが会ったら、即ダンジョン直行じゃねぇか。相談なんてする時間あるか？」
「……ない」
だろ？　と俺はアイズ言う。相談するにしても、モンスターを狩りながらの相談になってしまうだろう。どんな相談の仕方だ。
しかしアイズはどこか不満そうに口を尖らせている。
「あのさ、アイズ、アルス」
「「ん？」」
「あたし達いるんだから、二人だけの空間作らないでくれますかね？」
ティオナがジト目で俺達二人を見てくる。そしてティオナに便乗して、ティオネも言ってくる。
「そうよ。私からしたら嫌味みたいに見えるわ」
「ぐ、ぬぬぬぬ……」
レフィーヤが俺に殺気をぶつけてくるのは何故だろうか。いや、大体は予想できてるからいいけども。

「さ、お昼も食べたし南のメインストリートへレッツゴー！」
椅子から立ち上がってティオナがテンション高めに右手を掲げた。
俺達はそれに苦笑しながら小さめに手を掲げた。

♠???♣?♦?

グチャ、と水分が含んだものが落ちる音が俺の耳に届いた。目の前にあるのは、今さっき屠った大型モンスター、『バグベアー』の死体。
その死体はすぐに魔石を残して霧散した。
「はぁ……」
チン、と音を立てて太刀を鞘に収めて魔石を拾う。
アイズ達とは、夕方になるまで遊んで【ロキ・ファミリア】のホームまで送り届けた。そして今、軽くダンジョンでモンスターを狩っている最中だった。
そろそろバックパックに入り切らなくなってきたので帰ろうとすると、奥から走る音が聞こえて、それがだんだんとこっちに向かってきた。凝視してみると、一人のヒューマンの少女が手を振っていた。
俺は後ろを振り返って誰もいないことを確認。体を正面に戻すと少女がすぐに近くにやってきた。
「久しぶり～アルっ」
「どわっ……！」
その少女は俺の首に抱きついた。俺は素早く彼女の顔に手を当てて引き剥がそうとした。
「相変わらずのうざったさだな、フウ」
うんざりしたように俺は長い銀髪にアイスブルーの瞳をして母性溢れる胸をした少女――フウ・リンクスに言う。彼女はパッ、と俺から離れて笑顔を見せた。
「ひっどいなぁアルは。彼女のわたしと会えたのに」
「誰の彼女だ。冗談でも程々にしとけ」
ゴツン、とフウの頭に軽くゲンコツを見舞う。身長が俺より低いフウに対してはこれが有効的なのだ。

目に涙を溜めてフウは、はーい、と返事をした。
「それにしても……お前、あれからどこ行ってたんだよ？　他の元メンバーから訊いても全然分からないって言ってたぞ」
そう、こいつは俺がヴリトラを殺して【ファミリア】が解散された後、元メンバーにも何も言わずに行方を眩ませた。
その本人であるフウは、きょとんとした表情を作って、次にはポンと手を叩いた。
「そういえばそうだったかも！　いやー、忘れてたわ」
「やっぱお前、適当だな。……お前が【ヴリトラ・ファミリア】の中で二位だったのが不思議なくらいだ」
「えへへー。褒められちゃった♪」
「褒めてないっ！」
こいつといると調子が狂う。いつも俺がボケ担当――かどうか分からんが――なのに何故俺がツッコミ担当になってしまうのか。
ふと、俺は気になったことをフウに問うた。
「というか、お前、どこに入ったんだ？」
単身でダンジョンにいるということは、冒険者になったということだろう。では、どこに入ったのか。
「ん？　えっとね、【アナト・ファミリア】っていう中規模の【ファミリア】よ」
「アナト……あぁ……俺のところにも前に来たな」
愛と戦いを象徴する女神様だったはずだ。にしても、愛と戦い、ねぇ？　確かにこいつにはお似合いの【ファミリア】だろうが……しっくり来すぎて気持ち悪くなってきた。
「大丈夫、アル？　顔色悪いわよ？」
俺の気持ちなんぞ一ミリ、いや一マイクロも理解していないフウが俺の顔を除き込む。
「大丈夫だ。ただ単に自爆しただけだ」
俺が言ったことが分からないフウは、む？　と唸って首を傾げた。
その直後、俺の後ろにある壁がピシッ、と亀裂が走ってそこから大型モンスターが湧いて出た。

「へぇ、珍しいなこいつがここで湧くなんて」
「『ワイルドベアー』……。それにしても、アルのその余裕は通常運転なのね」
「余裕っていうか、なんていうか。もうこんなの慣れたし」
「慣れた？　アル、貴方どれだけ潜ってるのよ……」
フウがジト目で言ってくる。こうしてモンスター目の前にして無駄口を叩き合うのは数ヶ月振りだな。
俺達は無駄口を叩き合うのをやめて、雄叫びを上げて向かってくるワイルドベアーを見据えた。俺は太刀を、フウは片手用両刃直剣（ワンハンド・ロングソード）を構えた。
「久しぶりに連携技やる？」
ワクワクしたようにフウが訊いてきた。俺は溜息をついて、頷いた。
「やったぁ！　久しぶり久しぶり！」
なにやら凄い笑顔なんだが、良く分からない。こいつの考えていることがあまり分からないのだ。
ただ、戦闘に関しては考えてることが分かる。どのタイミングでフウが切り込んで、モンスターから離れるか。
俺とフウは同時に地面を蹴る。初撃を与えるのはフウ。
「りゃぁああっ！」
フウがバツの字にワイルドベアーを斬ってみせて、すぐに後ろに後退。すぐさま俺が割り込む。
「シッ！」
敏捷を全開にして鞘から素早く抜刀する。そして、一瞬にしてワイルドベアーの体にはバツの字の傷の上に十字の傷が出来上がっていた。
チン、と鞘に納めた時と同時に血飛沫を上げて崩れ落ちた。
「うっひゃ～やっぱりこの連携技ってエグイわね」
「まぁ、な。久々にやったからコンマ五秒ズレたがな」
そう？　とフウは言いながら片手剣を背中にある鞘に納めた。
この技は、フウがバツの字で切り込んでモンスターの怯みを与え

て、俺が即座に十字に斬る。初撃こそ視認できるがそれも怪しい。そして二撃目は視認は不可能の斬撃だ。
「さてと、帰るか……」
「そうなの？　じゃあ、わたしも帰ろっ」
そう言って俺のすぐ隣にフウは歩き始めた。俺が距離をとると近づいてくる。しばらくそのいたちごっこが続いたが、結局俺が諦めることになった。

四話

げっそりした感じで俺は廃墟と化した教会に帰ってきた。地下への扉を開けて、俺は真っ直ぐにソファーに倒れ込んだ。

「あー、疲れたもうヤダ。なんであいつと会っちまったんだ……」

倒れ込んで早々に俺はフウに対して愚痴を零した。それと同時に、奥の方から物音が聞こえて、振り向くと木製のコップを二つ持って微苦笑しているベルが立っていた。

「おかえりなさい、アルさん」

「ただいま、ベル。水ありがとな」

ベルから水の入ったコップを受け取り、それを煽った。疲れた体によく染みる。

コップをテーブルに置いて、俺はソファーにもたれた。

「あー……もう動きたくない……」

「あはは……お疲れ様です」

隣に座るベルが苦笑いをする。

少しの間そうしていたが、ベルがふと思い出したように俺に言ってきた。

「そういえば……アルさん、怪物祭（モンスターフィリア）ってなんですか？」

「ん？　怪物祭？」

はい、とベルが頷く。

怪物祭については、俺はあまり詳しくない。大雑把な説明でもいいのだろうか。少し悩んだが、結局俺は大雑把でも説明することにした。

「大雑把に説明するとだな、ギルド主催の毎年行われる大々的なモンスターの調教だ。それを見世物にして、祭りを行う。……普段狩っているモンスターだけど、少し同情するかな」

本当にモンスター達には同情する。何が悲しくて人間や亜人（デミ・ヒューマン）に調教されなければならないんだろうな。ご愁傷様としか言いようがない。

俺はそう思って眉を寄せた。ベルは少し顔を青くさせている。

「ってことは、街にモンスターがいるってことですよね!?」
「あぁ、そうなる。ただ、モンスターが逃げる確率は極僅かだけどな。【ガネーシャ・ファミリア】の連中が警備するし」
俺がそう言うとベルは、ふぅ、と安堵した。まぁ、気持ちは分からなくもない。事実、俺も初めて怪物祭を見に行く時はモンスターが逃げないかハラハラしたものだ。
「あ、今日、ミアハ様に会いましたよ。アルさんがポーション類を大量購入してくれたこと、嬉しそうに話してくれました」
「ん、そっか。多分次の一人遠征は二週間後だから……その間にポーション類は減るから、近いうちにまた大量購入だな」
流石に小太刀がない状態で二、三日ダンジョンに籠るなんて難しい。出来れば万全の状態で臨みたい。あと、ベルがＬｖ．２になってくれれば、二人で遠征に行きたい。ベルのＬｖ．を考慮してたが、ベルの【ステイタス】の伸び具合から察するに、十分下層にいるモンスターと渡り合えるはずだ。
「神様、パーティ楽しんでるかなぁ」
「さぁな。多分、ロキと喧嘩してると思うけど……」
仲裁役になるかもしれないヘファイストスやインドラは可哀想だな、と俺は思った。

♠???♣?♦?

「何しに来たんだよ、君は……！」
「なんや、理由がなきゃ来ちゃあかんのか？　『今宵は宴じゃー！』っていうノリやろ？　むしろ理由を探す方が無粋っちゅうもんや。はぁ、マジで空気読めてへんよ、このドチビ」
「……！……!!」
『神の宴』真っ最中のヘスティアは、神友（しんゆう）である紅い髪を持ち、右目に眼帯をした麗人――ヘファイストスに再会して話していると、次にショートヘアの金髪を揺らし瞳が碧眼の少女――インドラがやって来た。すぐに三人の中に、美を象徴する女神、フレイヤが来た。

あれこれ話していると、次に来たのエセ関西弁を喋るロキだった。そして今、ヘスティアとロキの『ロリ巨乳ＶＳロリ無乳』の喧嘩が始まっていた。アルスの言ったことが当たってしまったということだ。
「す、凄い顔になってるよ？　ヘスティア？」
苦笑いを浮かべて、インドラが言う。自分より頭二つ背が高いロキに馬鹿にされて、ヘスティアはインドラに言われるように言い表せないような引き攣った顔をしていた。
「本当に久しぶりね、ロキ。ヘスティアやフレイヤ、インドラにも会えたし、今日は珍しいこと続きだわ」
ヘファイストスが心からそう言った。神様達は下界に大勢来ているが、あまり会わないのだ。
特に、インドラに至ってはライバルであり良き友だったヴリトラの死により、数ヶ月間引き篭っていたせいもある。
「あー、確かに久しぶりやなぁ。……ま、久しくない顔もここにはおるんやけど」
糸目の瞳を薄く開いて、ロキは銀髪でグラマーな体型をしている美の女神フレイヤにニヤニヤと視線を送った。
「なに、貴女達どこかで会ってたの？」
「先日にちょっと会ったのよ。といっても、会話らしい会話はしていないのだけど」
「よく言うわ、話しかけんなっちゅうオーラ、全開で出しとったくせに」
ジト～、とフレイヤを見るロキ。
ヘスティアといえば、つんとした態度で会話を聞いていた。不機嫌な彼女の機嫌を治そうと、インドラは必死にヘスティアの口に食べ物を詰め込んでいたりもする。
ふと、ヘスティアはアルスのことを思い出した。
「ねぇ、ロキ。君の【ファミリア】所属しているヴァレン何某について聞きたいんだけど」
「あっ、『剣姫』ね。私もちょっと話を聞きたいわ」
「あたしも聞きたいかな」

ヘスティアに便乗してヘファイストスとインドラが訊く。
「うぅん？　ドチビがうちに願い事なんて、明日は溶岩か隕石の雨でも降るんとちゃうか？　ハルマゲドーン！　ラグナロクー！　みたいな感じで」
噛み付くぞこの野郎、とヘスティアは思った。ヘファイストスとインドラに至っては、なんでそんな喧嘩腰に言うの、と二人共思っていた。フレイヤは優雅にグラスを傾けているだけだ。
「……聞くよ。その噂の『剣姫』は、付き合ってるような男や伴侶はいるのかい？」
「んや、いないなぁ。ただ、好きな男はいるみたいやけどな。まぁ、渋々ながらうちも了承してるけど。それ以外は八つ裂きや」
「それって、アル君かい？」
どストレートにヘスティアは訊いた。アル、と聞いてインドラの肩がピクリと震えたが他の四人には見えなかったようだ。
ロキは薄く目を開いてヘスティアを見た。
「なんや、ドチビ知ってるんか。……ん？　もしかしてドチビの【ファミリア】なん!?」
ロキが驚いたようにヘスティアの肩を掴んで訊いた。ヘスティアはロキの般若の如き形相を見てコクコクと頷いた。それを見たロキは、なんでうちが誘ったのにドチビのとこ行ったんや……とブツブツ呟いた。
「ちょっとロキ、そのアルって子って……」
「……クソ、あんの女男めぇ……。ん、なんやフェイたん」
「その子って、アルス・レイカー？」
「そうや、【刀神斬殺（ゴッド・リーパー）】を持っとる奴や」
神ならゾッとするような単語を平気に口に出して言うロキに、ヘファイストスは少し呆れたが、噂の『剣姫』が、神の中ではある意味有名なアルスのことを好きだということの方が驚きだった。
「そ、そう。ヘスティア、大丈夫なの？　彼のこと」
「大丈夫さ！　アル君はそんな罰当たりなことしない、って言ったからね」

笑顔でヘスティアは言う。彼女の隣でインドラは手に料理を乗せて、懐かしむように言った。
「うん。アルは大丈夫だよ。神を殺すなんて、もう二度としたくないと思ってるはずだし」
ここにいないアルスの気持ちを代弁するかのようにインドラが言う。
確かに彼女のライバルのヴリトラを殺したのはアルスだ。しかし、あの時、ヴリトラを殺すしか方法がなかった。だから彼を憎むことはインドラに出来なかった。だから、彼女は一番悔やんでいるであろうアルスを庇った。
「そう、インドラが言うならそうなのね」
ヘファイストスもインドラの言ったことに納得したようだった。
ふと今気付いたように、インドラはロキに尋ねた。
「今更だけどさ、ロキがドレスなんて珍しいね？　いつも男物なのに」
「フヒヒ、それはアレや、インドラ。どっかのドチビが慌ただしくパーティに行く準備をしてるって小耳に挟んだんやぁ……」
チラリとヘスティアを見て、腰を折って背の低い彼女の顔にぐっと自分のドレスを寄せる。
「ドレスも着られない貧乏神をぉ、笑おうと思ったんやぁ」
（うぜぇぇぇぇぇぇぇてぇぇぇ!!）
（なんでロキってこんなことしか言えないんだろ……）
ロキの発言にヘスティアは大爆発しそうになり、インドラは溜息をついてヘスティアを宥めるのだった。ここにヴリトラがいれば上手く丸く収まるのに、とインドラとヘファイストスは内心涙した。

五話

朝早く、俺はダンジョンに潜っていた。今日は怪物祭（モンスターフィリア）があるため、今日はほとんど潜れないから朝早くから潜っているのだ。

「はぁあああっ！」

目の前にいる岩のようなゴツゴツした肌を持つ人間大の猿型モンスター、『ロックウータン』の比較的硬度が薄い喉元を俺は《倶利伽羅》で切り裂いた。

ロックウータンは断末魔を上げることもなく、魔石を残して霧散した。俺は魔石を拾い、腰のバックパックに押し込んだ。

「はぁ……今、何時だ……？」

手首につけた腕時計を見て、俺は現在時刻を確認した。時刻は九時ちょっと過ぎ。そろそろ帰るかと思い、俺は上層へと続く階段を上がった。

長い階段を上がり終えて、俺は周りを見渡した。そこには人数は少ないが、高レベルの冒険者達がジャラジャラと高価な装飾品やマジックアイテムをつけて歩いていた。

「ハッ、ジャラジャラつけてて邪魔にならないのかよ。しかも、武器も装飾だらけ……」

一応言っておくが、これは嫉妬ということではない。実際、武器に装飾をつけていると見栄えは良くなるが、その分脆くなる。対人戦闘にでもなればそこを狙われて壊れる。そこで勝負は終わり、そして殺される。

まぁ、対人戦闘は例外か。なんにせよ、武器に装飾をつけるのは俺は嫌だな。

そう思いながら俺はそのまま怪物祭会場に向かって歩き出した。

♠???♣?♦?

「はい、これ」
「おおぉ……!?」
「ほ〜っ！」
　昨日の夜、宴が終わり、ヘスティアはヘファイストスに頼み込んだ。ベルの武器を作って欲しい、と。勿論彼女はそれを突っ撥ねた。だが、ヘスティアは何度も頼み続けた。その時一緒にいたインドラも、作ってあげたら？　とヘスティアの援護に回り込まれ、最終的にはヘスティアが土下座をしてヘファイストスは了承した。
　そして、本当なら一日くらいかかる武器制作を約半日で仕上げることが出来た。役割分担をして効率良く制作に取り掛かったのだ。
「ご要望には応えられたかしら？」
「うんうんっ、十分十分っ！　文句なんてあるわけがないよ！」
　ヘスティアはそう言って、ヘファイストスから手渡された小型ケースの蓋を開けて中身を覗き込む。インドラも興味があり、ヘスティアと一緒に覗き込んだ。
「黒一色ね。なんだかアルが好きそう」
「あー、確かにそうだね」
　覗き込んだインドラが笑って言い、ヘスティアも納得してしまった。アルスはほとんど黒一色の姿をしているからだ。
　だが、この黒一色の短刀はベルに贈られる物だ。
「あ、ヘファイストス。この武器の名前ってなんなの？」
　インドラが、壁にハンマーを立てかけている途中のヘファイストスに問いかけた。彼女は振り向いて、ヘスティアを見た。
「……そうね、それは神（ヘスティア）の武器としか形容できないから……『神（ヘスティア）のナイフ』ってところかしら？」
「そうだね、いい名前じゃん！」
　インドラが賛成する。ヘスティアはいやー照れるなぁ、とご満悦のようで顔がにやけていた。
「言っておくけど、借金、踏み倒すんじゃないわよ」
　ジト目でヘファイストスが釘を刺す。

「わかってるっわかってる！」
「どうだか……」
笑顔で頷くだけのヘスティアにヘファイストスは溜息をついた。インドラも今のヘスティアを見て何を言ってもダメそうだと思った。
「いいんじゃない？　ヘスティアは早くベル君のところに行きたいんでしょ？」
「うんっ。それじゃあ、ボクは失礼するよ！　ありがとうね二人共っ！」
帰る準備を手早く済ませたヘスティアは扉のノブに手をかけた。
「ヘスティア！　あんた少しは休みなさいよー！」
ヘファイストスが出ていくヘスティアの背中に声をかけた。それに振り向かずにヘスティアはパタパタと手を振って小部屋から出て行った。
声をかけたヘファイストスに、インドラは意地悪な笑みを浮かべた。
「やっぱり、なんだかんだ言って、ヘファイストスはヘスティアに甘いよねぇ」
「そ、そりゃ、友達だから……」
「それをなんて言うんだっけ？」
「ぐっ……」
意地悪な笑みを浮かべるインドラをヘファイストスは恨みがましい目で見た。少し間が空き、はぁ、と溜息をついて素直に言う。
「……し、親友……」
「ふふ、素直でよろしいね～！」
「っ……この、インドラぁああ！」
「わーいっ」
小さな部屋の中で、ヘファイストスをからかったインドラは走って逃げた。すかさずヘファイストスはインドラを追いかけた。

♠???♣?♦?

これからどうしようか、とアルスは思った。
怪物祭会場に到着したアルスは多く建ち並ぶ屋台を見て少し迷っていた。そもそも、アルスはこういう人が多いところに一人で来ない。いつも誰かしらがいるからだ。ところが今は一人。
「どうしたものか……」
適当な店で何か買うか？　とアルスは頭を掻きながら歩いた。
しばらく店を見ながら歩いていたアルスだったが、ある店を視界に収めてそこに一直線に向かっていった。お金を握りしめて向かって行くあたり、さながらお使いを任された子供のようだ。
「すみません。ジャガ丸くんの小豆クリーム味、三つください」
「おう！　ちょっと待ってな兄ちゃん」
ジャガ丸くんとは潰した芋に衣をつけ、油で揚げた食品だ。アルスが頼んだものは更にクリームも混ぜて揚げられたもの。
彼が前に所属していた【ヴリトラ・ファミリア】のメンバーの極一部ではこれが愛食されていた。その中にヴリトラやフウも入っていた。
「はい、お待ち！　にしても兄ちゃん、それをよく食うな！」
「ありがとうございます。はむ……美味しいんですよ？」
モグモグと受け取るなり食べ始めるアルスに店員のおじさんは苦笑いを浮かべた。
アルスは店を後にしようとしたところで後ろに気配がした。振り向いてみると、
「はむ……」
手に持った小豆クリーム味のジャガ丸くんを可愛らしい口が捕らえた。その正体は、【ロキ・ファミリア】所属のアイズ・ヴァレンシュタイン。
「あ、アイズ……？　なんでここに……ってか、それ食いかけ……」
「？　別にアルのだから、気にしない」
アイズは、こてんと小首を傾げる。気にしないと言いつつも彼女の頬は少し赤くなっていた。それを見たアイズの隣にいたロキが鬼のような形相でアルスを睨んで叫んだ。

「アぁぁルぅぅスぅぅぅ!?　何しとんじゃおのれはぁぁ!?」
「いや、なんで俺にキレるんだよ!?　意味わからないぞ!?」
「じゃかあしいわっ！」
　そう言ってロキはアルスの頭を叩き、バシンッといい音が周囲に響き渡った。
「いっつ!?　てめぇロキ!?　斬り捨てられたいか!?」
「ほぉう?　やってみるか小僧ぉ?」
　あぁん?　とアルスとロキが額を合わせるほど近くで唸み合う。アイズはそれを他所に置いて、アルスの食べかけのジャガ丸くん小豆クリーム味をモグモグ食べてながら、また何個か買っていた。
「ったく……やっぱりお前といると疲れるわ」
「うちだって同じやっ！」
　言いながらまた睨み合う。アイズは溜息をついて、二人の間に割って入った。というより、アルスの口の中にジャガ丸くん小豆クリーム味を押し込んだ。反対側のロキの口の中には普通味のジャガ丸くんを押し込む。
「「んぐっ!?」」
「うるさいです、二人共」
　予想外の襲撃にアルスとロキは喉を押さえて飲み物を売っている屋台に突撃し、飲み物を喉に流し込んだ。
「アイズ！　危うく死ぬところだったぞ!?」
「アイズたんヒドイで……」
「うるさかったからです。それに、アルは死なないから、大丈夫」
「なにその信頼!?　全然嬉しくねぇ！」
　アイズの意味が分からない信頼に、アルスは叫んだ。
　次はロキがアイズに、あーん、をして欲しいと言っていたがそれはアルスに取られてしまった。それをしていた二人は顔が真っ赤になっていた。
　結果的に、アルスは一人で怪物祭を回ることにならずにアイズとロキと回すことになったのだった。……半ばアイズによる強制だったが。

六話

アルスとアイズ、ロキの三人が怪物祭（モンスターフィーリア）を楽しんでいる最中、ボロボロのローブを羽織り、その下にはゴツゴツした鎧を装着した一人の男がアルスを嗤いながら見ていた。

「今は楽しむといい……まぁ、すぐに楽しめなくなるがな」

綺麗なバリトンでその男はそう独りごちる。

男はローブを翻して何処かへ去っていった。数分後、怪物祭会場一帯にモンスターが何体か逃げ出して一部の人達が混乱に陥った。

確認した逃げ出したモンスターの中でも厄介そうだったのが、11階層に生まれ落ちる白色の大型モンスター、蛇のようで花のような奇怪なモンスター。そして、魔神のような強さを持ち、大剣を握ったモンスターの三体だった。

♠???♣?♦?

「っ!? ……なんだこの空気？」

「んー？ どうしたん、アルス？」

俺は闘技場周辺に張り詰めている雰囲気に疑問を感じた。何故か、ギルドの連中が動揺したり混乱したりしていたからだ。

「いや……なんか変じゃないか？」

「……そう言われてみれば、なんか変やな」

それに、と俺は続けた。【ガネーシャ・ファミリア】の団員達が武器を携えて広場から散っている。それが何より異変が起きたと判断できる、と俺は言った。

俺達は頷き合って、闘技場の南側、正門付近に足を運んだ。少人数で輪になって話し合うギルドの職員を見つけて、アイズが職員に情報の提供を求める。

「……すいません。何かあったんですか？」

アイズが声をかけると、ギルドの職員達は弾かれるように振り返っ

て目を見開いた。
「あ、アイズ・ヴァレンシュタイン……。あ、アルス・レイカー……!?」
「なんで俺を見て驚くかな……」
アイズの時は通常トーンで口にしたのに俺の時だけ何故驚いたように口にするかな。そんなに有名になったの？　悪い意味でなっちゃったかな。
俺がそう思っていると、彼等は驚いた後、一人の男性職員が早口で現在状況を説明した。
状況は、祭りのために捕獲されていた一部のモンスターが闘技場の地下に設置されていた檻から脱走し、この東部周辺へ散らばったということだった。モンスターを監視していた【ガネーシャ・ファミリア】の団員達は、魂を抜き取られたかのように放心して再起不能に陥ったとこと。
「これは、タチが悪いな……」
雑魚モンスターならほとんど瞬殺出来るが、さっき聞いたモンスターの名前に『ソードスタッグ』と『トロール』があった。２０階層より下に生息するモンスターはかなり危ない。こうしている間にも人が襲われているかもしれない。
「アル君」
「ん？　あ、エイナさん」
急に呼ばれて、俺は振り返るとセミロングの茶髪をしたハーフエルフの女性職員がいた。
「気を付けてね、いくら君が強くてもモンスターも強いんだから」
「大丈夫ですよ。いざって時は奥の手があるんで」
そう、とエイナさんは頷いてくれた。この状況でアイズの視線を感じるが無視しておくか。
逃げ出したモンスターはほとんどが東のメインストリートの方角へ向かったとギルドの職員は言っていたから、別方角に向かったモンスターは他の奴らに任せるか。
そして俺はあることを考えていた。それは、ベルやヘスティアのことだ。どうか、巻き込まれていないでくれ、と俺は切に願った。

俺はアイズに目配せをして、雑魚退治を頼んだ。俺が狙うのは放っておいたら被害が甚大ではないモンスター。
俺とアイズはそれぞれモンスターを狩るために、地を蹴った。

♠???
♣?♦?

最初に俺が発見したモンスターはソードスタッグだった。何か探しているように見えたが、被害が出る前に排除した方がいいと思い、首を即刻撥ねた。
一般人の人達がモンスターがいなくなったことに安堵して、家などから出てこようとしたが、俺が大声を出して制した。
「まだ、モンスターが出ています！　申し訳ないですが、今しばらくお待ちください！」
突然大声をだしたせいで一般人の人達は驚いてしまった。しかし、我に返って一般人達は家などに引っ込んだ。
ふぅ、と俺は息を吐いた。今まで大声を出したことは戦闘中や、ベートを説教した時くらいか。それくらいしか大声を出したことなんかないから、場違いにも少し緊張した。まぁ、別の意味で今は緊張しているのだが。
「一体、モンスター共は何を探しているんだ……？」
俺が口に出して言うと、ズシン、と地面が揺れた。地震かと思ったが違うと判断した。何故なら、ナニカが歩いているような振動だからだ。
「なんか、厄介な奴が来そうだな……」
冷や汗を流して、俺はポツリと呟いた。嫌な予感がして正直気持ち悪い。圧倒的な力の塊が接近してきていて、俺の【ステイタス】が少しだけ熱くなってきている。
『グオォォンッッ！』
「っ!?」
遠いが、ここからでも内蔵を掻き回すような咆哮が響き渡った。俺は咆哮が聞こえた方へ体を向けて、一直線に走って行った。

数分走っていると、またもや咆哮が響き渡る。確実に俺との距離が近くなってきていると俺は思った。
俺は奇襲をかけるために、住居の屋根に跳躍して登る。屋根の上を走り、俺はモンスターに近づくにつれて握っている太刀を強く握り締めた。

モンスターを発見した俺は走っている脚を止めて、呆然と立ち尽くした。無意識に顔が引き攣る。膝が笑う。背中に冷や汗を流す。
それほどそのモンスターは、いや、魔神は強いと思った。
黒々とした皮膚は鉄よりも硬く見え、腕はマルタよりも太く、体の大きさは七M（メドル）以上もある巨体。全体的に見て人型だが絶対に違うと言えるのが、その頭は悪魔のような角を持ち、馬のような顔には谷かと思うくらいの皺が刻んである。
そして、その印象的なのはその手に握る大きく無骨な湾刀（タルワール）。
「こいつが、あの咆哮の主……？」
屋根にある煙突の陰に俺は隠れて、呟いた。
陰から顔を覗かせて奇襲をかけるタイミングを測る。一番確実なのは、『神の力（アルカナム）』の一部を刀身に纏わせて首を撥ねることだ。だが、それでも倒せないと俺は思った。
魔神は何かを探すように首を左右に振りながら、ゆっくりと歩みを進める。その度にズシン、と地面を揺るがす。
完全に俺のいるところを通り過ぎ、俺は腹を括って魔神の後ろへ走り、刀身にヴリトラの『神の力』の一部を纏わせる。刀身が真っ黒なナニカが纏ったことを感じ取り、俺は魔神の太い首に全身全霊の一撃を叩き込んだ。
ズガァァァァッ！　と音を立てて、魔神の首にダメージを与えたと思った。だが、
『グオォォンッッ！』
「……ぐっ!!」
魔神は咆哮を上げて、振り向きざまにマルタよりも太い腕を俺に振るってきた。

ズドンっ、と俺は吹き飛び、屋根にめり込んだ。俺の思考はそんなことを他所に置いて、体のことを考えていた。
痛すぎる……！　なんだこいつは⁉『神の力』の一部使ってんのに可擦り傷一つつかないなんて……！
『グウゥゥ……!!』
獲物を見つけたように、魔神はその紅い眼をより一層輝かせて、湾刀を振り上げる。
俺はヨロヨロと立ち上がり、鞘を放り捨てて両手で中段に構える。魔神を睨みつけて、跳んだ。
「はあぁぁぁっ！」
真っ黒なナニカを炎のように燃え上がらせて、俺は振り下ろされる湾刀をスレスレで回避して、魔神の首元を横薙にした。
ズガァァッと音を立てるも、弾かれてしまった。俺は舌打ちをして、魔神を蹴りつけて屋根へ飛ぶ。
周りを見てみると、さっきの魔神の一振りで俺が跳んだ場所は放射状に崩れていた。一撃でその威力。もろに受けでもしたら、それは想像に難くない。
「これ、俺一人でどうにかできるか……？」
俺は強竜相手（カドモス）を一人でやるが、この魔神はそれより強い。そんな相手を一人で相手できるのかと不安に襲われた。
だがそれも一瞬のことで、俺は軽く頭を振った。魔神を冷めた目で見て、上段の構えとる。狙うのは、あの大きな湾刀。
【転移（シフト）】で転移させれればいいのだが、あれは無理だと本能で悟った。それならと思い、まずは相手の武器を潰す、と狙いを定めた。
ググッ、と脚に力を入れる。魔神は縦振りよりも横振りの方が良いと判断したのか、腰溜めの構えをとって、横薙の攻撃を放ってきた。
俺は力を入れていた力を開放して、屋根を蹴り、力を全開にして湾刀の一番脆いと思われる場所へ叩きつけた。
『グオッ？』
バキィン、と大きな湾刀は真っ二つに折れた。こちらの武器である《倶利伽羅》は不死属性（デュランダル）が付与されているので折れはしなかったが、著

しく消耗したと思われる。
魔神は間抜けな声を上げて首を傾げた。それを見た俺はハッ、と笑った。
「どうだよ、馬面……！　折ってやったぞ……！」
魔神に対して言ったが、形勢が不利なのは変わらなかった。何故なら、あちらは武器がない状態。対してこちらは武器が消耗し、左腕が使えなくなった状態。
通常、太刀や刀などは左に力を入れるため、怪我をするリスクがあるのは利き手である右より左の方が高いのだ。よって、今の左腕が使えなくなったのは必然だ。
「どうするかな、これ……」
顔を顰めて、俺は呟いた。
この状況を打破する方法はあるにはある。だが、その方法は危険を伴う。使えば爆発的な力を得るだろう。しかし、時間制限があり、その上使った後は軽く二日は寝たきりになる。もし時間制限以内にこの魔神を倒さなかったら、その時は死ぬ。
考えている間にも魔神は折れた湾刀を投げ捨てて、俺を睥睨する。
「もう、なるようになれば、いいかっ！」
自分を叱咤するように声を出して、俺は、硬く閉じられた扉の鍵を開けるイメージを浮かべた。ガチャ、と開けられ、その扉から夜空のような黒い力が流れ出した。
一歩、俺は魔神に近付く。その時に脚から夜空色の光が漏れ出していて、髪は栗色から漆黒に染め上がっていた。

七話

一歩踏みしめた俺の脚には、夜空色の光が漏れ出していた。また一歩、屋根の上を踏みしめる。反対側の脚にも光が漏れ出している。

腕にも、肩にもだ。俺は歯がむず痒く感じて、痛む左腕を上げて歯を触る。すると、犬歯が二C（セルチ）ほど伸びて鋭くなっていた。次いで髪も栗色から漆黒の髪に染め上がっている。

『グゥゥルゥ……』

魔神が異変を感じて訝しむ。俺はゆっくりと顔を上げて魔神を見上げる。ニッ、と笑って俺は転移して魔神の後ろに接近した。

「シッ！」

夜空色の光が纏った《倶利伽羅》を振るって、魔神の背中に深い傷を穿った。

『ルゥアァァアッ!?』

悲鳴のような咆哮を上げて、魔神は片膝をついた。俺はそのまま背中に着地して、渾身の突きを見舞う

突きを放つと、軌跡を残すように夜空色の光が舞う。瞬間、スオォォッと音が聞こえてきて、突きを放った場所が何かに飲まれたように綺麗に消え去った。

『ルアァァアアッ!!??』

絶叫を上げて、魔神はのたうちまわった。俺は太刀を片手でだらりと下げたまま地面に着地する。

魔神は絶叫を上げ終わると、怒りの表情を見せて鼻息を荒くして、マルタよりも太い腕で俺を殴ってきた。

「ふっ……！」

下げていた太刀を上段に構えて、半月を描くように片手で抜き胴を打つ。

魔神の拳と俺の夜空色の光が纏った太刀が真っ向から衝突した。俺はそのまま一切違和感を覚えることなく、太刀を振り切った。

『グゥアァ！』

拳から肘まで横に斬られて、魔神は苦悶の声を上げる。痛がる魔神を冷たい目で見て、俺は左手に鞘を転移させた。そのまま太刀を納めて、抜刀の構えを取る。

誰も見ていないことを確認して、俺は小さく呟く。

「――奥義」

呟き、一気に右足を踏み込む。弾丸が発射されたかのような音を立てて、俺は魔神に接近して太刀を抜く。一撃目は横薙。次は手首を返して縦に斬る。そしてその後は、音速を越えた斬撃を千回。

千回の斬撃を終えて、俺は魔神の後ろに着地する。

「千本桜・満開」

チン、と鞘に納めると魔神のあらゆる箇所から、鮮血を散らした。こちらに振り向いて襲いかかろうとする素振りを見せて、雷のブレスを吐こうとして一歩進んだところで大きな魔石を残して、その巨体を霧散させた。

「やっぱり、反則だ。この力……」

独り言を言いながら俺は大きな魔石を拾って、廃墟と化した教会へ転移させた。

俺はそのまま、アイズがいるところへ転移した。誰もいないところで倒れてしまっては危険だからだ。

一瞬の浮遊感と少しの目眩に襲われたが、すぐに治った。そして、目の前には急に現れた俺を見て驚く服がボロボロのアイズとロキがいた。

「っ！　アル、なの？」

髪の色が変わっているからか、俺だと判別できないのだろう。俺は小さく頷いて少し笑みを見せた。

ロキは俺の姿を見て、糸目を薄く開いて訊いてきた。

「アルス……自分、どんな姿してるか分かっとる？」

「……いい、や……」

普通に声を出したつもりだったが、声は掠れて、少々聞きづらくなってしまった。

大体の姿は理解しているが、瞳の色が分からない。体の何ヶ所から

出る夜空色の光と鋭い牙、そして漆黒の髪以外は分からない。
「……ほとんどヴリトラと同じような姿してんで」
「……ヴリ、トラと……？」
あいつの姿と同じような姿ということは、漆黒の髪に黄金の瞳を持ち、口には鋭い牙を持っているということか。是非鏡が欲しいところだが、そうは言ってられないな。というより、そろそろ気絶するかもしれない。
「……アイ、ズ。ロキ。……後は頼、む」
「え？」
そう言って俺は前のめりに倒れた。微かに包み込む温かさを感じて、俺は意識を手放した。

♠???
♣？♦？

アルスと魔神との戦闘を眺めていた男は、満足そうに笑った。しかし、男はその笑みを消して見下したように言う。
「ふん、まだだぞアルス。まだ、こんなのは序の口だ……」
綺麗なバリトンでそう言うと、男はローブを翻してその場を去っていった。
魔神を呼び寄せたのはこの男。何故アルスを狙ったかは、この男しか分からない。だが、これからアルス達の前には大きな障害が立ちはだかることは確かなようだった。

♠???
♣？♦？

時は遡り、アイズとアマゾネス姉妹、レフィーヤが蛇のようで花のようなモンスターを倒した後、アイズとロキは迷宮街の異名を持つ『ダイダロス通り』に来ていた。
残すモンスターはおそらく『シルバーバック』だろうと、アイズは思っていた。
だが、そのシルバーバックはある少年によって一撃で倒されたそう

だ。その少年の特徴を教えられたアイズは、驚いた。
（赤っぽい目をして白髪で、兎みたいな子……アルの仲間のベル？）
その子がシルバーバックを一撃で……？）
ミノタロス相手に逃げていた彼が、それより強いシルバーバックを倒すなんて、とアイズは驚いていた。そして、あの日多くの者に馬鹿にされ、悔し涙を流していた少年の『成長』をアイズは祝福した。
（……おめでとう）
そう思っていると、急に目の前に漆黒の髪長くした人物が現れた。その人物は俯いていた顔を上げて、アイズとその隣を歩いていたロキを見た。
「っ！　アル、なの？」
その人物の顔が、アイズの想い人の顔と重なって、咄嗟にアイズは彼の名前を口にした。
その人物――アルスは小さく頷いて少し笑みを浮かべた。
何があってこんな姿になったのだろうと、アイズはそう考えた。
隣のロキといえば、その糸目がちの目を薄く開いてアルスに訊いた。
「アルス……自分、どんな姿してるか分かっとる？」
「……いい、や……」
いつもなら、綺麗な高めのテノールの声なのだが、今は掠れてしまっていて声を出すのが辛そうに見えた。
それはロキも感じたようで、少し眉を寄せている。そして次に言う言葉を言って、ロキは悲しそうな表情を見せた。
「……ほとんどヴリトラと同じような姿してんで」
それを聞いたアルスはそのアイズとは違った金色の目を見開いて口ずさんだ。
「……ヴリ、トラと……？」
しばらくアルスは考えていたようだったが、次に頼む、と言って前に倒れそうになり、それをアイズが抱き抱えた。
抱き抱えて軽い、とアイズは思った。それほどモンスター相手に奮闘したのだろうと思った。それと同時に、アルスでこれなのだから自

分だったらどうなるか、とも思っていた。
それからロキは用事があると言って、どこかへ行ってしまった。アイズはアルスを背負ってティオナ達と合流して【ロキ・ファミリア】のホームへ向かった。

♠???♣?♦?

今回の怪物祭（モンスターフィリア）の一件が終わり、ヘスティアは徹夜で疲れていたため、シルバーバックの襲撃も相まって事件が終わった時に気絶してしまった。ベルはそんなヘスティアを心配して『豊饒の女主人』の二階の一室を借りて、ヘスティアを休ませた。
次の日、アルスに心配かけたかな、と思って教会に帰ると、アルスの姿はなかった。夜にもなっても帰ってこなくて、事情をギルドにいるエイナ・チュールに話すと、驚くことを言ってきた。
「アル君なら……モンスターとの戦闘の後で倒れちゃってね。今、【ロキ・ファミリア】が彼を保護しているのよ」
「え、ええ!?」
これにはベルも凄く驚いてしまった。何に驚いたかと言うと、アルスが倒れたことだ。ベルは彼がこのオラリオ内でも屈指の強者だと思っていたからだ。
「あの……アルさんは大丈夫なんでしょうか……？」
ベルが心配そうにエイナに訊く。エイナも心配そうに、眉を寄せて言う。
「うーん……アル君なら大丈夫だと思うけど、倒れちゃってから一度も起きてないって聞いたから……」
「そ、そうなんですか!?　アルさん大丈夫なのかな……」
ベルはうーん、唸った。いつも元気で強いアルスを見てきたベルにとっては、凄く不安な気持ちになっていた。

八話

夢を見ていた。
それは、自分の主神を殺したあの時。
あれはまさに地獄かと思うような光景。ホームにしていた場所は炎によって焼け崩れて、跡形も無く崩れていた。
主神は自分の『神の力（アルカナム）』を使わないために鎖などで自分を縛り、磔状態になっている。
そして、俺はもし『神の力』を使われた時に対抗するために以前殺した神の『神の力』の一部を使った。
『絶対に……お前の次の主神に同じ道を歩ませないでくれ……！　これが俺とお前の最後の約束だ』
体から、口から血を流す主神を見て、俺は涙を流しながら頷いた。そして、俺は真っ黒なナニカが纏った己の太刀で、崇めていた主神の首を落とした。
殺した後、俺は泣き叫んだ。子供のように。

♠???
♣?♦?

「……ん、うぅ、ん……」
目を開けようとすると、突然入ってきた光が俺の目を焼いた。
眩しくて左手で目を隠そうとしたが、左腕に痛みが走った。
「いっつっ！」
あまりの痛さに俺は思わず声をあげてしまった。
痛みによって、寝ていた頭が冴えてくる。そして何故寝ていたか思い出した。
「そっか……ヴリトラの力使って倒れたんだっけ……」
あの時、どうにでもなれと思って使った力。
ヴリトラを殺す前には、一人の神を殺した。その神は自分の子供達

を利用して悪事を働いた。時には窃盗をし、人を殺していた。そんな時に俺達【ヴリトラ・ファミリア】に依頼が来た。その神を殺して欲しい、と。

依頼が来たその日の夜に作戦を決行した。勿論、殺すのは俺の仕事だった。俺の《スキル》、【刀神斬殺】の能力を使って。

次の日にダンジョンに潜っていると、刀身に真っ黒なナニカが纏わりついていて、それをモンスターに向けて斬ってみると一瞬にして霧散した。

それからだ。俺には殺した神の『神の力』の一部を使えると分かったのは。

「まさか、ヴリトラの髪の色や瞳の色になるなんてな……」

苦笑して俺は無事の右手で前髪を弄る。その髪は漆黒の髪ではなく、いつも通りの栗色の髪だった。

しばらく弄った後、右手をベッドに投げ出す。

……ベッド？

「そういや、ここ、どこだ？」

今更俺は気付いた。俺が寝ていたのは教会にある地下室の床ではなくどこかの部屋のベッドだと。

ベッドは柔らかく、凄くいい匂いがする。匂いを嗅いでいるとなんだか安心する。

とりあえず、俺は上体を起こして部屋を見渡す。殺風景だが、白で統一された部屋はなんだが居心地がよかった。

ボーっとしていると、部屋の扉が開いた。開けた人物を見るために俺は扉の方向へ顔を向ける。

「あ……アル、起きたの？」

「あ、アイズ……お、おう……」

そういえば、後を頼むって言ったっけ。それにしてもまさかアイズの部屋に寝ていたなんて。今思ったら匂い嗅いじゃった、と恥ずかしい思いがする。というかここで死んでしまいたい。

「アイズ、俺何日寝てた？」

恥ずかしさを紛らわすために、俺は平静を装って訊く。せいぜい二

日だろと思っていたのだが、アイズの言葉を聞いて驚いてしまう。
「えっと……五日間寝ていた」
「え、ま、マジですか……？」
「うん」
あ、あれれ？　二日だと思っていたんだけどな。まさかの五日間寝ていたなんて思いもしなかった。
そして俺はハッ、と気付いた。俺が五日間寝ていたということはアイズはどこで寝ていたのだろうか。
「なぁ、アイズ。ここってお前の部屋、なんだよな？」
一応確認してみる。これで本当にアイズの部屋だとしたら凄く申し訳がない。
「……うん。嫌、だった？」
アイズは上目遣いで俺に言ってくる。俺はブンブン首を左右に振って否定した。
「い、いや！　嫌じゃない。ただ、五日間アイズがどこで寝てたか気になってな……」
気まずそうに俺は視線をアイズから白いカーテンから覗く窓の外へ向けた。
「え、えっと……そ、その……」
もう一度アイズに視線を戻すと、彼女は目を泳がせて頬を赤く染めた。俺は何故そのような反応をするのか気になり、首を傾げて訊いてみた。
「どうしたんだアイズ？」
ベッドに腰掛けたアイズは太腿の間に両手を挟んでモジモジして、意を決したように言った。
「……アルの、横で……」
「……」
あぁ、ここで死んでしまっても構わない。俺を産んでくれた母様、今俺は貴女の下へ行きます。
……まさにそんな気分に、俺はなった。
俺達二人の間に気まずい雰囲気が漂う。しかし、そんな雰囲気は扉

をノックする音によって砕かれた。
「……はい」
部屋の主であるアイズが返事をする。すぐに扉は開かれて、現れた人は【ロキ・ファミリア】の副団長、リヴェリア・リヨス・アールヴだった。
「入るぞ、アイズ。……ん？　起きていたのかアルス」
緑色の髪を揺らして、俺を見ると少し頬を緩めた。珍しいな、と俺は思った。
リヴェリアさんはあまり笑顔を見せないため、俺はそう思ったのだ。ということは、この人が笑顔を見せるほど俺の容態は悪かったということか。
「どうも、リヴェリアさん。ご迷惑をおかけしてすみません」
「いや、いいさ。これでアイズの機嫌が治るからな」
「リヴェリアっ……」
リヴェリアさんに頭を下げると、彼女は首を振る。次いで、彼女にしては珍しくニヤッとした笑みをアイズに向けた。
アイズは赤かった顔を、一際真っ赤にさせてリヴェリアさんを制してようとした。
「機嫌？　やっぱり、ベッド独占しちゃったから機嫌が悪かったのか？」
何故機嫌が悪かったのかは分からないが、もしそうなら、やはり申し訳がない。
だがアイズは真っ赤にしたまま、フルフルと首を振る。リヴェリアさんに目を向けると、本当に彼女にしては珍しい意地悪な笑みを浮かべていた。
「違うぞ。アイズは、アルスが近くにいるのに寝ていて構ってもらえないから機嫌が悪かっただけだ。あとは、ホームの中にお前がいるのに反発する者とかな」
「り、リヴェリア……」
リヴェリアさんのことを止めようと、アイズは声をかけるが、その声が段々小さくなっていく。

「そうだったのか……ごめんなアイズ。俺もここまで寝ていたとは思わなかったからさ」
「う、うん……」
アイズはそう言って縮こまってベッドの上で体育座りをしてしまった。その仕草がもの凄く可愛い。耳まで真っ赤にしてるし。
「それで、リヴェリアさんはどうして？　アイズに用でも？」
「いや、私が来たのはお前の見舞いだ。左腕の治療などを、な」
言いながらリヴェリアさんは手に持ったポーション類や薬草をチラつかせた。
俺はこの五日間こうしてお見舞いなどをアイズやリヴェリアさんがしてくれたことに遅まきながら分かった。
「本当にすみません。自業自得なのに」
本当に、これは自業自得なのだ。自分でなるようになれ、と思ってしたこと。
「まぁ、治療に関してはアイズが頼んだのだがな。アイズに感謝しろよアルス」
手際良く巻かれていた包帯を解かれて、次に薬草や高価なエリクサーを使うリヴェリアさんにそう言われる。
俺は未まだ体育座りをして顔を俯かせているアイズを見た。
「アイズ、ありがとな」
俺は笑みを浮かべて、アイズにお礼を言った。彼女は少しこちらを向いたが、すぐに顔を真っ赤にさせて俯いてしまった。
そんな反応をしたアイズを見て、俺とリヴェリアさんは少し声を出して笑った。
落ち着いたところで、リヴェリアさんは部屋から去ろうとした。去り際、彼女はとんでもない発言をした。
「あぁ、そうそう。部屋を出る時は気を付けろよ」
「え？」
「アイズの部屋付近にはティオネやティオナ達がいるから手出しされないが、それ以外は狙われるぞ」
それだけを残して、リヴェリアさんは出ていった。

俺は機械のようにギギギ、とアイズに視線だけで問う。
「……大丈夫、アルは私が守るから」
表情に変化がない乏しい表情で言う。どことなくキリッとしているのは見間違いではないだろう。
俺が狙われる理由は大体察することはできる。なにせ、女神より美しい美少女の部屋で寝ていたんだ。それりゃ狙われるだろう。主に男性陣に。
「……あはは……」
骨の節々が痛い今では、俺よりレベルが低い奴でも簡単に今の俺を倒すことは容易だろう。
その後、俺はアイズに肩を支えてもらいながら食堂に行った。【ロキ・ファミリア】の男性陣が睨んできてその内の三人程が突っかかってきた。
だがその時、ベートがその三人に一喝を入れて食堂から追い出した。
「さんきゅ、ベート」
「……ふん」
礼を言ったのだが、鼻を鳴らされてしまった。しかし、それはベートなりの照れ隠しなのかもしれないと俺は思った。
……案の定、ベートはティオナにからかわれている。
俺はそれを微笑ましく見ていたのだった。

魔剣／サポーター
一話

【ロキ・ファミリア】のホームで保護してもらってから数日が経ち、俺はベルとダンジョンの7階層に来ていた。
「それにしても、何度も言いますけど、心配しましたよアルさん」
「本当にごめんな、ベル」
一応、あの後は二日程【ロキ・ファミリア】のホームで療養をして、教会に戻った。
その時に地下室に戻った俺を見て、ベルは泣いて出迎えてくれた。エイナさんから事情を聞いていたらしく、とても心配したそうだ。勿論、ヘスティアも俺のことを心配してくれていたようだ。正直嬉しい。
「あ、ベル、後ろ」
「え？　うわぁ!?」
ベルの後ろにはいつの間にか、全身赤一色の蟻型モンスター、『キラーアント』が肉薄していた。それに驚いたベルは少し飛び跳ねて、距離をとって漆黒の短刀――《神様のナイフ（ヘスティア）》を構える。
怪物祭の時、ベルとその彼と一緒にいたヘスティアのところにシルバーバックというモンスターがいたそうだ。必死に逃げていたが、立ち向かうしか方法がなく、ヘスティアが持っていた風呂敷からその短刀を渡されたということみたいだ。
渡された短刀、《神様のナイフ》と向い打つ際に更新された【ステイタス】のおかげでベルはシルバーバックを一撃で屠ることが出来たらしい。らしい、というのは俺はその時、魔神と戦っていたから見られなかったからだ。情報源はアイズとベルから。
「ベル、短刀式でやってみてくれ」
「まだ一ノ型しか出来ないんですけど……いいですか？」
気まずそうに確認してくるベルに、俺は微笑んで頷いた。それを見たベルは、よーしっ！　と言って助走をつけて踏み込んだ。

続けて聞こえてくるのは、ザザッと地面と靴が擦れる音とグショッと言う音。音がした方へ目を向けると、キラーアントの頭が綺麗に切り飛ばされていた。
俺はパチパチと拍手して讃えた。
「だいぶ速くなったな。この調子で速くなれば俺より速くなるぞ」
「そ、そうですか？いやぁ～」
照れ笑いを浮かべてベルはその白髪の頭を掻いた。
「それに、このナイフのおかげですよ。神様には本当に感謝してますよ！」
嬉しそうに短刀を見て言うベルの顔には笑みが零れていた。
ベルの嬉しさも俺も分かる。《倶利伽羅》はヴリトラがゴブニュに頼んで協力して作った業物だからだ。刀身に刻まれた『刻印（ルーン）』の意味は分からないが、贈られた時は嬉しさのあまりヴリトラに抱き着いた。男同士は趣味じゃねぇ！　と言われたが、それ程俺は嬉しかった。
だから、俺はベルにこう言う。
「大切にしろよ。それはヘスティアとお前の絆の証だからな」
「神様との、絆の証……はいっ！　大切にします！」
元気良く返事をして、ベルはまた向かったて来る別のキラーアントに向かっていった。俺は《倶利伽羅》を鞘から抜いて、ベルの後ろに潜むキラーアントの首を撥ねた。

♠???
♣？♦？

「ななぁかぁいそぉ～？」
「は、はひっ!?」
「ふぁ～……」
怒気をプンプンと感じさせる口調でベルに対して言う。ベルに至っては悲鳴を上げている。俺はそれを見ながら欠伸をしている。
ダンジョンから戻ってギルドで換金し終わり、俺とベルはベルのアドバイザーのエイナさんもとへ顔を出すがてら、近況報告＆俺の体調

報告をとベルは意気揚々と、俺は最近酷い睡魔と戦いながら足を運んだ。運んだのだが、ベルの到達階層を7に増やしたことを彼女に話すと、目に見えてベルの絶頂期が右肩下がりになった。
「キィミィはっ！　私の言ったこと全っ然っ分かってないじゃない！」
　エイナさんがベルに言ったこと、というのはエイナさんがいつも口酸っぱく言う『冒険者は冒険しちゃダメ』のことだ。俺も何度となく言われたが、黙って深く潜っていた。まぁ、危うく死にそうになったがなんとかなった。
「ごごごごめんなさいぃっ！」
　ダンっ！　とエイナさんは机に両手を叩きつけた。次に、ベルに向けらていた緑玉色（エメラルド）の瞳は俺に向けられた。
「アル君も、君がいながらどうしてベル君を7階層なんかにっ！」
「え、俺がいるから大丈夫じゃないですか？　それに、俺もベルみたいな頃は普通に7階層行きましたし」
　あっけらかんとした態度で言うと、エイナさんは持っていた書類で俺の頭を何度か叩いた。
「いくら君が強くても、ベル君はまだＬｖ．１なんだよ!?　冒険者として先輩なんだからしっかりする！　というかそれ初耳だよっ!?」
　ペシペシ書類で俺の頭を叩きながら怒る。
　この人、こんな心配性だったっけか？　……あぁ、なるほど。年上キラーのベルに墜されたか。
「え、エイナさん！　大丈夫ですって！　僕、結構【ステイタス】が上がったんですよ！」
　あまりにもボコスカ叩かれる俺を見て、ベルが慌ててエイナさんを制する。制されたエイナさんの矛先はまたもやベルに向く。
「へぇ？　アビリティ評価Ｈがやっとの君がそんな大口叩けるのかなぁ……!?」
　キレかけているエイナさんをどうどう、と俺が押さえているが、正直無理だ。押し退けられる。というより最近こういうの多いと思う。Ｌｖ．６で力が９００行ってるのに押し退けられるパターン。

「ほ、本当ですよ！　アビリティがいくつかEまで上がったんです！」
「……E？」
ぴたり、とエイナさんは片眉を上げて胡乱げな視線をベルに向ける。
しばらくの間、本当か嘘かの言い合いがベルとエイナさんの間で起こっていたが、結果的にベルの【ステイタス】を見ることに落ち着いた。
基本【ステイタス】は他者に見せるものではない。主神か、信頼している人でなければ見せるのははばかれる。だが、ベルはそれを見せることにした。相手がエイナさんだからだろう。
エイナさんは学区に通い、総合神学を専攻していた秀才なのだ。なので、彼女は簡単な【神聖文字（ヒエログリフ）】なら読めるし書けもする。
「えっと、じゃあ……脱ぎますよ？」
「顔を赤くするくらいなら一々確認しないっ！　私の方も恥ずかしくなっちゃうよ！」
互いに顔を赤くする。それを見て俺はぷっ、と小さく吹き出した。二人共初心で面白いと思ってしまった。そう思ってる俺もアイズと一緒にいたら死んでしまうけども。
上半身裸になったベルの背中を見たエイナさんは、ほっそり尖った耳を赤くしながら【神聖文字】の解読に入っていた。俺もさっ、と解読して見る。

ベル・クラネル
Ｌｖ．１
力：Ｅ　４０３　耐久：Ｈ　１９９　器用：Ｅ　４１２　敏捷：Ｄ　５２１　魔力：Ｉ　０

（嘘……）
おーおー、驚いてる驚いてる。まぁ分からなくもない。なにせ、ベルは半月前に冒険者になったばかりだからな。
ベルが何故こうも【ステイタス】の上がりが異常なのか、それは、

《スキル》
【憧憬一途（リアリス・フレーゼ）】
・早熟する。
・懸想（おもい）が続く限り効果持続。
・懸想の丈により効果向上。

懸想の丈により効果向上。これがベルの【ステイタス】向上に拍車をかけているからだ。
エイナさんもスキルのスロットを見ようとしたみたいだが、ヘスティアがプロテクトをかけているため、エイナさんは読めない。俺はなんとか読めてるぐらいだけども。
「……」
「……え、エイナさん？」
しばらく悩んだふうにしているエイナさんを見て、ベルが服を着直して訊く。
ジロジロとベルの体――というよりその貧相な防具か――を見て、エイナさんは口を開いた。
「ベル君」
「は、はい」
「明日、予定空いてるかな？」
「……へっ？」
突然の質問により、ベルは情けない返事をした。それにしても突然過ぎやしないか。まず主語を言おうぜエイナさん。
「エイナさん、まず主語入れて話した方がいいですよ」
エイナさんの耳元で俺は小さく言う。彼女はえ？　と少し反応を見せた。
「……あ、えっとねベル君。君に7階層に行くことを許可するけど、その防具じゃ心許ないんだ」
「な、なるほど。それで明日買いに行こう、ということですね」
ベルもこれで納得した、みたいな表情を見せる。エイナさんも頷

く。
帰るかと思い、ギルドから出ようとしたところでベルが話しかけてきた。
「明日、アルさんもどうですか？」
見送りに来てくれたエイナさんが耳をピクつかせる。それを見て俺はニタァ、悪い笑みを浮かべた。
「いや、明日は俺も用事があってな。お前はエイナさんと二人で行ってこいよ」
二人で、の所を強調させて、エイナさんを見る。思った通り、エイナさんの頬がほんの少し赤くなっていた。ベルも少し赤くしている。
「それじゃあ、エイナさん。明日、ベルのことよろしくお願いしますね」
「エイナさん、それじゃあ明日お願いします」
「え？　あ、う、うん」
悪い笑みを貼り付かせて、エイナさんにプレッシャーをかける。
さて、明日のベルとエイナさんの買物が楽しみだ。バレないように尾行しよう。そうしよう。あ、アイズやティオナ達も誘おうか？　忙しそうにしてたら一人で行こうっと。
俺はそんなことを考えながらホームへと帰っていったのだった。

二話

あれから一日経った。
そう。つまりは今日はベルとエイナさんのデートの日だ。昨日はどうやって尾行してやろうかと色々模索したが、結局は単純な後を尾ける形となった。
仕方無いだろう。尾行系のスキルや魔法なんて無いんだから。フウなら出来そうだが。
昨日は教会の地下室ではなく【ヘスティア・ファミリア】に入る前にお世話になっていた宿舎で寝た。何故かと言えば、ベルと一緒に出てはバレると思ったからだ。
「さぁ、今日は楽しみだ♪」
満面の笑みを浮かべて俺は宿舎の店主に声をかけて宿舎を出ていく。
しばらく歩いて、オラリオ北部の大通りと面するように設けられた半円形の広場に着いた。
キョロキョロと周りを見回すと、見慣れた白い髪が見えた。
「お、ベル君発見」
ニヤニヤ笑ってベルを見張る。
くくっ……ベルの奴そわそわしてる。まぁ、分からなくもない。
この買い物はベルの防具を買うためのもの。内容はそうなのだが、形式的にはデートという体(てい)で見られる。
ん？　そろそろ十時か。ならエイナさんが来る頃かな。
俺がそう思っていると、ちょうどエイナさんが手を振ってベルの下へ来た。
「おーい、ベールくーん！」
「！」
おーおー、顔を赤くしちゃって。やっぱりベルの反応は面白いな。見てて飽きない。
「おはよう、来るの早いね。なぁに？　そんなに新しい防具を買うの

が楽しみだったの？」
「あ、いやっ、僕は……！」
あの反応からして二人っきりの状況を意識してたな。本当にベルは初心だよあいつ。
「まぁ、実は私も楽しみにしてたんだよね。ちょっとワクワクしちゃってっ」
あ、これはベル君に脈アリですね。エイナさんに恋愛フラグ建ってるぞベル君！　よかったな！
とと、そんなことよりそろそろ出発か。そういえばエイナさんの服装、随分可愛らしいな。白のブラウスにミニスカート。あとは黒のニーハイか。ギルドの制服を見慣れてるから違和感がある。
「あいたたたたたったたっ!?」
「ほら、謝れー！」
「や、やめっ、許してくださぁぁあああいっ!?」
なんだかベルとエイナさんはイチャついているようだ。なんとも平和なひと時だな。
これをもしヘスティアが見たら発狂するだろうなぁ。
などなど考えていたら二人は動き出してしまった。見つからないように俺は二人の後を追うが、
「アールっ！」
「……」
急に首に抱き着かれた。正体など分かりきってる。というより明白だ。この綺麗なソプラノの声、背中に伝わる柔らかな感触。その正体は――
「離れろ、フウ」
「えー、いいでしょ？　これもわたしの愛情表現なんだから」
「離れろ」
二度目でフウはブーたれながらも離れる。何故こいつは会ったら必ず抱き着くんだ。大して俺のことを好きでもないのに。
「それで、アルはなんでコソコソしてるの？」
ベルとエイナさんを追って歩き出した俺についてきて、フウはその

アイスブルーの瞳を俺に向けてきた。俺は紺色パーカーのフードを深く被り、そこから見える眼でフウを見た。
「アレだよアレ」
そう言って１０Ｍ(メドル)程離れたところを歩いているベルとエイナさんを顎で指す。二人の楽しそうな雰囲気を察したフウは、なるほどと呟いた。
「へぇ……アルはあのハーフエルフちゃんが好みなの？」
「はあ？　何言ってんだお前。俺は二人のデートを生暖かく見守ろうとだな……」
なにやらフウの疑問の視線が気になるが、いつも通りスルーする。
二人が向かうのはどうやら摩天楼(バベル)のようだ。
バベルとは、ギルドが所有する超高層の塔のことだ。それは地下迷宮(ダンジョン)に蓋をするかのように建っている。バベルは冒険者のための公共施設という役割を持ち、簡易食堂、治療施設、換金所という多種多様の施設がある。そして、二人が行くのはバベルにある【ヘファイストス・ファミリア】の鍛冶屋のテナントだろう。あそこはたまに掘り出し物があって中々いい。
「そろそろエレベーターだな……フウ」
「んー？　何？」
「お前のお得意の認識阻害の魔法頼むわ」
「えへへ、頼まれちゃ仕方無いわね♪」
なんでか知らないが、一気に上機嫌になったな。
そのままフウは俺の方に体を向けて俺の手を取る。目を瞑って小さく呟いた。
「【阻害(インヴィベーション)せよ】」
一瞬、若緑色の光が俺とフウを包んだ。
「うん、これでＯＫよアル」
「さんきゅな、フウ。よし、行くぞ」
フウが使ったのは、認識阻害の魔法。他人は俺達を知覚することは難しくなるということだ。
そのまま俺達は手を繋いだまま二人をついていく。何故繋いだま

まなのか、それは、繋がなければ二人以上は無理なのだ。直接的、間接的にもフウに触れなければ効果は発揮しない。
「分かってると思うけど、声出してもバレないから安心してね」
「あぁ、分かってる。……にしても本当に便利だな」
「まぁね。これで色々な依頼を達成出来たし」
手を繋いで歩きながら会話する。第三者がこれを見ればデートだが、残念ながら――この場合第三者に対して――デートではなく尾行だ。
二人がエレベーターに乗り込んだのを見て、俺達も急いで乗り込む。密閉空間でどんなに騒いでもバレはしない強力な魔法なので大丈夫だ。
「え、エイナさん……僕、【ヘファイストス・ファミリア】で買い物できるお金なんて無いですよ？」
「ふふふ、大丈夫よ。今から行くところは目的の場所ではないけれど、そこも【ヘファイストス・ファミリア】のテナントだから、見てみよう？」
ふむ。ベルの防具はやはりヘファイストスのところで買うのか。
かく言う俺も、Ｌｖ．１の時は【ヘファイストス・ファミリア】の防具を使ったものだ。今は【ゴブニュ・ファミリア】だけど。
「そう言えば、アル」
「ん、なんだ？」
俺は隣にいるフウを見下ろす。身長の高低差があって自然とフウは俺を上目遣いで見るようになる。
「アルって『魔剣』って持ってたっけ？」
突然、フウが今の俺には到底手に付かないことを言ってきた。俺は握っている彼女の手をギュー、と力を込めて言う。
「持ってるわけないだろうが。現状は金が足りないんだよ」
「痛いってアルっ。ごめん、ごめんなさいっ！」
最後にグッ、と力を入れてすぐに緩く手を繋ぐ。フウは少し涙目になりつつも、言葉を紡いだ。
「えっと、魔剣の話をした理由はね、アルにちょうどいい魔剣を持って

きたのよ」
「……何？」
すっ、と目を細める。
魔剣というのは、普通、魔法を使う時は詠唱が必要なのだが魔剣は無詠唱で魔法を行使する剣で消耗品なのだ。そして効果は低い。
「どんな魔剣なんだ？」
「えーっとね、まだ使ってないから分からないけど、製作者は黒い焔が出るって言ってたよ」
黒い焔だと？　そんな焔、有り得るわけが……。いや、有り得る。俺がヴリトラの力を使った時に似たようなものが漏れ出ていた。なら、それに近いものだとすれば……確かめてみる価値はあるか。
「……フウ、尾行は無しだ。すぐダンジョンに行くぞ」
「えっ!?　今から!?」
エレベーターの扉が開き、ベルとエイナさんが出ていく。俺はすぐさまエレベーターのボタンを押して下にエレベーターを向かわせる。
俺の頭の中は、もう魔剣のことでいっぱいだった。もしヴリトラの力との関係があれば、以前使った力を出力を抑えて使うことが出来るかもしれない。
ふと、製作者の所属してる【ファミリア】が気になった。下に向かいながら、俺はフウに聞いてみた。
「製作者の所属してる【ファミリア】は？」
「【ゴブニュ・ファミリア】だけど……」
そうか……なら、ならヴリトラの力との関係がある可能性が高い。ゴブニュとヴリトラは仲が良かったから。
あれこれ考えていると、不意にフウが俺の顔に手を添えた。
「どうした、フウ？」
「……なんだか、アルが怖い顔してたから……」
背が俺よりも低い彼女は、少し背伸びして手を差し延べる。彼女のそのアイスブルーの瞳は悲しそうに潤んでいた。
俺は、ふっ、と笑った。

「なんでもない。どんな魔剣なのか、考えてただけだから」
「……そう……」
その時、エレベーターの扉が開いた。もう尾行するわけではないので手は繋いではいない。
それから俺達は一旦フウの装備を取りに戻り、ダンジョンに潜ることになった。俺の装備は転移させて装着している。
そして今、ダンジョンの16階層に俺達は足を踏み入れた。ここの方がやりやすいからだ。
「さて……フウ、魔剣見せてくれ」
フウの方に体を向けて言う。彼女は頷いて腰につけた鞘から短剣を抜いた。その短剣は刃以外全部白。刃の色は深い紫色。その深い紫色に引き込まれる感覚に陥るが、なんとか正気を取り戻す。
「これが、黒い焔を出す魔剣……か」
「うん……」
手渡される短剣を握って、俺は掲げて見る。
確かにこれは魔剣だろう。だが、何かが違うように思えた。なんだろうか、この感覚は。
魔剣に魅入っているとフウが俺の裾を掴んで揺すった。
「アル、一回使ってみれば？　わたし見たくて我慢できないよ」
「……はいはい、分かったから揺するな」
はーい、と言ってフウは裾を離した。
フウが少し離れたのを確認して、俺は短剣を前に突き出した。そしてちょうど良く、ダンジョンの壁が割れてモンスターが生まれ落ちた。
『ブモォォォッ！』
現れたのはミノタウロス。
そのミノタウロスに向けて俺は短剣を振りかざした。
「行っけ――――！」
振りかざす瞬間、仄かに黒い焔が散ったように見えたが、振りぬいた後には黒い焔なんぞ何も出なかった。
「「はぁっ!?」」

『ブゥウムゥ？』

俺とフウは間抜けな声上げてミノタウロスも声を上げた。当の短剣はリィン、と鈴が鳴ったような音を出していた。

三話

『ブゥモォォオオオッ!!』
「え、なんで不発!?」
短剣を何度も振るうが何も出やしない。出るとしても小さな黒い火花くらいだ。
最初は警戒していたミノタウロスだったが、何もしない俺に向かって大きな拳を振り上げた。
「だぁーっ！　クソが！　邪魔すんな牛野郎!!」
短剣をミノタウロスの厚い胸板に投擲して、左手に握っていた太刀を抜く。投擲した短剣は深々とミノタウロスに突き刺さった。
「え？　魔剣ってあんなに切れ味いいの!?」
近くにいたフウが目を剥いて驚く。やった本人である俺も目を瞬かせている。
『ブァァァアアッ！』
ミノタウロスは怒りの声を上げて短剣を引き抜きにかかるが、短剣は何故かびくともしない。不思議に思うも、俺は好機だと思ってミノタウロスに近付いてその頭に太刀を突き刺した。
断末魔を上げてミノタウロスは短剣と魔石を残して消え去った。
「……フウ……これはどういうことだ」
「え、えーっと……こ、こればかりはわたしも分からないかなぁ……」
「これ、どう考えても魔剣じゃなくてただの短剣だよな。切れ味は俺の《倶利伽羅》と同スペックだが」
地面に落ちた短剣を見下ろしながら、俺はフウに言う。フウはおかしいなぁ、と言って短剣を拾って俺に渡してくる。俺は右手に太刀を握り、左手に短剣を握った。
「これ、値段いくらだ？」
「買ってはいないの。【ゴブニュ・ファミリア】に寄ったら、アルに渡してくれって言われて」

「ふーん。《黒雷》取りに行く時に渡せばいいものを……」
「なんでも、すぐ渡さなかったらゴブニュさんに怒られる～的なこと言ってたよ？」
へぇ、と興味なさげに俺は相槌を打つ。実際、ゴブニュに怒られようが俺には知ったことではないからだ。
それにしても、と続ける。
「魔剣じゃなかったか……ヴリトラに何か関係あるか気になってたんだが……」
残念そうに俺は呟きながら太刀を見る。太刀の刀身には俺にも解読不能な【神聖文字（ヒエログリフ）】を使って『刻印（ルーン）』が彫られていた。何度か解読しようとしたのだが、結局は解らず終いだ。今度ゴブニュかヘスティアにでも訊いてみようと思う。
俺がそう思っていると、短剣がチラリと光った。
「ん？　なんだ？」
「どうしたの、アル？」
疑問の声を上げた俺に、フウがそう訊いてきた。
「いや、今短剣が光ったように見えて……」
言いかけたところで急に、短剣が黒い焔――夜空色の焔に包まれた。次いで太刀も『刻印』から夜空色の焔が溢れ出ていた。
「おい、なんだこれ……」
気付けば、その焔は腕に巻き付いていく。まるでそれは所有者を護る鎧のように。
「焔出たっ！　ほらっ魔剣だったでしょ？　アル？」
「……あ、あぁ……」
フウが子供みたいにはしゃぐが、俺には全くそんなこと出来るはずもなかった。何故ならあの時使ったヴリトラの力と酷似していたからだ。
『刻印』から溢れ出した、ってことはこの短剣にも似たようなものが彫られているのか……？
左手に握る短剣をまじまじと凝視して、鍔の部分に何かミミズみたいな字が書いてあるのに気付いた。

「やっぱり……」
　その『刻印』から泉のように湧き出す夜空色の光は眩しく発光し、次第に俺の全身を覆うようになっていく。
「ちょ、アル!?　大丈夫なのっ!?」
「あぁ、大丈夫だ。まぁ、何が起こるか分からないがな」
　遂には顔まで覆われてしまい、俺はただじっとしたまま両手に太刀と短剣を握って立っていた。
　目を閉じて光が収まるのを待つ。だが、待っても収まることを知らない。いっそ短剣を投げてしまうかと思ったが、辞めておいた。もしかしたら、ヴリトラと関係があるかもしれないからだ。
「フウ、モンスター来たら頼めるか？」
「わたしがアルの頼みを断ると思う？　任せなさいっ！」
「ありがとな」
「っ！　……う、うんっ」
　一応目が見えなくても戦えはするが、結構面倒臭い。それにパーティを組んでいれば仲間に迷惑になるから頼むことにした。
　俺がお礼を言うと、少し上擦った返事が聞こえたが、気にしなくても大丈夫だろう。
（うわぁぁぁあ！　アルのお礼を言う口調が優し過ぎるぅぅ！　照れる、これは照れるよぉぉ!!）
　ん、なんだかフウがバタバタしてるな。モンスターが近いのか？　でもそんな気配ないし……全く、落ち着きがないな。
　苦笑いを浮かべながら、俺はそう思っていた。
　それから、何十分経っただろうか。モンスターの襲撃が数回あった程度で、他は何も変わったところがなかった。俺は仕方ない、と思って地面に座る。
　太刀と短剣を握ったまま胡座をかいて瞑想に入った。
『なぁ、アル？　お前、何欲しいの？』
　去年の俺の誕生日。ヴリトラがどストレート過ぎる言葉を俺にぶつけてきた。俺はその問いに無理なことを言った。
『そうだなぁ……んー、絶対に壊れない篭手に大切な人達を護れる太

刀、かな？』
『おいおい、そりゃ出来なくもないが……俺が死ぬぞ』
その時に俺とヴリトラは愉快そうに笑ったのを俺は覚えている。俺と彼の関係は、親友、親子、兄弟、そんな関係だった。もちろんヴリトラは【ファミリア】の皆には分け隔てもなく接してくれる。そんな神様が良くて、他の連中もそれを羨ましがっていた。
……そうだ。そんな神様を殺したのは俺だ。
絶対に壊れない篭手……これは弱い自分を護りたいから。大切な人達を護れる太刀……ヴリトラを殺してしまった俺が唯一出来る贖罪が大切な人達を護ること。
「俺は……強くならないと……大切な人達を護れる力をつけないと……」
だから、左手に握る短剣、いや魔剣はそのための踏み台。俺が強くなるために必要なもの。だから……。

力を貸せ、魔剣。

俺が心の中で強くそう想い、目を一気に開く。瞬間に光が飛び散り、両腕に付けてある手甲を覆うようにその光は収束した。
それは重さが感じないが、決して壊れることがないと確信が持てるような夜空色の篭手に成った。
そして魔剣は夜空色の光になってしまい、その光は《倶利伽羅》の『刻印』に染み渡った。
不思議に沸き上がる少しの高揚感。それは新しい力が手に入った時の喜びなのか、それとも別の何かなのか、それは本人である俺にも分からなかった。だが、ひとつだけ言えることがある。それは、
「フウ、何体かモンスター連れてきてくれ」
すくっと立ち上がってフウにそう指示する。彼女は片眉を持ち上げて首を傾げるが、分かったー、と言って片手剣を手にして走っていった。

四話

それは、今の俺は誰にも負ける気がしないということだ。
「アルーっ、連れてきたよー！」
フウが猛ダッシュして数えるのが厳しいくらいのモンスター共を連れてくる。普通はトレイン――モンスターを連れ回して他人に擦り付ける行為――は御法度なのだが、相手が俺なので問題ない。
「もうちょっと数を多くしてもいいくらいかな……」
呟いて、太刀を水平に構えた。途端に『刻印』から微量の夜空色の光が灯る。
フウが俺の横を通り過ぎたのを確認して、俺は一気にモンスターの群れの中に突っ込んだ。
いきなり俺が来てモンスター達は驚くが、それも一瞬のことだった。何故なら俺が回転して広範囲で斬ったことにより、俺を中心にしてモンスターの群れが灰に還ったからだ。
「うっわ、えげつない」
後ろからフウがそういう感想を言う。彼女の言葉があまりにもストレート過ぎて若干傷つく。
「まだまだ余裕だな。５１階層行っちゃおうかな……」
調子に乗って俺がそう呟くと、頭にビシィィッ、と衝撃が来た。篭手を装着した左手で頭を押さえながら振り向くと、片手剣を肩に担いでジト目をしているフウだった。
というより、この場には俺とフウしかいないため分かってはいたが。
「何しやがる……」
「５１階層なんてダメに決まってるでしょう!?　あそこにはカドモスだっているのに！」
「ふん、カドモスなんぞ余裕だ。前だって一人遠征した時に狩ってるし」
「やっぱりアホだわ、アルは」

失礼な、俺はアホじゃないぞ。一応、第一級冒険者の中でも、非常に珍しく頭脳と腕力の両方に長けてるんだ。この両方に長けている奴なんて『剣姫』であるアイズか、【フレイヤ・ファミリア】のオッタルくらいだ。

俺は太刀を一振りして鞘に納める。

「じゃあ、もうちょい下に潜ろうぜ。それで終わりだ」

「なんでアルが仕切ってるのさ。……だったら！　全部アルが倒してね～。わたしは傍観してる」

「なら帰ってろよ……」

「いやだーついてくー」

何故か駄々を捏ねるフウを横目に、俺は下層へと降りていった。

♠???♣?♦?

結果だけ言えば、かなりの無双状態だった。

沸いて出るモンスターに向けて太刀を振るうと、夜空色の斬撃が飛び、モンスターは真っ二つになってしまったのだ。

それと篭手に関してもそう。モンスターによる攻撃を篭手で防ぐ時に生まれる衝撃も軽く、汚れも一切付かず、欠けることすら無かった。

結局、５１階層まで降りた俺とフウは強竜（カドモス）と交戦して約二十分という短い戦闘でカドモスを屠った。これも、あの魔剣のおかげだ。

魔剣は光となって《倶利伽羅》の『刻印』に入り込んだが、その効果は《倶利伽羅》の中にいても発揮され、最早《倶利伽羅》自体が魔剣と化したも同然だ。しかも《倶利伽羅》は《不壊属性（デュランダル）》付き。ということは絶対に壊れない魔剣ということだ。もうチートだろう。

そして、ダンジョンから出た俺達二人はギルドに寄って換金をして、解散することになった。

「じゃあ、魔剣ありがとうな、フウ」

俺がフウに向けて感謝の意を告げると、彼女はゆっくりと首を振って笑みを浮かべた。

「ううん。わたしも、アルと一緒にダンジョンに行けたからいいよ」
「そうか？　なら、いいんだが……」
頭を掻いて俺は呟いた。何かお礼をしたいな、と思った俺はあることを彼女に提案する。
「じゃあさ、今度『豊饒の女主人』っていう酒場に行こうぜ。奢るから」
「えっ!?　いいの!?」
俺の提案に、フウは目を輝かせてそう訊いてくる。俺はその反応に若干引きつつも、頷いた。
「あ、あぁ。今度な」
「うん！　約束だよアル！　忘れないように！」
念押ししてくるフウに、俺ははいはい、と答えた。
その後、フウはまた今度～と言って腕が千切れるほど振って帰っていった。
俺は小さく息をつき、自分のホームへと足を運んだ。

歩みを進めていると、誰かの怒鳴り声が聞こえた。そちらの方へ顔を向けて目を細める。
聞こえてきたのは”追いついたぞ、この糞パルゥムがっ!!”という怒声。物騒だな、と思いつつ俺は怒声が聞こえる方へ走って行く。
どうやら場所は近くだったらしく、すぐにその場に到着した。
「邪魔だ、ガキ。そこをどきやがれ」
道の角に隠れて見てみると、当事者の男の冒険者と小人族（パルゥム）の少女、白髪の少年――ベルがいた。
何やってんだベルのやつ。頬が引き攣ってるぞ。
「あ、あの……今からこの子に、何をするんですか……？」
おそるおそるベルがそう言う。だが、男の冒険者は苛つきながら答えた。
「うるせぇぞガキッ!!　今すぐ消えうせねぇと、後ろのそいつごと叩っ斬るぞ！」
こいつ、あの子に何かする気だ。
俺は呆れながらその冒険者を見ていた。ベルも俺と同じことを

思ったのか、覚悟したように顔を強ばらせてパルゥムの少女の前に立つ。
「ガキ……！　マジで殺されてぇのか……!?」
ベルが前に立つことで、瞠目していた冒険者はすぐにカァッと赤くなった。
それを見たベルは、冒険者を宥めるように当たり障りのないことを言う。
「そ、その……一回落ち着いた方がっ」
「黙れっ、何なんだよテメェは!?　そのチビの仲間なのかっ！」
「しょ、初対面です！」
「じゃあなんでそいつを庇う!?」
「……お、女の子だから？」
「なに言ってんだよテメェッ……！」
なに言ってんだベル……。
俺は少しベルに、呆れを通り越して感心する。もしかしたら初の対人戦――になるかもしれない――でこんなことを言えるのはベルだけかもしれない。
そう思っていると、冒険者が手を後ろにやって剣を抜いた。
「いい、まずはテメェからぶっ殺す……！」
俺からしたら放ったかどうか怪しい殺気に当てられて、ベルは反射的に《神様のナイフ》を構えた。
その時にリン、と音が鳴り、切れ味が増したような感じが俺には分かった。
だが、対人戦初めてのベルは足を震わせている。しかし、彼はありったけの力を振り絞って瞳を吊り上げた。
――いい眼だ。
俺はそう思って、飛びかかる冒険者に向けて鞘が付いた太刀を振るった。次の瞬間には、その軌道に乗るかのように夜空色の斬撃が飛んで冒険者の剣に直撃していた。
「あぐっ!?」
弾かれた痛みによって、冒険者は呻き声を上げた。冒険者は後ろに

いる俺に顔を向けると、忌々しく俺を見た。
「クソがぁ……次から次へと……」
「ふっ。……あまり、俺の仲間を虐めないでもらいたいな。……退いてくれる？」
笑顔を見せて、ほんの少し殺気を飛ばす。おそらく今の笑顔は黒い笑みになっているだろう。
「どいつもこいつも、訳の分からねぇことを……！　ぶっ殺されてぇのかぁっ、ああ!?」
だが、冒険者は俺の殺気が分からなかったのか、大声を上げる。
「喚くな」

スゥゥ、と瞳の色が碧眼から黄金色に変わるのを感じる。続けて俺の体の全体から殺気が漏れ出す。目に見えてその冒険者は狼狽した。
「……っ、……!?」
「斬っていいのは、斬られる覚悟があるやつだけだ。お前にはその覚悟があるか……？　それと、俺は”退いてくれ”と言ったんだ。……退け」
俺の殺気と黄金色の瞳に射竦められて、冒険者の男は口をパクパクと動かし、顔面蒼白にした。
「く、くそがぁぁあ！」
体を震わせて、男は素早く退散していった。
「……」
「大丈夫かー、ベル？」
ぼー、とするベルに俺は太刀を担いで訊く。ベルは顎の下に溜まっていた汗を拭って口を開いた。
「あ、ありがとうございます、アルさん……」
「おう。ま、俺が手を出さなくてもベルならなんとかしただろうし……それに、リューもいるしな。な、リュー？」
「え？」
俺は首をメインストリートへ続く階段に向けて言う。ベルはキョ

トンとした顔をして、俺と同じところに向けた。
はぁ、と溜息が聞こえてくる。現れたのは、先程俺が話しかけたリュー・リオンという『豊饒の女主人』のエルフの店員だ。
「気付いていたんですね、レイカーさん」
「当たり前だ。もうちょい気配を紛らわせるようにしないとな」
「精進します。……クラネルさんは、お怪我などはありませんか？」
「え、あ、はい」
俺との会話を終了させて、次にベルと会話するリュー。ベルはどもりながらもリューに返事をする。
「あっ、そうだ、あの子……あれ？」
いきなり周囲を見渡すベル。俺はそういえば、と思い、ベルと同じく周囲を見渡す。だが、パルゥムの少女はどこにもいなかった。
「誰か、いたのですか？」
「はい、パルゥムの女の子が」
リューの問いにベルが応える。それにしても、と俺は思った。
俺って、気配とか分かるのに人探しには向かないんだな……。
自分の融通の利かなさにげんなりしつつ、俺とベルはリューと別れることにした。
ホームに帰る途中に、俺はベルから質問を受けた。
「そういえば、あの時の斬撃ってなんなんですか？　アルさんって転移以外に魔法使えましたっけ？」
「んー？　あぁ、アレか。アレは前の主神からの贈り物だよ」
正直に話すのが面倒なのと、どうやって説明したらいいか分からなかったので、ベルからの質問の答えは適当にはぐらかすことにした。
だが、いずれベルにはちゃんと話そうと思う。俺とヴリトラとの絆の話を、な。

五話

朝になり、俺はロングコートを羽織って左腕に手甲の代わりに篭手を付ける。何故左腕だけかと言うと、右も付けてしまうと指輪が付けられないからである。

どうもこの篭手は、俺の思ったように自由自在に姿を変えることが出来るようで、俺は左腕にスリムな篭手を思い浮かべるとその形になったのだ。もしかしたら篭手だけでなく盾も可能なのでは、と思ってしまう。

「よし……」

隣を見れば装備を新調したベルがいた。

昨日エイナさんと買い物をしたベルは、現在、体に鉄色のライトアーマーを装着していた。左側のアーマーには赤い一本線が刻んである。そして、目を惹くのが左腕に装着された緑玉色（エメラルド）の輝きを放つ細長いプロテクターだ。

「ベル、それ、エイナさんからか？」

笑みを含んだ声音でそう訊く。ベルは微笑んで言った。

「はい！　これ、綺麗で丈夫なんですよ！」

そう言ってベルは、プロテクターを撫でる。

俺は彼に向かって良かったなぁ、とニヤニヤ笑って言った。

ベルはえへへ、と笑った後、ベッドに沈んでいる駄神様を見て口を開いた。

「それじゃあ神様、行ってきますねー！」

「行ってくるわ、駄神様」

「駄神様言うなぁ……いってらっしゃぁ～い……むにゃ」

バイトで疲れているのだろう。言ったあとに、ヘスティアはすぐに寝に入った。

それを見た俺とベルは苦笑を浮かべて、教会の地下室の扉を潜り、ダンジョンに向かうためにバベルを目指した。

裏道を経由してメインストリートの出て、そして中央広場（セントラルパーク）に着く。

俺は今日も頑張るか、と思い足を前に出すはずだったのだが、
「お兄さん達、お兄さん達。白い髪のお兄さんと茶髪のお兄さん」
ふいに俺達と思われる者を呼ぶ声に、行動を中断された。
「えっ？」
「……？」
後ろから呼ばれたので、その方向へ振り向く。しかし、声の人物らしい者は見当たらなかった。
「下、下ですよ」
可憐な声に従って下を向くと、クリーム色のゆったりしたローブを着て、被ったフードから俺とは違った栗色の髪がはみ出ている小人族（パルゥム）の少女。その背にはとても大きなバックパックを背負っている。
「き、君はっ……」
「初めまして、お兄さん達。突然ですが、サポーターなんか探してませんか？」
ベルの言葉を遮って、少女はベルのバックパックを指してそう言う。
俺は少女の言葉を聞いて、へぇ、と思った。何故かと言えば、
（あくまで他人のフリをするか、昨日のパルゥム君？）
昨日、冒険者に追われていたパルゥムの少女。あの子と今目の前にいる少女は同一人物だ。
俺は確信を持ってそう思う。雰囲気と気配で分かる。
「え、ええ？」
「混乱しているんですか？　でも今の状況は簡単ですよ？　冒険者さん達のおこぼれにあずかりたい貧乏なサポーターが、自分を売り込みに来ているんです」
一応、こちらも貧乏だけども。
そう俺は思って口に出すところで止めた。言ったところで何も得はないからな。
ベルもこの少女が昨日の子だと思ったのか、少し怪訝そうに彼女に目を向けている。
「……そうじゃない。君は、昨日男の冒険者に追われていた子だろう

？」
俺は目を細めて少女に問う。だが、彼女は可愛らしく首を傾げた。
「？　お兄さん達、リリとお会いしたことありましたか？　リリは覚えていないのですが」
ほー、ポーカーフェイスが上手いことで。
俺は内心悔しく思った。これでボロが出れば問い詰めることが出来るのだが、こうまで上手く言われると手の出しようがない。
「あれぇ？」
「悪い、人違いみたいだ」
ベルは首を傾げ、俺は微苦笑した。
まぁ、今回は問い詰めなくてもいいだろう。しかし、決定的なものが何かあれば問い詰める。何故、惚けるのかと。
「それでお兄さん達、どうです？　サポーターいりませんか？」
「え、えぇと……」
そう言ってベルは俺を見上げる。普段、俺とベルはバックパックを身に着けているが、それはすぐにポーションなどを取り出せるようにつけているだけだ。
その理由は、俺の魔法にある。【転移】なんていう魔法があるお陰で、荷物がかさばるような魔石やドロップ品は俺が全て、教会の地下室にあるアイテムボックスに転移させている。
という理由によって、俺達にはサポーターが不要だ。しかしそれは俺とベルが一緒に行動を共にしていればの話。ここ最近、俺とベルとのパーティでの出撃はあまり少ない。最近体が鈍ったように感じるし、そろそろ一人遠征に行きたいのでそれに慣らすために深層の一歩手前まで潜っているからだ。
よって、今回のこの少女の申し出は結構ありがたい。
俺はベルに向かって頷いた。
「……じゃあ、頼めるかな？」
「本当ですかっ！　ありがとうございますっ！」
ベルが了承の旨を伝えると、少女ははしゃいだ。その時に、フードで見えていなかった彼女の目が露になった。

その目は、ベルの腰に差してある《ヘスティア・ナイフ》を見ていた。そして、目は動き、俺の手や腰を見た。
――なるほど、大体予想できた。この子、油断ならない人物だ。
俺はこの少女の目的を大方見当を付け、最大限の警戒をすることにした。

♠???
♣?♦?

「ふぅん、【ソーマ・ファミリア】……ねぇ」
バベル二階の簡易食堂。正午前は他の冒険者達はダンジョンに潜っているため、無駄に広いこの食堂は、より一層広く感じる。
そして今、俺達はフードを被った少女――リリルカ・アーデと名乗った少女と話をしていた。
「はい、割と有名な派閥だとリリは思ってます」
まぁ、確かに有名だ。神酒（ソーマ）という酒でな。
それと、ギルドの人達が【ソーマ・ファミリア】のことを何か言っていたな。確か、やけに焦っているみたい、だったか。何故焦っているのか分からないが、俺が思うのはこのリリルカ・アーデという子は、少なからずそれに関係しているのでは、と思っている。
「どうして違う【ファミリア】の僕達を？　別々の【ファミリア】の構成員が繋がりを持つことはいいことじゃないのに……」
まだまだ一人前の冒険者とは言えないベルでも、そうホイホイ申し出をすぐ頷くほどお花畑ではないようだ。というより、お花畑じゃなくて安心した。
別々の【ファミリア】の構成員同士が繋がりを持つということは、あまり褒められたものではない。理由は様々。一番良くあることは、神様同士の仲が悪いかったり、【ファミリア】間での闘争が起きるやも知れないからだ。
しかし、今回の【ファミリア】は【ソーマ・ファミリア】。神様の中でも自分の趣味を優先するという珍しい神様なので、闘争などは起きないだろう。

「ベル、リリルカ・アーデの【ファミリア】は【ソーマ・ファミリア】だ。神ソーマは、自分の趣味を優先する故、闘争などのいざこざはあまり起きないよ」
「はい、茶髪のお兄さんの仰る通りです。ソーマ様は、他の神様達のことに未来永劫無関心なので、争いなどはまずないと思います」
ベルの懸念を払拭して、それからはリリルカ・アーデの事情などを訊いた。
曰く【ファミリア】のメンバーからは彼女の腕っ節を見て、呆れられて同じ【ファミリア】の人達とは行けなくなったから、色々な人達に自分を売り込んでいるとのこと。
まぁ、分からなくもない。俺も最初の頃は先輩達に呆れられたからな。
「ねぇ、リリルカさん。僕達、会ったことない？」
「いえ、リリは初対面だと思うのですが……」
やはり惚けるようだ。何か決定なものがあれば看破することが出来るというに、俺にはその手札がない。
「……君の種族って、何かな？」
ベルがリリルカ・アーデにそう訊く。その言葉に俺はハッ、とベルに顔を向けた。俺が思い付かなかったことをベルが言ってくれた。これには感謝する他ないだろう。
昨日の子はパルゥム。この子がパルゥムなら、それは決定的な証拠に成りうる。しかし、
「リリの種族ですか？　リリは犬人（シアンスロープ）ですよ？」
俺達の思惑は、そう簡単には行かないようだ。何せ、彼女の頭には犬の耳――獣耳が生えているのだから。
俺は内心苦虫を潰したような感じになり、ベルは昨日の子とこのリリルカ・アーデが別人だということに信じてしまった。だが、俺は信じていない。何かあるのでは、と思っている。
その後、俺はリリルカ・アーデを警戒しつつもサポーターに迎え入れ、ダンジョンに潜ることになったのだった。

六話

ダンジョンは決まった階層を境にして地形と性質が変わる。
1～4階層は薄青色の壁で構築されており、出てくるのは主にゴブリンやコボルトといった低級モンスターだらけ。種類も少ない。
4階層辺で、個体差の変動があるが、ダンジョンの上層というだけあって、初心者の冒険者にとっては攻略しやすいエリアだ。ソロでも楽に行ける。モンスター共に囲まれたりしなければどうにでもなる。
……これは、俺だけなのかな。初心者の時に一度囲まれたが、皆一掃した。ホームに帰った時に先輩達にバカ呼ばわりされたり、狂ってると呼ばれたりした。あの時は傷付いた。
閑話休題。
1～4階層はまだまだ楽な方。しかし、5～7階層はダンジョンが脅威の片鱗を見せる。モンスターが生れ落ちる間隔が短い。深層に行けば、それ以上のスピードで産まれては攻撃してくる。
以上のことがあるからして、駆け出しの冒険者にはまず地道な力の蓄えが求められる。
ましてや、ソロが多い冒険者となれば尚更。
だが、
「ふッ！　……ッ！」
『ギシャアアアッ!?』
俺の目の前でキラーアントに向かって、俺が教えた短刀式二ノ型・焔月（えんげつ）を放つベルの場合は事情が異なる。
繰り出されたベルのニノ型・焔月は、モンスターの中心線にナイフを突き刺し、その後素早く右脚での回し蹴りをする。次に突き刺したままのナイフを斬り上げる。その行動を僅か二秒で行った。
現在位置7階層。本来ならパーティの連携が求められるこの階層で、ベルが絶賛無双中だ。一応、俺は後ろから来るモンスターを痛め付けている。殺してはいない。虐めている。
『ジギギギッ!!』

『グォオオオ！』
「よっ、と！」
「はぁ……」
『ビュギ!?』
『グボォっ!?』
　ベルの上空からは『パープル・モス』という巨大な蛾が襲い、俺の方には錆びたプレートアーマを付けた『コボルト・タンク』が襲ってくる。
　しかし、ベルはパープル・モスを往なして羽を切った。バランスを崩したところで《ヘスティア・ナイフ》を使って短刀式一ノ型・閃光で絶命した。俺はといえば、夜空色の斬撃を横向きに飛ばして、コボルト・タンクを真っ二つにした。
　そろそろ斬撃に名前を付けようか迷っている。どうしたものか。まぁ、これは後に決めるか。面倒だし。
　後ろを見てみれば、ベルの前方に何体かのモンスターが蠢いている。俺はニッ、と笑って口を開いた。
「ベルー！　リリルカー！　避けろよーっ！　――――はぁぁあっ！」
「え、アルさんっ!?　う、うあぁぁあっ!?」
「きゃあぁぁ!?」
　大上段からの振り下ろしにより、ダンジョンの通路の天井まで届く程の斬撃が俺の太刀から放たれ、何体かのモンスター共はあっけなく灰へと還した。
　ギリギリで避けたベルとリリルカ・アーデは、さっきの光景を目の当たりにして、眼を剥いている。
「何するんですかー！　アルさん！」
「そうですよ！　アルス様！」
　二人は若干涙目になって俺を責める。俺は笑いながら頭を掻いて謝った。
「あはは、ごめんごめん。結構威力は抑えたつもりだったんだが……こうなっちゃった♪」

「こうなっちゃった♪　じゃありませんよ、アルさん！　危なかったですからね!?　死ぬかと思いましたよ!?」
「そうですそうですっ！　リリも死にそうになりました!!」
苦情を言われた俺は、二人に最前衛で戦うように言われた。
前衛にいるので、問答無用に斬撃を飛ばしたり刀身に夜空色の光を纏わせて斬りつけたりする。俺が通った後はモンスター共がドロップさせたアイテムと魔石だらけとなった。
「そらっ！」
光を纏わせた太刀を地面から出てきたキラーアントを掬い上げるように斬り上げた。
そのキラーアントはボトッ、と音を立てて地面に転がり、灰となった。
後ろでは、ベルが壁に埋まったキラーアントの死体から魔石を取り出そうと短刀を用いている。チラッとリリルカ・アーデのことを見ると、彼女の視線は《ヘスティア・ナイフ》に向けられている。
大丈夫かな、と不安に思ったが、次に前から来るモンスターが残り二M（メドル）に迫っていたため、俺はそちらに目線を向けて太刀を振るった。

♠???
♣?♦?

俺がどんどん先に進んでいる内に、ベルとリリルカ・アーデは帰ってしまったようだ。俺は黙って帰ってしまったことに若干傷つきながらも、16階層に来ている。目的としては、ミノタウロスの百体討伐。
「はぁ、ベルの奴大丈夫かなぁ？　なぁ、どう思うよ、ミノタン」
ミノタウロス相手に、まるで友人に話しかけるかのように話す俺は、狂人だろうか。まぁ、一時期言われたけども。
『ブモオォッ!!』
マルタのような腕で俺のことを殴ってくるミノタウロスを往なして、俺はその頭を撥ねた。
その後も何十体かまとめてやって来たが、地面に太刀を突き刺して

夜空色の光を流し込み、地面から光が何十本もの槍がミノタウロス共を貫いた。
『『ブモアァァァッ!!??』』
ヒュンッと太刀を振って、俺は腰に吊ってある艶のある黒色の鞘に納めた。
昨日、《倶利伽羅》自体が魔剣と化したが、今思うのは、これはもう魔剣と称するべきではないと思っている。言うなれば、
「神剣がぴったりかな……」
夜空色の光も、そもそも『神の力(アルカナム)』の光だ。『神の力』を使う剣――神剣。そのままだが、ぴったりだろう。
「さて、後二十七体……行くぞっ!」
生れ落ちたミノタウロスや他のモンスター達に向かって、俺は地面を蹴った。

ホームに帰った俺は、ヘスティアに頼んで溜りに溜まった【ステイタス】を更新してもらった。
「あ、アル君……君、す、凄いことになってるよ……」
「ん? どれどれ……」
ヘスティアが持つ俺の【ステイタス】が書かれた羊皮紙を眺め見た。その羊皮紙に書かれた数字と二つ目のスキルを見た俺は顔を引き攣らせた。

アルス・レイカー
Lv.6
力:S 951→S 965 耐久:A 841→A 857
器用:S 904→S 915 敏捷:S 974→S 983
魔力:A 811→A 824
《発展アビリティ》
【剣士:D】【狩人:E】【耐異常:F】【神秘:H】
《魔法》
【転移魔法(シフト)】

《スキル》
【刀神斬殺（ゴッド・リーパー）】
・早熟する。
・刀を持ち続ける限り効果持続。
・精神を研ぎ澄ませることにより効果向上。
・基本アビリティ、力を補正。
・神を殺すことが可能。
【神化の法（ゴッド・リーガル）】
・敵と見なした対象を斬ることができる。
・斬った対象に水分があれば、水分を全て飛ばすことができる。
・驚異的な回復力を持つ。
・神化する神を思い浮かべることで発動。
・全基本アビリティの上限を超すことが可能。
【神化の法】。何故このようなスキルが発動したのかは大体察しがつく。あの時、どうにでもなれと思って使った力が影響しているはずだ。
おそらく、ヴリトラの『神の力（アルカナム）』の一部を使用したというのが【経験値（エクセリア）】となり、このスキルとなったのだろう。
「アル君」
【ステイタス】を見ながら、ヘスティアが長いツインテールを揺らして俺に顔を向ける。
「君、まさかだとは思うけど、ヴリトラの力を使ったなんて……」
「……使ったよ。怪物祭の時にな」
「そうかい……」
ヘスティアには、この【ファミリア】に入ることになった時に俺のスキルのことは話している。
俺が初めてヴリトラの『神の力』を使ったのは怪物祭の時に起きた騒動。モンスターが逃げ出し、何かを探していた様子を見せていた時だ。あの時、俺は強めのモンスターを屠った後、魔神級モンスターとの交戦し、勝ち目がなく賭けで使ったのだ。
「ヘスティア、これはやっぱり……」

「あぁ、君の思っている通り、『神の力』を使ったという【経験値】が影響して、こうしてスキルとなったんだとボクも思うよ」
ヘスティアも俺と同じことを思ったようだ。
そして、〝斬った対象に水分があれば～〟などと書いてあるが、これはおそらくヴリトラの力が影響しているだろう。あとは〝敵と見なした対象を斬ることができる〟とあるが、これは……どういう意味だろうか。例えば、遠くに離れた敵――モンスターに向けて太刀を振るえば斬れる、というのか。明日、試す必要がありそうだ。
「さて、寝るとしようか」
「ん、あぁ、そうだな」
ヘスティアはベッドの上で伸びて、コロン、と寝転がる。俺は床に枕を置いて、転移で掛け布団を取り出して自分に掛けて寝る。ちなみに俺達はもう歯を磨き終えている。部屋を照らしている明かりはベッドの近くにあるのでヘスティアがやってくれる。
それと、俺の【ステイタス】更新の時はベルはスヤスヤと寝ていた。
「おやすみぃ……」
「はいはい、おやすみ駄神様」
俺は掛け布団を被って、丸まって寝たのだった。その際、何故か俺の【神聖文字（ヒエログリフ）】が熱くなってあまり寝付けなかった。

七話

翌日、俺は寝ているベルとヘスティアを起こさないように教会の隠し部屋から出ていった。

ベルより早く起きた――というより【ステイタス】が熱くなってあまり寝付けなかったため、徹夜した。まぁ、試したいことがあるから別にいいけども。

俺はバベルにある簡易食堂に行き、軽目の朝食をとり、現在はダンジョンの13階層に来ている。

「神を思い浮かべる、か……」

昨日の羊皮紙に書かれた【ステイタス】を思い出し、俺は目を薄く閉じる。

神を思い浮かべたが、一番最初に浮かんで来たのはヴリトラだった。

漆黒の髪を持ち、アイズとは違った金色の瞳をして、鋭い牙をチラつかせながら笑うイケメン。

「ある意味で、このスキルは俺に対する罰みたいだな……」

だが、それでいい。なによりヴリトラを殺したという事実から目を逸らすことなく生きて行ける。

次に目を開いたとき、俺は自分の体を見回した。

目に飛び込んできたのは、漆黒の髪の毛だった。口元に手をやり、牙があるか確認。案の定鋭い牙があった。瞳の色は確認のしようがない。

「【刀神斬殺】の時とは違って、光は出ないんだなァ」

……あれ、何か口調が変だ。このどこか雑な言葉遣い。まさか、

「口調までもヴリトラと一緒かよッ！　巫山戯んな！」

思っていることは雑ではないのに、口に出すと雑になる。なんだろうこれは。この状態で知り合いなんかに会ったら、乱暴な奴、というレッテルを貼られてしまいそうで怖い。

「はぁ、一応ヴリトラになれたし、次は能力についてだな。確か、敵と

見なした対象を斬る、だったか」
口に出しながら俺は左手に《倶利伽羅》を転移させた。
手頃なモンスターがいないか探しに、ダンジョン内を彷徨する。いつもならすぐにでも現れるはずのモンスターがいないので、俺は少し困惑した。
「けっ、モンスターがいねぇんじゃ試しようもねぇな」
俺は雑な言葉遣いをしながら太刀を担いで歩く。
それにしてもどうもこの言葉遣いには慣れない。元々俺はそんなに雑ではないので、こういうのは違和感がある。それに、どことなくベートみたいな口調なので、抵抗がある。
「はぁ、一匹もいねぇな……どっかに転がってねぇかな」
言いながら、俺は下の層に潜っていく。しばらく歩いていると、モンスターの怒号と冒険者の悲鳴が俺の耳に届いた。
「お、やっとかよ。暴れてやる、よッ!!」
ドンッ！　と地面を蹴って飛び出し、モンスターに襲われ悲鳴をあげる冒険者達の所へ向かう。
通常時とのスピードの違いに、俺は驚嘆と呆れが入り交じった溜息を吐いた。
圧倒的過ぎる。このスピードだと敏捷のＳ　９９９の上限を超えているのではないかと思えて、笑える。
「……ぁあ……!!」
段々近付いてくる悲鳴を聴き、俺は内心焦り始める。
知らない冒険者達だろうが、ここで知らん顔を出来るほど俺は廃れたわけではない。
走り始めて十数秒が経ち、数十Ｍ(メドル)先にモンスターに囲まれ、攻撃を受ける少年二人と少女二人のパーティを組んだ冒険者達を視界に入れた。
「【転移(シフト)】」
魔法の名前を言い、自分自身を冒険者達の近くに飛ばした。
一瞬の浮遊感と目眩が俺を襲うが、それはすぐ回復し、太刀を抜く。
「てめぇらは、消え失せてろッ！」

大量にいるモンスターの内一体を屠る。すると、大量にいたモンスターは一瞬に掻き消えた。
冒険者達はその光景に息を呑んだ。俺も、奇妙な光景を見て、冷や汗を流す。
おそらく、俺のスキル、【神化の法】は視認し、敵と見なした対象を全部斬ることが出来るのだろう。だが、対象と言っても色々だ。その対象を人にしてしまえば大量殺人が可能となる。しないけど。
「これもチートだよなァ」
ははっ、と乾いた声を出す。俺は後ろにいる冒険者達を振り返って見た。
その冒険者達は有り得ない物を見たかのような表情をしている。少し傷付く。
「全員生きてるかァ？」
俺のその一言で、冒険者達はビクッと肩を震わせた。
俺はしまった、と思って【神化の法】を解いて元の栗色の髪と碧眼の姿に戻した。
「悪い、驚かせちゃって」
出来るだけ優しい笑顔を見せて、喋りかける。だが、通常時の俺の姿を見せても驚いた表情をしている。
どうしたのだろうと思い、二人いる少年のうち一人、青い髪をしたそばかすがある少年に訊いた。
「あの、大丈夫なのかな？」
「け、け……！」
「け？」
「「「【剣王】っ!?」」」
「ぶふっ!?」
あまりにも大きな声＋一番聞きたくなかったことを言われ、俺は吹き出した。
なんで、ここで出てくる!?　最近聞かなくなったから大丈夫だと思ってたのに、どうして!?
「す、すごい！　本物の【剣王】アルスさんだっ」

「あの！　私、貴方に憧れて冒険者になったんです！」
「僕もなんです！」
モンスターにではなく、冒険者に囲まれた俺は目をパチクリさせる。それと、今聞き捨てならないことを聞いた。
俺に憧れて？　俺がＬｖ．２に上がって二つ名を貰ったのは四年前だ。
それに、Ｌｖ．２になるにはとてつもない苦労をする。通常なら一つのＬｖ．を上げるのに数年かかる人だっている。それくらい苦労するというのに、この冒険者達はそれをあっさりと？　とてもじゃないが、この冒険者達がＬｖ．２か３には見れない。
「えと、君達のＬｖ．を聞かせてもらってもいいかな？」
念のため聞いておこうと思った。ここでもし、Ｌｖ．１なら、どうしてここに来たのか聞かねばならない。
「俺たち、Ｌｖ．１です」
「何？」
俺の予想は当たったようだ。俺は眉を顰めて、この四人の【ファミリア】について聞いてみる。
「所属している【ファミリア】は？」
「【アナト・ファミリア】っていうところですけど。……あの、何故そこまで？」
アナトか。なら、フウの後輩だな。後はどうしてここにいるのか聞くだけか。
「なぁ、Ｌｖ．１の君達が、なんでここに？」
「ぁ……それは……」
俺が訊くと、獣人であろう少女が目を泳がせて、言い淀んだ。他の三人もどこか言いづらそうな表情をしている。
「アル？　どうしたの？」
四人の冒険者の返答を待っていると、後ろから声が聞こえた。
その声の主は、出来れば今ここで来て欲しくなかった人だ。
「け、【剣姫】」
「アイズ・ヴァレンシュタイン……」

金色の長い髪を揺らし、アイズは俺に近付いてきた。俺は彼女にジト目を送って挨拶をした。
「よう、アイズ。出来れば今は来て欲しくなかった」
「迷惑だった……？」
アイズはしゅん、として俺を見つめてくる。俺は頭を掻いて視線を逸らした。何故なら、そのままアイズを見ていたら、彼女の頭を撫でていただろうからだ。
「いや、迷惑じゃないけど。今は、な」
「？　そう言えば、この子達は？」
この子達、って。十六のお前とさほど変わらないだろ。
俺はまぁいいか、と思って紹介した。
「【アナト・ファミリア】の冒険者達だよ。しかも、Ｌｖ．１」
俺がそう言うと、アイズは少し目を見開いて冒険者達を凝視する。
「どうして、この階層に……？」
アイズも俺と同じように冒険者達にそう問う。冒険者達は先程と同じく、目を泳がせているだけだ。
「ちゃんと話してもらえないかな。正直、Ｌｖ．１で１０階層以下の階層に来ること自体普通じゃない」
「……人のこと言えないと思うけど」
俺が言うとすかさずアイズがツッコミを入れた。しかし、ここで入れられてしまっては元も子もない。とりあえず、俺のことはどこかに置いてもらいたい。
「ンンッ、で、話してもらえる？」
「……」
咳払いをして四人に訊く。だが、四人は一様に黙ったままだ。
しばらく待っても何も答えない四人を怪訝に思ったのか、アイズはエルフの少女の顔を覗き込んで見る。すると、
「【解き放つ一条の光、聖木の弓幹（ゆがら）。汝、弓の名手なり。狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢】」
「っ……！」
いきなり魔法の詠唱式を早口で唱え、光の矢をアイズに向けて放っ

た。
「アイズ！　そのまま後退しろ！　俺が片付ける」
俺の指示を受けて、アイズはそのまま後退した。しかし、光の矢は後退するアイズを追従する。
俺は太刀を鞘から抜いて、刀身を地面に突き刺した。
「レフィーヤの方が威力はあるな……護の太刀っ！」
刀身に夜空色の光を纏わせて、そのまま地面に流し込む。その光は地中を這い進み、アイズに迫る矢を地中から出てきて阻んだ。
それにしても、何かいい名前があったのではないかと思う。なんだよ『護の太刀』って。まぁいいけど。
「君達、アナトのところじゃないよな……」
俺は太刀を構え、四人を睨みつけて言う。
何故【アナト・ファミリア】の所属ではないと思うのかと言うと、アナトは愛と戦いを象徴する女神のため、【アナト・ファミリア】の構成員はまず対人戦闘はしないからだ。
「ちっ、バレたか」
「当たり前ですよ、理由を言わなかったんですから。テキトーにでっち上げれば良かったのに」
一人称が俺、と言っていたヒューマンの少年と獣人の少女がそう話す。そこで、もう一人の青い髪にそばかすがある少年が俺の方に向かって話しかけてくる。
「どうしてここにいるか、でしたよねアルスさん」
「あぁ、どうしてだ？」
「それはですね……」
対人戦という緊迫感を感じ、俺とアイズは己の得物を構え、相手側も得物を構える。
そして、一拍置いた少年は口を開く。
「貴方を殺すためですよ、アルスさん」
あまりにも突拍子もないことを言われ、俺とアイズはただただ目を

見開いただけだった。

八話

殺す、その言葉は冗談で言っていいものではない。
まぁ、以前俺はベートに向けて殺してやろうかとか思っていはいたが。口には出してなかったはずだ。
しかし今回、俺とアイズの目の前にいる少年は確かにそう言った。俺を殺すと。
「何故、俺を殺す？」
「……テウル様が、貴方を殺すように僕達に命じたからですよ」
「テウル、だと？」
その名前を聞いた瞬間、背中が粟立った。脳裏に奴の顔が映る。
俺の狼狽ぶりを見て、不思議に思ったアイズが近寄る。
「アル？」
俺に話しかけてくるが、俺は反応する余裕がなかった。右腕が震えて、その震えが構える太刀にまで伝わる。
「今度は、俺の命を奪いに来たか……あの馬鹿兄貴は……!!」
歯を食いしばって、俺は忌々しげに吐き捨てた。

♠???
♣？♦？

兄貴、そうアルスは言った。
それを聞いたアイズは驚いた。アルスに兄がいるというのに驚き、その兄が弟であるアルスを殺そうというのにも驚いた。
「それで、あの馬鹿兄貴はなんて言ってた？」
トーンを低くして、眉間にシワを寄せるアルスの顔は、アイズが見たこともない程怒りを孕んでいた。
「あの方は、〝アルの一番大切なものを奪え〟と仰っていました」
「ふぅん、それで俺の命か……」
そう言うアルスは表情を一変させ、呆れたと言うような表情を見せてアイズを見た後、口を開いた。

「悪いな、俺の大切なものって、そう簡単に奪わせない。それにまだちゃんと伝えてないし」
アルスはクスクス笑って太刀を地面に突き刺した。そして彼は、だが、と続けた。
「奪えるものなら奪ってみろよ。俺の大切なもの自体知らないのにさ」
四人はアルスの大切なものを自分の命と勘違いしていた。しかし、彼の大切なものは自分が好意を寄せるアイズだ。それを知らないこの四人は、アルスの大切なものを奪うことはできない。
それにアイズ自身は第一級冒険者だ。そう簡単に殺されはしない。返り討ちにしてしまう光景しか浮かばない。
「自分の命じゃないのかよ……」
「これは、一杯食わされましたね」
アルスとアイズの目の前にいる少年以外の三人は苦い顔をして、撤退しようとジリジリ後退する。しかし目の前の少年はまったく表情を崩さなかった。
「なるほど。貴方の大切なものとは、そこにいる【剣姫】でしたか」
「……観察が得意みたいだな、少年」
アルスは目を細めて、目の前にいる青い髪にそばかすがある少年を見た。アイズは、少年の言葉を聞き、えっ、と戸惑いの声を上げてアルスを見た。
「どうするつもりだ？　Ｌｖ．１のお前達じゃ、Ｌｖ．６の俺とＬｖ．５のアイズに勝てると思ってるのか？」
「えぇ、勝てると思っていますよ。この魔剣があればね」
少年が取り出したのは、黄金に輝く短剣だった。だが、その黄金は綺麗な色ではなく少し濁ったような輝きを放っている。
「貴方のその太刀も、魔剣ですよね？　じゃなきゃあの光は出ない。もうそろそろ魔剣の方は限界なのでは？」
得意げに笑う少年を見て、アルスとアイズは溜息をついた。溜息をついた二人に少年は苛立たしげに問う。
「何故、そんなに余裕でいられるんです」

「何故って、なぁ？」
「……うん」
頷き合う二人は可哀想な人を見る目で、息を合わせて言う。
「「魔剣はその人自身の力じゃない」」
「……くっ」
二人の指摘を受けて、少年は後ずさった。
二人の意見は最もだ。魔剣はその人自身の力などでは決してない。もちろんアルスの神剣も同様だ。
だが、少年は首をブンブン振って、魔剣を振りかざした。
「このっ……！」
黄金の光がアルスとアイズを襲う。アイズはそれを防ごうとして《デスペレート》を構えるが、アルスは何もせずにただ立っているだけだった。
すぐに黄金の光が二人を飲み込んだ。やったかと少年はにやりと笑う。
しかし、光は二人を飲み込んだと思った時には掻き消えていた。
「そんな……」
「なんだよあれ」
「……モンスター達に向けた攻撃と同じ……？」
光が掻き消え、そこに立っていたのは無傷のアイズと、髪と瞳の色が変わったアルスだった。
「ッたく、面倒くせぇな。なァ、アイズ？」
「……う、うん……？」
アルスの姿が突然変わり、口調も変わったので、アイズはパチパチ目を瞬かせた。
「あ、あとな、これ、魔剣じゃなくて神剣な。不壊属性（デュランダル）付いてるし壊れねぇよ」
普段なら見せない軽薄な笑みを浮かべて、アルスは一歩、前へ歩いた。それと同時に、彼が放つ神々しい雰囲気に気圧されて少年は後ずさる。
「なんだァ、ガキ。俺が怖ぇか？」

「な、なんなんですか、貴方は……っ！」
「あァ？　何って、俺は第一級冒険者、【剣王】アルス・レイカーだが？」
　面倒くさそうにアルスは棒読みでそう言う。現在、彼の眼は面倒になってきたので若干眼が死んでいる。
　少年は子供がよくするイヤイヤして、怯えで震える声を出す。
「ち、違う……貴方は、か、神ヴリトラ……」
「そりゃそうだろうなァ。なんせ、この力はアイツの力だからな」
　アルスが言い終えた後、少年の横の壁に亀裂が走った。そこから現れたのはキラーアントよりも光沢があり、ゴツゴツした殻を持ったモンスター、『ラーピーアント』二体だった。
　ラーピーアント二体は少年に襲いかかるが、攻撃を仕掛けるまで残り数Ｃ（セルチ）のところで掻き消えた。
「敵と見なした対象を斬る能力なんだってよ、俺のコレ」
　太刀をブンッと切り払って、アルスは少年に突きつけた。
「てめぇは、この力の前で何が出来る？　抗えるか？」
　勝ち誇ることもなく、彼はただただ面倒臭そうに言うだけ。
　その光景をボーッと見ているだけのアイズは無理だろうな、と思った。青髪の少年の後ろにいるヒューマンの少年、エルフの少女、獣人の少女は腰を抜かして立てないでいる。青髪の少年は俯いて、何も言わない。
　それを好機と見たアイズは未まだヴリトラの姿でいるアルスに話しかけた。
「……アル、この子達、拘束した方がいい？」
「ん？　あァ、その方がいいな。コイツらはギルドに突き飛ばして事情聴取した方がいい」
　どうなるか知らんがな、と最後にアルスは言って転移で出現させた数本の長い縄をアイズに半分渡して青髪の少年、ヒューマンの少年を縛り上げた。アイズも少女二人を縛って、アルスの下へ連れていく。
「完了っと……悪かったなァ、アイズ。巻き込んで」
　振り返って、アルスはアイズに微苦笑を見せて言った。彼の綺麗な

黄金色の眼とアイズの金色の眼が合う。
神秘的なアルスの眼に見つめられて、アイズは若干頬を赤く染めて視線を逸らした。
「どうしたァ、アイズ？」
「なんでも、ない……」
普段とは違った姿、違う口調、尚且つ見つめられ、アイズは胸が締め付けられるような感覚に陥ってしまい、どうしたらいいか頭が混乱している。
対してアルスは、そんなアイズのことなど露知らず、四人の冒険者達を縛る縄を握って、次にアイズの手を握った。
手を握られたアイズは一瞬ビクッと肩を震わせ、アルスを見た。
「っ……あ、アル……？」
「ん？　あァ、悪ィな、ギルドの連中に事情話さないといけねぇからアイズにも頼みてぇんだ」
「う、うん……わかった……」
頷くアイズだったが、アルスの手がアイズの手を握っており、彼女は顔を赤くして俯くことしか出来なかった。
アイズの行動がいまいち分からないアルスは、首を傾げる。
「んじゃあ、このまま転移するからなァ。【転移（シフト）】」
アルスは詠唱式を唱えて、四人の冒険者達とアイズと一緒にギルドへと転移していった。

♠???
♣？♦？

ギルドに着いた俺達は軽い目眩に襲われたが、すぐにそれは治った。
俺は神化を解除して普段の姿に戻って、ギルドの職員を探す。
ちなみに現在、ギルドの中にいるのだが、突然人が虚空から現れるのははばかられると思い、人の目があまりないところに転移しているので大丈夫だ。
「あ、アル……そ、その……」

「なに、アイズ？」
躊躇いがちにアイズが話しかけてくるので、俺は彼女の方を振り向いて訊ねる。もじもじするアイズを見て、俺は一瞬可愛いなぁ、と思ってしまった。
いや、可愛いんだよ？　ただ、今はこの四人を突き出さないとさ。
「さっき、その……その子が言ってた、アルの大切なものの話……」
その子が、と言ってアイズは未まだ俯いている青髪の少年を指差して、さっきの話の件を俺に訊く。
「あ、あぁ……その事か。それは、また今度な……」
変な汗をかいて、俺は逃げるように別の機会に移した。
俺の言葉を聞いたアイズは、少し残念そうに俯いていた顔を一層俯かせる。当然、俺だって四人（こいつら）を突き出した後にでもアイズに話したい。だが、俺はまだ、彼女に言えないでいる。
「……さて、早く終わらせてもう一回ダンジョンに篭もりたい」
まだ朝の八時くらいだ。これから少し深い階層に行っても大丈夫なはずだ。
「……うん。アル、私もアルについて行っていい？」
「あぁ、アイズがいれば、楽になるからな。一緒に行こう」
俺は彼女に向けて頷き、四人をズルズル引き摺ってギルドの中を歩いた。
それから、俺とアイズは四人を引渡して軽い事情聴取を受け、すぐに解放された。四人のことが分かり次第俺達二人のところに連絡が来るそうだ。
おそらくだが、俺が思うにあの四人はそう簡単に口を割らないだろう。だが、俺が事情聴取を受けた時に、俺はあの四人と俺の兄貴が繋がっていることを話した。後は、時間の問題だ。
馬鹿兄貴一一テウル・レイカー。奴だけは、許さない。俺から両親と、あいつを……ヴリトラを奪った奴だけは……！

九話

アルスとアイズの二人がダンジョンに篭っている間の出来事。
ベルとリリルカはダンジョンから出て来て、ギルドで換金を済ませて今回の報酬を確かめていた。
「に、二六〇〇〇ヴァリス!?」
Ｌｖ．１冒険者一人、サポーター一人のパーティで、これだけの金を稼いだ。
Ｌｖ．１の冒険者五人のパーティが一日かけて稼ぐ金額をたった二人で叩き出したのだ。普段アルスがいてこれ以上の稼ぎがある【ヘスティア・ファミリア】だが、アルスが【ファミリア】に入れるお金は一日一回というわけではない。二日に一回だったり四日に一回だったりする。何故なら、アルスは時々ダンジョンに篭って帰ってこないからである。
「凄い、凄いですよベル様！　ベル様お一人で二五〇〇〇ヴァリス以上稼いでしまいました!!」
「いやぁ、ほら、兎もおだてりゃ木に登るって言うじゃない！それだよ、それ！」
「何を言いたいのかリリには全く分かりませんが、とりあえず便乗しときます！　ベル様凄い！」
「褒め過ぎだよぉリリぃ！」
興奮の度合いが酷いことになっているベル。もしここにアルスがいれば抑制されるかもっと酷くなっているはずだろう。それ程に酷い状態だ。
ギャーギャー騒ぎ、笑う二人。二人がいるのはバベルの簡易食堂。そこには二人以外いない。他の者は皆、それぞれ気に入っている酒場にでも足を運んでいるはずだ。
「……ではベル様、そろそろ分け前を……」
「うん、はい！」
どさっ、とベルは、二つある亜麻色の袋を一つ一一三〇〇〇ヴァリ

ス入っている一一取ってリリルカの方に渡した。
「へ？」
「あぁ、これなら神様にもっと美味しいものを食べさせてあげられるかも……！」
ベルはヘスティアに恩返し出来ると思い、握り拳を作って想像に耽った。
隣にいるリリルカは、これだけの金額を何故独り占めしないのか、そう不思議に思い、目を点にしている。
「ベル様、これは……？」
「ん？　分け前だよ、決まってるじゃん！　あ、そうだ。リリ、良かったらこれから一緒に酒場に行かない？　僕、美味しいお店知ってるんだ！」
つい先日にそのお店に行きたくないと告げられたにも関わず、ベルはその店、『豊饒の女主人』に行こうと言う。しかしベルは、〝まぁ、いいよね！〟と思っていた。
「じゃあ、行こうリリ！」
「ベル様！」
善は急げと言わんばかりに荷物をまとめるベルに、リリルカが呼び止め、もごもごとその小さな唇を動かす。
「ひ、独り占めしようとか……ベル様は思わないんですか？」
「え、どうして？　僕一人じゃこんなに稼げなかったよ。前まではアルさんがいたからもっと凄かったけど、僕とリリだけでこんなにも稼げたんだ。リリがいてくれたからだよ」
言って、ベルは笑顔を見せて、すぐに口を開く。
「だから、ありがとう。これからもよろしくね！」
ベルがそう言うが、リリルカは黙って俯く。そんなリリルカに、ベルは笑って手を伸ばした。
「リリ、ほら、行こう？」
ぼぉーっとベルを見上げるリリルカは、差し出された手をじっと見て、おずおずと彼女はその手を取った。
「……変なの」

その小さな呟きを、興奮するベルは見事に聞き逃した。

♠???♣?♦?

夜、俺はアイズをホームに届けるために、彼女と一緒に夜の道を歩いていた。

……しかも彼女と手を握った状態で。

「……」

「？　どうしたの、アル？」

「いや、なんでも……」

アイズは首を傾げて俺の顔を覗き込む。俺は彼女と手を繋いでいる状態が恥ずかしいのか、少し赤くなっているであろう頬を見せないために顔を背ける。

「……むぅ……」

「な、なんだよ、アイズ」

「アルが顔を背けるから」

「別にいいだろ……」

小さく頬を膨らませるアイズを見て、俺は少し呆れたように呟く。

そういえば、まだ手を繋いでいるのか説明していなかったと思う。何故手を繋いでいるのかと言うと、今朝の件で巻き込んだ罰として、ということらしい。

アイズが満足しているのならそれでいいのだが、これは俺にとっては生殺しもいいところである。

ふと、俺とアイズの耳に、誰かの特大の号泣が聞こえてきた。

「なんだ？　どこかで聞いたような声だけど」

「泣いてる、のかな？」

「だろうな」

コテン、とアイズはその金色の髪を揺らして首を傾げる。俺はどこで聞いたっけな、と思いながら目を瞬く。

号泣の源に足を運ぶ俺達は、その場所に着いた途端にピシリと固まってしまった。

「君が笑っていてくれればボクは下水道に住み着いたっていいぜ!?
それくらい君のことが好きなんだ！　ぶっちゃけ同じベッドで寝たいんだギュウギュウしたいんだ君の胸にぐりぐり顔を押し付けたいんだー!!　一日中君にくっついていたいんだー！　君が微笑んでくれればボクはパン三個はいけるんだー！」
　来なければ良かったと、俺は後悔した。まさか、ここまで駄神様だったとは思わなかった。
　俺とアイズが着いた場所は大通りから少し離れた路地に建つ酒場。そこには俺の主神、神ヘスティアと【ミアハ・ファミリア】の主神、群青色の髪をした美青年の容姿を持つ神ミアハがいた。しかもうちの駄神様は泥酔状態。
「ミアハ、大丈夫か？」
「あ、あぁ……アルスか。頼む、なんとかしてくれ」
　ミアハでもお手上げで、ドン引きまでもしている。隣のアイズをチラッと見ると、金色の眼をぱちぱち瞬かせると、少し考えていた。
「愛してるよベルくーんっっ!!　……えへへぇ、一度でいいからベル君への想いをぶちまけてみたかったんだー。ふふぅ、すっきりー」
「当人がいなくて良かったな」
「全くだ。あ、ミアハ、勘定なら俺が払うよ。この駄神様のお詫びとして」
「む、すまないなアルス」
「いいって」
　すまなさそうに眉を下げるミアハに、俺は笑って店主に勘定を済ませる。
　にしても、この駄神様、まだ俺がいることに気付いてないな。ここまで酔うか、普通？　酒を飲んでも呑まれるなってこと知らないのかよ。
　俺ははぁ、と溜息をつく。ヘスティアをミアハに任せておき、俺は未まだに考え事をしているアイズの手を引いて歩いていく。
「少し……分かる、かな……」
　小さく、アイズはそう呟いた。

「何がだ？」
「神へスティアの、言ってたこと」
……聞かなかったことにしよう。うん、そうしよう。
俺は冷や汗を流しながら歩く。何故冷や汗を流すか。それは、
「私も……アルと一緒に、いたいし……」
この発言があるからだ。
アイズの呟きを聞いても、俺は黙って足を動かす。
しばらくお互い無言になり、聞こえる音は地面を蹴る二つの足音だけ。
「……アイズ……もうちょっと、待っててくれ」
もう【ロキ・ファミリア】のホームまで目と鼻の先のところで、俺はアイズの方へ振り返って言った。
「……うん、待ってる……」
アイズは感情の変化に乏しいながらも、微笑んで頷いてくれた。
俺も微笑んで、帰ろうとして背を向けた。しかし、後ろからアイズに声をかけられる。
「明日、六時に晩御飯、一緒に食べよう？」
「……了解」
さっきの会話はなんだったんだろうと、この時俺はそれで頭がいっぱいだった。

♠???♣？♦？

「ぬあぁぁぁぁぁっ……!?」
目を覚ましたのであろう、うちの駄神様が苦悶の呻き声を上げる。
それを聞いた俺は哀れに思い、同時に当然だろうなとも思った。
「大丈夫ですか、神様？」
ベッドのすぐ側で、ベルが水の入ったグラスを片手に持って心配そうにへスティアを見つめる。
「す、すまないベル君。こんな見苦しいところを……。アル君、君はなんでそんな哀れな神（ひと）を見るような眼で見てるのかな……？」

「べっつに～？」
普段とは打って変わった弱々しいヘスティアを見て、俺は笑い転げたい気持ちを抑えて、手に持ったアイズから貰った指輪を磨く。
その後、ベルにダンジョンに行かなくていいのかとヘスティアが訊いたり、林檎をすり下ろしたものをベルがヘスティアに食べさせたりしていた。
「う……うぅー、頭がー」
「か、神様？」
「……うわ、棒読みとか」
酷い棒読みをして、彼女はぐらりと体を傾けてベルの胸の中に頭を乗せた。ちょうど、ベルに抱きとめられる格好である。
ヘスティアは頬を紅潮させて、さらに顔をうずめた。終いには調子に乗り、すがりついている。
「か、神様っ？」
慌て始めるベルの声を聞きながら、俺は誰にも聞かれない音量で呟いた。
「……神様（失笑）……」
そう呟いた俺は間違いではないと思う。
しばらく、ベルとヘスティアの離す離さずの攻防戦は続いた。

十話

あの後、ベルとヘスティアはこの前のサポーターに志願してきたリリルカ・アーデの件を話していた。
ベルはどうやら昨日、そのリリルカと一緒にミア母さんの酒場に行ったようだ。
ちなみに、俺とアイズは昨日のご飯はジャガ丸くんの小豆クリーム味を二、三個で終わらせている。
そして今、ベルはヘスティアに夕食に、少し贅沢な食事をしないかと誘っている。
「アルさんも、どうですか？」
「ん、そうだな。いつもベルと二人だったし、たまには三人で食べに行きたいな」
磨き終えた指輪を指に嵌めて、俺は笑顔を向けるベルにそう言う。
俺はヘスティアの方をチラリと見た。彼女の表情は有頂天丸出しとなっている。
絶対ベルとデートだと思ってんだろうな、ヘスティアの奴。
「神様が元気になったら、今度にでも……」
「今日行こうッ！」
「え」
「今日行くんだ！」
ベルがヘスティアの体調を気にして、今度に回そうとしたところで、ヘスティアがお馬鹿発言をする。当然、ベルはその発言で戸惑う。
「ヘスティア、体調は？」
「治った！」
俺はその言葉を聞いて調子がいいことで、と思った。
まぁ、今日行くんだったら丁度いいかな。ベルとヘスティアの二人っきりで食事出来るし。俺は俺でアイズとだし。
「え、っと……アルさんは大丈夫です？」
「俺は今日、アイズとだから遠慮する。だから二人で楽しんでこいよ」

小声で俺に話しかけてきたベルに、俺は目を細めて笑いながら言い、彼の肩をポン、と叩いた。
「ベル君、六時だ！」
「は、はい？」
「六時に南西のメインストリート、アモールの広場に集合だっ！」
この食事で、良い進展があるといいなと俺はそう思いながら、戦闘用の黒色のコートを羽織った。

♠???
♣？♦？

「お邪魔しまーす。《黒雷（コクライ）》取りに来ましたー」
昨日のドロップアイテムを売り払った後、俺は【ゴブニュ・ファミリア】へと来ていた。
俺の愛用している小太刀二本一一《黒雷》一一は、俺が一人遠征の時に芋虫型のモンスターを斬った時に消耗したため、二週間の間、ここで研磨してもらう予定だった。
しかし、この間フウに魔剣を貰った時に、当分かかると伝言で伝えられ、今に至るというわけだ。
「よう、アルス！　お前の小太刀、もう出来てるぞ！」
「お、ありがとうございます、親方さん」
俺はお代が入った金が入った亜麻色の袋を親方さんに手渡し、代わりに小太刀二本が入った縦長の袋を受け取る。
「そうだ、ついでに《倶利伽羅（クリカラ）》の研磨、お願い出来ます？」
「おう、いいぞいいぞ。お前は【大切断（アマゾン）】と違って酷いことしないからな。大歓迎だ！」
「あ、はは……」
どれだけこの人はティオナのことが嫌いなんだろうと、褐色肌の活発な子を脳裏に浮かべながらそう思った。
《倶利伽羅》を簡単に研磨してもらい、俺は久しぶりに二本の小太刀の重みを感じ、軽快な足取りでダンジョンに潜って行った。

「さてさて、六時に間に合うように探索でもしますかね」
今から３０階層付近に行って、数時間後に転移で戻ってシャワー浴びて、服装を変えれば……。うん、間に合うかな。
今日の予定を頭に叩き込み、俺は深層まで走っていく。
『グウォォォッ！』
『ヴゥモオォッ!!』
走っている最中に何体かのモンスターが産まれ落ちて俺に襲い掛かってくる。
俺は《黒雷》を二本とも抜き放ち、モンスター達をバラバラに斬り裂いていく。
後ろをチラリと見ると、ミノタウロスがその大きな腕を横薙に振るう瞬間だった。俺は脚に力を入れて空中に跳び、身体を捻ってミノタウロスの首を撥ねる。
この出来事を三秒。少し遅いと思う。最低でもあと一秒縮めたいところだ。
俺は地面に転がる『魔石』を視認し、全てホームにある倉庫に転移させた。
「さて、『ゴライアス』と殺り合ってもいいけど、十分か二十分はかかるからな……。その分ロスになるし……」
ゴライアス、というのは１７階層にいる『階層主』のことだ。黒い髪に浅黒い肌を持つ巨人型モンスターだ。
ただまぁ、俺が怪物祭の時に狩った『魔神』よりは小さいけど。
それに、今回は帰る時以外に【神化の法（ゴッド・リーガル）】を使う予定はない。アレは本当にやばくなった時だ。
「ゴライアスは無視するか……。ま、その分多く稼げばいいし」
言いながら俺は《黒雷》をチン、と音を立てて鞘に納め、また深層に向けて走り出した。
深層へ行こうとする俺を邪魔するように、モンスター達がワラワラと群がってくる。しかし俺は、二本の《黒雷》を抜刀して腰溜めに構え、光速の突きを二撃見舞う。
その突きは、前にいたモンスターは勿論、後ろのモンスター達まで

受けており、頭が無くなっていたり心臓部を貫かれていたりしていた。
今の技は、一ノ型・紫電という。
光速の強烈な突きを放つこの技は、比較的軽めの技だがＬｖ．１からＬｖ．３の冒険者では目で追うことは不可能だ。
俺は転がる『魔石』を一瞥し、すぐに転移させて、また走り出す。
風の如く走る俺に、モンスター達は立ちはだかろうとするが、その前に俺が斬り刻んでいく。

数分後、俺は３６階層に到着した。
そして今、俺の眼前には骸骨型モンスター『スパルトイ』五体とトカゲ男、『リザードマン・エリート』六体の計十一体のモンスターが陣取っている。
この二種類のモンスター達は、通常ならあと一階層下に出現する。まぁ、一階層上がってきたところでどうということはないが。
「そういえば、今何時だろ？　昼くらいかな……？」
モンスターを目の前にして、俺はそんな呑気なことを言う。
実際このモンスター達は俺にとってそれほど強敵ではない。故に、先程のように呑気なことが言えるのである。
「よっ、と……！」
六体のリザードマン・エリートの内一体が、仕掛けてこない俺に痺れを切らして突撃してきた。俺はそれを見切っていなし、リザードマン・エリートの背中を切り付けた。
一体が飛び掛ったせいか、残りのモンスターも飛び掛ってきた。しかし、俺は焦らずに次の型に移るために構える。
「番外ノ型・終弾」
呟き、俺はその場で回転する。黒雷を握る手に力を入れ、回転する度に小太刀を力一杯に振るう。
技名通りに、散弾銃に撃たれたように吹き飛ぶモンスター達は壁にぶつかり、その身を灰へと還した。
「さぁ、もういっちょ行くかっ！」

戦いによって興奮してきた俺は、少し軽薄な笑みを浮かべて奥へと走り出した。

♠???♣?♦?

「……はぁ、緊張してきた……」

ダンジョンから帰ってきた俺は現在、【ロキ・ファミリア】のホーム、『黄昏の館』から少し離れた所にいる。

あれから、俺は『階層主』を無視して４０階層まで行き、モンスターを斬り刻んで帰ってきた。

ちなみに、大暴れすることが出来て楽しかったと述べておこう。

「心臓が保つかどうか……」

左胸を押さえて、俺は溜息をついた。

瞬間、背中から軽い衝撃がくる。

「アールっ、何してるの？」

綺麗なソプラノの声を聞いて、俺はうんざりしたような目を向ける。

そこにいたのは銀色の長髪にアイスブルーの瞳を持つ美少女、フウ・リンクスだった。

「別に何してようが関係無いだろ」

「えー、関係あるもん」

「どんなだよ」

「アルの彼女♪」

ゴスッ、と俺はフウの頭にゲンコツを見舞った。

「いったぁぁぁっ！　何するのよ、アル！」

涙を浮かべながら頭を押さえ、フウは俺を睨みつけた。

「変なことを言うお前が悪い」

「それでも殴ることないじゃない！　こんなか弱い少女に殴るなんて、頭のネジが二、三本取れてるんじゃないの？」

「お前より取れてない」

というより、どこにか弱い少女がいるのだろう。『神の恩恵（ファルナ）』を貰っ

ていない一般の女の子達以外ならどこにもいないんじゃないだろうか。
「何それ!?　じゃあわたしは変人ってわけ!?」
「それ以外にないだろ」
「なんですってぇぇ!?」
顔を引き攣らせ、フウは青筋を浮かべて俺ににじり寄る。今にも噛み付かれそうだ。
ちょっと弄り過ぎたかな、と思いつつ俺は【ロキ・ファミリア】のホームを見る。
ちょうど、ホームから出てくる人がいた。その人物は金色の長い髪を揺らして朱色の髪をした人物を引き剥がし、そのまま出て行く。察しがつくだろうが、アイズとロキだ。
「フウ、邪魔だ退いてくれ」
「えー!　やだ!」
このままフウが俺と一緒にいたらアイズにどんな誤解されるか分からない。
というか、フウとアイズって会ったことあったか?　俺の記憶が正しければ無いと思うが……尚更こいつを退かすしかないな。
「マジメに退いてくれよ、フウ。俺は用事があるんだ」
「どんな用事よ?　……まさか、あの【剣姫】と――」
目を見開いて、彼女は冷や汗を垂らす。理由は解らないが、動揺しているうちに俺はスタスタとフウの横を通り過ぎる。
ちらりと彼女の様子を伺うと、俺が通り過ぎた事など気付いていないように見える。
まぁいいか、と銀髪の少女から目を離し、俺はアイズの元へ歩みを進めた。